

私の同居人(ペット)は
狼女です。

凜之介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事も家事もダメダメな社会人の鈴木 林檎。

そんな林檎を支える、生活力に溢れた狼女のミカン。

友達のように、家族のように、恋人のような不思議な関係。

一人(女)と一匹(雌)の、百合な同居生活。

目次

君は愛しの同居人（ペット）	1
君と週末の介抱	4
君の匂い、煙草の匂い	8
君の声だけで私は	11
君と居たいのに	15
君と居たいから	19
君と見たい景色	22
君の好きな音	26
君の体温を感じて	30
君と過ごす聖夜	33
君を誰かにとられたくなくて	37
君を私のものにしたくて	41

君と買い物、君とお揃い	44
君と昼寝日和	48
君に酒の勢いで	52
君のことを守りたくて	56
君のすべてを愛してる	60
君の恋人は私だから	65
君が可愛すぎて、つい	69
君への本命チョコレート	73
君の為なら頑張れる	77
君に癒してほしくて堪らない	81
君が格好良くないわけがない	85
君に振る舞う料理	88
君への唯一の恩返しだから	92

君と夢見心地

97

君の眠り姿につい

144

君の腕の中

101

君の初めての酔った顔

148

君を見てると我慢できない

105

君とお出かけナウ

152

君と甘味と幸せな日々

108

君が不機嫌な理由

156

君が浮気をするなんて

112

君に手を差し伸べた日のこと

160

君の照れ顔が見たくて

115

君と出会って変わったこと

164

君は酒に溺れ、私は君に溺れ

119

君しかいないから

168

君の好きなところ

123

君と赤面と火照る身体

172

君がいないと駄目なんだ

127

君を魅了するもの

176

君の帰りが待ち遠しい

130

君に初恋をした瞬間

180

君のことが知りたくて

134

君が好きでたまらない

184

君が見てくれないから

138

君が隣にいることが

188

君の眼中に私はいない

141

君は私のもの

191

君と深夜に“悪いこと”を	195
君との面倒くさいこの関係	199
君の今の心情を答えよ	204
君の知らない私の親友	208
君の知らない私の想い	212
君の知らない私の秘密	216
君の知らない私の変化	220
君の知らない私の罪悪感	224
君の知らない私の想い人	229
君の知らない私の決意	233
君の知らない私の今	238
君の知らない私の同居人	244
君しか知らない私の愛情（前編）	

君は誰にも渡さない	260
君の髪の毛に魅せられて	265
君の知られざる特技	269
君の手のひらの温もり	276
君と育みたい緑色	281
君と育んでく緑色	285
君で満たされた人生	293
君の歌声に聴き惚れる	298
君から滴る雫	305
君の言いなりになるから	312
君しか知らない私の愛情（後編）	

君と私の母親

君から零れる甘え声

君の元カノ、私の彼女

333 329 318

君は愛しの同居人（ペット）

上司に絞られ、同期からは呆れられ、周りに迷惑をかけてばかりな駄目OL。それは誰かつて？ 言わずもがな、私である。

普段からミスは多い方だが、最近忙しさに拍車がかかり、通常の三割増しでミスをしている。上司は怖いがこんな私を雇い続けてくれる会社である。見限られないよう、一心不乱に働いた。

だからと言って、懸命さとミスの量は比例していないのだが……。

もしもこれで一人暮らしでもしていようものなら、仕事の疲れを理由に家事をすべて怠り、拳句の果てには孤独死していたと思う。いや割と本気で。

不器用な私は仕事はおろか、家事もからつきし苦手なのだ。

だがしかし、我が家には私の帰りを待っている家族がいる！ まあ愛犬が一匹だけなのだが。

「おかえり林檎。今日は寒かったろ、風呂湧いてるぞ」

玄関扉を開ければ、愛犬が優しく微笑みながら出迎えてくれる。

「そうだ。リクエストしてたカブと柿の酢の物。作っておいたからな」

正しく言えば、犬ではなく狼だ。言うなれば、愛狼^{あいろう}？

「あ——あと」

私の上着を受け取りながら、愛しの狼は頬を赤らめて私の頭を撫でた。

「今日は満月だから……毛深くなる。夜の運動は……我慢してくれ」

もつともつと正しく言えば、狼ではなく、人狼だ。狼女だ。

灰色の髪を雑にくくった彼女は、私の同居人——もとい、ペットである。



「別に毛深くなっても私は気にしないのになー。ミカンは恥ずかしがり屋さんだね」

「そうか、酢の物いらんのか」

「ごめんなさいごめんなさい!!」

取り上げられそうになった皿を無事取り戻し、私は親子丼に箸をいれる。私と違って家事が得意な愛狼——ミカンの作る料理はとても美味しい。狼に生活力で負けている件に関しては、とつくにプライドを捨てているため気にならない。

プライドでお腹は膨れないのだ。

食卓を挟んで向かいに座る彼女の凛々しい顔立ちに見惚れていると、ミカンが口元に鶏肉を運びながら不思議そうに首を傾げた。

「どうした林檎。冷めるぞ」

「ああ、うん。ミカンてかっこいいよなあって」

別に悪気があったわけではないが、ミカンは私の言葉にむせてしまった。急いで背後に回り、背をさすってやる。

普段は凜としているのに、少し褒めるとこれだ。どうしてミカンはこうも押しに弱いのか。肉食獣のくせして夜はネコだし。いや、肉食獣だからネコで合ってるのか。

げほげほとむせながらも、ミカンはその切れ長の目に涙をうつすら浮かべて私を睨み付ける。

「林檎、そういうのは控えてくれと何度言えば……」

「だって本当のことだし」

今のは悪気があってやった。反省はしていない。

さらにむせるミカンの背をさすりながら、私の頬は緩みきっていた。もしミカンがいなければ、今頃私は――。

「ありがとね。ミカン」

「げほっ、そこはごめんね、だろう!?!」

君と週末の介抱

「なんで私はいつつも失敗ばかり……うう……」

「林檎、もう何本目だ。そろそろやめておけ」

「うう……ミカンもこんな女やだよねえ……」

「や、そんなこと……」



小鳥が囀る爽やかな朝が来た。が、気分は最悪だ。

「あだまいだい……」

「ビールの飲みすぎだ、阿保」

ソファに丸まって横たわる私を見下ろし、ミカンは呆れたように肩を竦めた。私よりも背が10cmほど高いミカンが、今日は一段と大きく見える……。あ、私が寝転がってるからか。駄目だ、頭が回らない。

「あのな、仕事で疲れてるのは分かってるが、いくら翌日が休日だからって——」

ミカンの説教が頭に響き、私はまたうめき声をあげる。そんな私にミカンは深く溜息を吐くと、台所へと姿を消してしまった。腰から垂れた尻尾が力なく垂れ下がっている

のを見て、流石に怒っただろうか、と反省する。

このやり取りはほぼ毎週末に繰り返されるものだが、いい加減愛想をつかされたかもしれない。

(謝らなきや……もしミカンに見捨てられたら……)

先日上司に激しく怒られた記憶がフラッシュバックした。それに恐怖心をあおられ、私は壁を伝うように、おぼつかない足取りで台所へと向かう。

壁からこつそり顔を出して様子を伺うと、ミカンはしゅんと耳と尻尾を垂らしながら何かを作っていた。

「ミカン……」

「台所じゃなくて部屋に行け」

そのキツイ物言いに、私は何も言い返せずにふらふらと自室へと足を運んだ。道中何度か足がもつれ、転びそうになる。頭の中は不安でいっぱいだった。これも、二日酔いのせいだろうか。

ミカンと一緒に使用している自室。二人で寝るには狭いが、一緒に寝ているシングルベッド。ミカンはいつも私が落ちないようにと、私を壁側にしてくれる。

朝日が降り注ぐベッドにごろりと寝転がり、ぎゅうと羽毛布団を抱きしめた。

——ミカンの匂いがする。胸の奥が温かくなる、優しい匂いだ。

「何をそんなに布団を嗅いでるんだ」

「っ!!」

咄嗟に布団を手放し上体を起こすが、頭痛でぐらつき、またベッドに横たわってしまふ。そんな私を見て、ミカンはまた肩を竦めた。

……ふと、ミカンがお盆に何か乗っけていることに気が付く。

ミカンがお盆をミニテーブルに置くのを眺めながらなんとか起き上がり、ベッドの脇に腰を掛けると目の前にお椀が差し出された。

「しじみのお粥。二日酔いにはしじみが効くらしいからな」

「怒って……ないの?」

「怒ってるに決まってるだろう」

むすつと顔をしかめたミカンからゆっくりお椀を受けとる。口に運ぶとほんのり温かく、猫舌の私でも食べやすくなっていった。

「毎週のように心配かけさせやがって。さっさとこれ食って回復しろ」

その優しいさの詰まった言葉に、頭の痛みがふつと軽くなる。お椀をテーブルに置き、私の隣に腰を下ろしたミカンに抱き着いた。

ミカンの大きな胸に顔をうずめっていると、温かな手が私の頭を優しく撫でる。

「……酒臭い」

そう言って引き剥がされるまで、私はミカンに包まれていた。
小鳥囀る爽やかな朝、気分は最高だ。

君の匂い、煙草の匂い

台所の片隅、換気扇の真下には折り畳み式の小さな椅子が置いてある。

「…………ふう」

その椅子に座っていたミカンは、口からシガレットを離すと煙を吐き出した。

灰皿に灰を落とす彼女を陰から眺めていると、こちらに気が付いたミカンが不思議そうに首をかしげ、再びシガレットを啜えた。

黒ジャージ姿で煙草を吸っていると、なんかこう……ヤンキー感が漂っている。顔もイケメンだしタツパもあるし。

「ミカン、煙草好きだよね」

「? まあ、そうだな」

今から数か月前、同僚に半ば強引に渡された煙草を試しに吸ってみたが、私は思い切りむせてしまい、即座に煙草は苦手だと認識した。

そんな私を見ていたミカン。煙草に興味を惹かれて吸ってみたところ、えらく気に入ったらしい。

それ以来、買い物ついでによく煙草を買ってくるようになったのだ。買ってくるの

は、決まって初めて吸ったのと同じ銘柄である。

ミカンが煙草を吸うとき換気扇の下に行くのは、煙が家に充満しないようにという心遣いだ。

「私は煙草好きだけど、ビールの旨さは分からんな」

「ミカンと私って真逆だねえ」

煙草もお酒も身体にあまりよろしくないため、ミカンは一週間にひと箱。私は飲むのは金曜日だけと決めている。しかし、私は毎週酔い潰れるほど飲むので、制限している意味があまりないぞとミカンによく叱られている。

私がリビングで書類をまとめていると、煙草を吸い終えたミカンが覗き込んできた。

「なんだ、休みの日なのに仕事か？」

「うん……私仕事遅いから休みの日も進めない」と

書類に向き直り、黙々と仕事を消化していく。職場の仲間の足を引つ張らないためにも、頑張らなきゃ……と意気込んでいたのだが、私の集中力はいまいちだった。

その原因は、私の隣に座りこちらをじーっと見つめてくるミカンだ。

そんなに見つめられると恥ずかしい……。一体どうしたのだろうと、仕事を進めながら考えると、一つの予想が浮かび上がった。

「もしかして、構ってほしいの？」

私のその問いに耳と尻尾がびくりと反応したのを、見逃さなかった。

ミカンは「何言ってるんだ」とそっぽを向いてしまったが、尻尾がぶんぶんとはしゃいでいる。まったく、素直じゃないなあ。

椅子を少しずらし、ミカンの座っている椅子とさらに密着すると、私はミカనికిゅつと抱き着いた。

「エネルギー補充！」

ミカンも私を優しく抱きしめ、頭を撫でてくれる。ちらりと顔を見て見ると、優しさを帯びた切れ長の瞳と目が合い、恥ずかしくなつてまたミカンの胸に顔をうずめた。

いくら換気扇の下で吸っているとはいえ、やはりミカンのジャージには煙草の匂いが染みついている。だが、不思議と嫌いではない。むしろ安心するのだ。

「煙草の匂いするだろ。苦手じゃないのか？」

「んーん、これはミカンの匂いだから、好き」

この後、めちやくちや仕事が捗った。

君の声だけで私は

外回りが終わり、自分のデスクにたどり着いた途端、疲れが一気に押し寄せてきた。呻き声をあげながら、私はデスクに突っ伏した。

——ああ、ビールが飲みたい。

そんな欲求に襲われるが、ミカンとビールは金曜限定と約束しているため、あと三日ほど我慢しなければならない。

ちなみに、私が約束を破ったその日は夕飯を作ってくれなかったという前例がある。おまけに口もきいてくれなかった。流石に精神的に堪えたので、もう二度と約束は破らないと誓ったのだ。

不意に、目の前にことりと缶コーヒーが置かれる。顔を上げると、そこには上司である新田先輩が優しい笑みを浮かべていた。

新田先輩は私が入社したての頃の指導係だった人だ。そんな新田先輩の下の名前は苺で、実際苺のように可愛らしく優しい。まさに、名は体を表すということか。

「鈴木さんお疲れさま。外回り大変だったでしょ。これ飲んでもう少し頑張つてね」

「新田先輩……有難うございます」

体を起こし頭を下げてから、御言葉に甘えて缶コーヒーをいただく。

ああ、新田先輩は私の第二の女神だ……。第一の女神？ ミカンに決まっている。

私よりも少し背の高い新田先輩には、本当に妹のように可愛がつてもらっている。お昼もよくご一緒にさせてもらっているし、いずれ何かお返ししなきゃなあ。

そんなことを考えていると、新田先輩はこちらの考えを読んだかのように

「お返しはいりませんよ」

と柔らかく微笑んでくれた。

私とその笑顔に心を浄化されていると、どこからか新田先輩を呼ぶ声が聞こえ、新田先輩は私に手を振って立ち去ってしまった。少し寂しさを感じながら、カコツとプルタブを上げる。無糖コーヒーをちびちびと飲んでいると、ポケットの中のスマホが振動した。

『帰りにスーパーで卵よろしく』

ポップアップ通知で表示された、素気のない一文。送り主は勿論ミカンだ。大好きな同居人^{ベツト}からメッセージが送られてくるだけで、私は頬を緩ませていた。

それと同時にミカンの声が無性に聞きたくなり、少し迷った末に、廊下に出てから通話ボタンを押しスマホを耳に当てる。

『——もしもし。どうした』

一度目のコールが終わらないうちに、ミカンの声が聞こえてくる。その声を聞いただけで、私の心は幸せで溢れかえった。

「んー、ちよつとミカンの声が聞きたくなつたの」

『……そうか。卵、頼むぞ』

「うん、分かつた!」

じゃあまた後で、と断り、私は通話を切ろうとスマホを耳から離す。その瞬間、ミカンがそつと呟いた。

『——早く帰ってきてくれ』

ぴろりん、と通話が切れる音がする。職場に飛び交う社員たちの声が私の鼓膜を揺さぶるが、それらは一切頭に入ってこない。ただ、最後のミカンの一言が大きく響いている。寂しさを滲ませた、あの一言が。

緩み切つた頬を叩き、よしと声を出して自分に喝をいれる。デスクに戻つた私はコーヒを一気に飲み干し、仕事に取り掛かつた。

大切な人が自分の帰りを待っている。

たつたそれだけのことで、疲れはどっかへ飛んで行つた。

「お先に失礼します」

定時きつかりに、私は会社を飛び出した。スーパーで卵を買って、自転車で我が家へ

まっすぐ走る。

私の帰りを待っている、大好きな同居人^{ベツト}のもとへと、まっすぐ走る。

君と居たいのに

雨粒がしたたかに肌を打つのも気にせず、私は傘を投げ捨て、彼女を抱きかかえて一心不乱に走った。

「おかーさん！ わんちゃんが……！」

体も拭かずに居間へ飛び込んだ私を咎めることもなく、お母さんはあらあらと手を拭きながら私へ歩み寄ってくる。

私と同じくらいの目線にしゃがんで私の腕の中の犬をしばらく見つめると、

「お父さんに頼んで、お医者さんのところ連れてってもらおうか。その前に、二人とも身体を拭きましょう」

と優しく私を撫でながら優しく微笑んだ。

「——この子は犬でなく、狼の可能性があります」

獣医にそう告げられた時、私の両親は私の記憶の中で一番呆気に取られていたと思う。

獣医は、これは絶滅したはずのニホンオオカミである可能性が高い、と話していたが、何しろ当時の私は7歳だ。絶滅？ わつつどうーゆーみーん？ である。

しかし、親はそれで察したのだ。この子は連れて帰れないと。申し訳なさそうに私に目を向けるが、当時の私は獣医に向かつて、無邪気な笑顔で訊ねた。

「おーかみもわんちゃんと同じじょ飯買えばだいじょぶですか?」

目をぱちくりとさせる両親。驚いた表情で私を見つめる獣医。不思議そうに首をかしげながら私は、足元にすり寄ってきた犬（狼?）を抱き上げた。

と、獣医が豪快にはっはっはと笑い声をあげ、私の頭を撫でてきた。

「もしかしたら僕の勘違いかもしれない。わんちゃん、大事にしてあげてね」

「? うん!」

呆気にとられたままの両親をよそに、こうして彼女は家族の一員になったのであった。



「うちはペット禁止ですよ」

ミカンに威嚇されて少し怯えながら、大家さんにそう告げられる。あの頃の両親に引けを取らないくらい、呆気にとられたと思う。今思えばその可能性を考慮していなかった私が大馬鹿者なだけだが。

就職に伴い一人暮らしを決意した私は、愛狼（表面上は愛犬）のミカンを連れて上京した。そしてあらかじめ決めておいたアパートへ向かったのだが……

「まあ上京したばつかで大変だろうから……しばらくはいいよ。でも悪いけど、落ち着いたら実家に連れて帰ってもらおうよ」

「は……」

両親は仕事があるから、田舎にある実家を離れられない。私は仕事と快適さを求めて上京したのだが、一人は寂しいだろうとミカンも連れてきた。

両親は不器用な私に家事ができるのかと危惧していたが、私はこの時家事よりも、ミカンのいない生活に耐えられるかどうかを危惧していた。

小学生の頃からずっと暮らしていた愛狼だ。今更離れるなんて考えられなかった。

だが、ミカンと居ることを選べば私は一から住居を探さなければいけないのだ。

段ボールだらけの部屋で、空いた床に私とミカンは寝転がった。ひんやりとした感触が肌に伝わってくる。

「……ミカン、私達一緒に居られないんだって」

「クウン」

「ミカンが、人間だったらしいのにな……なんて」

ふさふさのミカンの手を握り、私は目を瞑った。温かい、ずっと握ってきた大好きな手。

これからはミカンとこうして寛ぐことも叶わないのかと思うと、自然と握る手に力が

籠った。
「クウン……」

君と居たいから

——疲れた。

不慣れた生活と仕事で私の体力は限界を迎えている。でも、指導担当の先輩は当たりだった。可愛いし優しいし……ミカンに次ぐ私を癒してくれる人だ。

今日も夕飯は、右手に持ったビニール袋に入ったコンビニ弁当。新生活の疲れから、やはり家事を怠ってしまう。部屋も散らかっているし、朝は簡単なパンに昼夜はコンビニ弁当。

身体を壊すのは時間の問題だと分かっているながらも、改善が難しいことも悟っていた。

未来は不安一色だ。

さらに追い打ちをかけるように、明日は両親がミカンを引き取りに来る日だ。胸の奥がぎりぎりど苦しくなる。玄関扉を開ける手が震える。

明日からは、この向こう側にミカンは居ない——。

「ただいま……」

後ろ手に扉を閉めると、居間から足音が聞こえた。こうしてミカンが出迎えてくれる

「こども、もう——」

「おかえり林檎。お疲れさま」

「……………え？」

リビングから顔を出したのは、見覚えのない女性だった。

雑にまとめられた灰色の髪。豊満な胸に長い脚。切れ長の目と高い鼻は、イケメンと表現しても過言ではない。

しかし、それらよりも私の目を奪うものを、彼女は持っていた。

頭から生えた犬のような耳。シャツとズボンの隙間から垂れ下がった尻尾。

作り物かと思ったが、動いているところを見ると、そうではないようだ。

布巾で手を拭きながら、彼女は私へ近づいてくる。見知らぬ人物なのに、不思議と恐怖心はなかった。

「どうしたのぼけつとして。飯が冷めるぞ」

私から上着をはぎ取ると、さっさとリビングへ姿を消してしまった。

状況整理が追い付かないまま、私は頭にはてなを浮かべながら彼女の背を追う。そして食卓に目を向けると、そこには美味しそうな食事が用意されていた。

「わあ……………！」

並べられた二人分の食事に、思わずお腹が鳴いた。それを見た彼女はくすりと笑い、

私の頭を撫でてきた。

「まったく、林檎は昔っから食いしん坊だな」

「ちよつと撫でないでよ、ミカン」

咄嗟に出たその名前に、私は茫然と彼女の顔を見つめた。

「ミカ、ン……？」

呼びかけに答えるように、私はぐいと引き寄せられ、彼女の胸に抱かれた。

この優しい温もりは、何度も感じたそれと同じだった。私の心を落ち着かせるように、彼女の手がそつと私の髪に触れる。

「もう大丈夫」

その眩きに、私はひどく安堵した。

常人ならありえないと否定するだろう。夢ではないかと疑うだろう。私は昔から頭のねじが一本飛んでいると言われていたが、知ったこつちやあない。

大好きなミカンと居られるのならば、ねじの一本や二本捨ててやる。

私の愛狼との暮らしは、こうして始まった。

君と見たい景色

「ごめんもうちよつと待ってて！」

「慌てなくていいから、落ち着け」

玄関で待っているミカンになだめられながら、私はそれでも急いで支度を進めていた。

今日は折角ミカンと遠出する約束をしていたのに、寝坊してしまうなんて、なんて馬鹿なんだろう!?

ミカンは気を利かせて起こしてくれなかったようだけど、実は寝坊の原因はミカンにある。

『——林檎ッ、もつと……っ!』

『——んあ、りん、ごおっ!』

ミカンが昨晩いつも以上におねだりしてくるから、ついヒートアップして寝たのがかなり遅かったのだ。なんで本当夜になるとあんなに受けなんだろう。普段はすまし顔なのに、少しこつちが攻めるとすぐ顔赤くするし……。

大体何なの、あのおねだり。可愛すぎでしょ! ずるい!

私は心の中で文句とも賛美ともとれる言葉を吐きながら身だしなみを整え、すぐに荷物を持って玄関へ向かった。

棚に置かれた猫の置物にちよつかいを出していたミカンに声をかけ、約束の時間から三十分ほど遅れて私たちは出発した。



電車を二本乗り継ぎ、目的の駅に到着。そして更に、ここからもう少し歩くのだ。

「それにしても、林檎が連れていきたい場所つてのがどこなのか、楽しみだな」

そう、今日の遠出を提案したのは私なのだ。行き先も、私に任されている。

スマホのマップに目線を落としながら、道を間違えないように進んでいく。手元に集中していると、不意に後ろから腕を引っ張られた。

ハッと顔を上げると、目の前には赤信号の横断歩道が。

隣を向くと、ミカンが呆れたような目で私を見下ろしていた。

「歩く時はスマホじゃなくて前見ろ。行き先が天国になるぞ」

そう私を叱ったミカンはそのまま私の手を握って歩き始めた。やけに力んだその左手から視線を上げる。先立って歩くミカンの耳は、心なしか赤くなっていた。

手を繋ぎたいのなら、普通にそう言えばいいのに。素直に甘えられないミカンが可愛くて、つい小さく笑ってしまう。ミカンは少し不貞腐れたような顔でこちらを振り返

り、

「なんだよ、早く道案内してくれ」

と急かしてくる。

「うん！」

ミカンの手を強く握り、私達は肩を並べて街の中を進んだ。

◆

街から外れ、山道に入ると人気がひとけが少なくなってきた。ミカンが微かに心配そうに眉を下げている。私の右手を握る力も、少しばかり強さを増している。痛い。

「なあ……、ほんとに道これであつてるのか？」

「大丈夫だよー、任せて！」

胸を張って答えるが、ミカンの心配そうな顔は変わらない。そんなに私は頼りないのか。いや、頼りないな。

だが、心配はない。きちんとマップ通りに進み、まもなく目的地に到着するはずだ。

細い山道を辿り、足がいよいよ疲れてきた頃、木々の壁が途絶えたそこに広がっていたのは――

辺り一面を覆い尽くす、色とりどりの花畑だった。

その景色に見惚れているミカンに向き直り、両手を握った。

「ねえミカン。今日が何の日か覚えてる？」

その問いかけにミカンは首を傾げる。まあ覚えてないのも無理はない。

今日は、私とミカンが出会ってちょうど10年なのだ。だから、特別な日だから、この綺麗な景色を見せたかった。二人で見えたかった。

「ミカン、私と出会ってくれてありがとう。大好きだよ」

目に涙をうつすらと浮かべたミカンは、私に顔を見せないために強く抱き締めてきた。

目を奪われるほど美しい花畑で、それ以上に美しく、愛しい彼女との生活は、幸せ一色だ。

これからも、いつまでも。

君の好きな音

今日は近所のスーパーでセールがある。

私は鬱になるほどに泣いている空の下を、傘を差して歩いていた。

林檎が仕事をしている間、家事全般をこなすのが私の役割だ。勿論、そこには買い物も含まれているわけだ。

(しかし、卵が一人一パックというのは辛いな)

安く買えるときに多く買っておきたいのだが、まあ仕方がない。林檎が休みだったら無理にでも引きずっていくんだがな。冗談だけど。

耳を隠すためにフードを被っている私でも、街中の声はしっかりと聞こえている。

雨が地面をたたく音、人々が交わす会話、車のエンジン音……かなり耳が良い私にとつてはそれらはただの騒音でしかないが、林檎はこれを好きだという。林檎のことは大好きだが、そこだけは本当に理解できない。何故うるさいものを好むのか……。

店先に到着すると、袖やズボンの裾に付いた水滴を振り払う。実のところ、私はまだ傘に慣れていない。だからどうしても、ちゃんと雨を防げずに濡れてしまうのだ。林檎はそんな私を笑うので、一刻も早く慣れたいところだ。

水滴を払い終わった私は、傘袋を手を取って私は店内に入った。

店内放送を聞き流しながら、買い物メモに目を通しながら店内を徘徊する。

ちなみに買い物メモについては私と林檎で話し合って書いたものだ。私だけでは我が家に必要なものは把握できないからな。

話し合い中、林檎は隙あらば酒を買わせようとしてくる。林檎に身体を大事にしてほしくて規制しているのに……私の心配は伝わっていないのだろうか。

一通り商品を籠に入れ終わったそのとき、不意に、ポケットのスマホが振動した。画面を確認すると林檎からのメッセージが。

『休憩中！ 雨すごいわね、買い物気を付けてね』

『酒は買わないぞ』

『ひどい』

短いやり取りに小さく笑みをこぼし、私はふと思いついてメッセージを送る。

『なあ、なんで街の音が好きなんだ？』

少し間をおいて既読が付くが、中々返事は来ない。私は一旦それをポケットに戻すと、買い漏れがないことを確認してレジへ向かう。

なかなか混んでるな……まあセールだから仕方がない。列に並びながら、雨のせいではね気味の前髪を眺めていると漸く林檎から返信が来た。

時間をかけた割には、酷く短いメッセージだった。

『静かなのは寂しいから』

私は思いだしていた。社会人になりたての頃の林檎を。

遅くに帰ってきてはやつれた顔を見せ、コンビニ弁当を一人寂しく食べていた。勿論私はずっと寄り添っていたが、それでも、あの頃の林檎は孤独に近かった。何せ、辛さを分かち合う相手がないのだから。

そんなある日、林檎は辛さに耐え切れずに涙を零した日があった。私を見て、もう嫌だと言った。酷く静かな部屋で、林檎の泣く声と私の鳴き声だけが音としてそこに存在していた。

「いや——ま、お客様？」

店員の声にはつと我に返る。怪訝そうな顔をした店員に謝罪しながら私は籠をレジカウンターに置いた。

——私はどうして、人間の姿になれたのだろう。

確かに、林檎の力になりたいと思った。寄り添ってやりたいと、辛さを一緒に背負ってやりたいと思った。でも、実のところこうなった理由は全く分からない。

だが、今こうして林檎の傍に“人”として寄り添ってやれている。それは紛れもない事実だ。

『もう寂しくないだろ』

店を出ると、雨はやや弱くなっていた。家に着くころには晴れるだろうか。

休憩が終わってしまったのかスマホが振動することは無かったが、帰ってきた林檎の表情はあの頃と違い、晴れ渡るような笑顔だった。

君の体温を感じて

窓から差し込んだ朝日から逃げるように、私は体の向きをもぞもぞと変えた。

鼻先にミカンの髪の毛が触れてくすぐったくなり、思わずくしやみをしてしまう。それに反応してミカンが小さく唸り声をあげるが、またすぐに寝息を立て始めた。が、私は今ので完全に目が覚めてしまった……ミカンの髪の毛の馬鹿。

ミカンに馬鹿つて言ったら嫌われるから、ミカンの髪の毛に文句を言ってやった。ばーかばーか。

ミカンの寝息に合わせて小さく動く綺麗な白い背中を眺めながら、首筋に日光の温もりを感じる。日がそれなりに高くなっている証拠だろう。

ミカンの向こう側の壁にかかった時計に目をやると、時刻は十時半。だいぶ寝坊だ。

今日は日曜日だから、元々寝坊する予定ではいたのだが。ミカンもまだ起きそうにないし、もう少し寝ていよう。と、思ったが――

「その前に、服着なきやな……」

億劫なのを我慢しながら、私は布団から抜け出し、私と同じく裸のミカンを起こさないようまたいでベッドから降りた。

何故裸なのかって？ そんなの事後だからに決まっているじゃないですかー。

昨晚はお楽しみでした。相変わらずミカンはネコだった……肉食獣なのにネコ。肉食獣だからネコ？

まあ可愛かったからなんでもいいや。

しかし、私としてはミカんに攻めてほしいとも思うのだが……。なにしろ、ミカンは美顔―イケメンと言っても過言ではない顔立ちだ。おまけに声も低めのハスキーボイスとききた。

そんなミカんに攻められたら、私は耐えられる自信がない。でも、だからこそ、ミカんに攻めてもらいたい!!!

(まあ、ミカンは受けの方が好きだし、強要はよくないよね)

まだ寝るつもりなのでパジャマを身にまとい、私は再び布団へ向かった。ミカンは未だすうすうと高い鼻を引くつかせて眠っている。本当、格好いいよなあ。

と、ミカンをまたぐ際に足が当たってしまい、ミカンが唸りながら上体を起こした。

「んあ……今何時だ」

「十時半。ごめん足当たっちゃった」

「ん……」

私を求めるように、ミカンが両腕をこちらへ伸ばしてくる。長い付き合いだ、何をし

てほしいかはすぐにわかった。

同じように腕を伸ばし、ミカンの背中に手を回してこちらへ抱き寄せる。

「よしよし」

私よりミカンの方が身長は高いから、ミカンは私の肩に顎を乗せる。そして、髪の毛をくしやくしやと撫でてやるのだ。

ミカンはこれが大好きで、子供の頃からずっとやっていることだ。

「ミカンは撫でられると可愛い声だすね」

「……うるさい。馬鹿」

「馬鹿って、さっきの仕返し?」

「は?」

暫くそのまま抱きしめていたけど、ミカンがくしやみしたから、二人で笑ってベッドを降りた。

ミカンが着替え終わると、二人で一緒に居間のソファに腰かけた。暖かな日差しが心地よい。

「さて、今日は何して過ごそっか」

君と過ぐす聖夜

「メリークリスマス!!」

ミカンとグラスを掲げ、乾杯の音頭をとる。ミカンが人の姿になってからは初めてのクリスマスだ。

今日はミカンも料理に時間をかけ、とても豪華な料理を振舞ってくれた。七面鳥が手に入らなかった、とミカンは落ち込んでいたけれど。

さすがにそこまで豪華だったら正直引く。

「それにしても、ミカンとこうやってクリスマスが過ごせるなんてね」

「それは私も同じだ。そもそも人間になれるなんて思いもなかったしな」

手羽先にかじりつきながら、ミカンがうれしそうに目を細める。肉が好物とはいえ、食べ過ぎは良くない。と普段は控えているミカンだが、今日は羽目はずすつもりらしい。

手羽先がこれでもかというくらいに買い置きしてあったから。もしかしたら七面鳥もミカンが食べたかっただけなのかもしれない。

ミカンが肉を解禁しているように、今日は私も飲酒の許可が出ている。最高。ミカン

大好き。

「あくやっぱりビール最高！」

「許可出したからといって、明日も仕事なんだからほどほどにしとけ」

「仕事なんて知らない」

「おい」

いつもどおり会話を弾ませながら、いつもよりも豪華な食事を楽しむ。すごく美味しいのだが、やっぱり全体的に肉料理が多い……。食後のケーキ食べれるかな……。

〜一時間後〜

「もおさあかいしやのせんぱいたちもみんないまごろでーとだよー」

「おい林檎、そろそろペース落とせ。顔真っ赤だぞ」

「うええだつてー」

「酔いつぶれても明日面倒見てやんないからな」

「とかいつてえちゃんとかやさしくしてくれるのしってるよー？」

「まったく……」

飲みすぎるなど注意したというのに、林檎はすっかり出来上がってしまった。

なんでも、社内もクリスマススムードで、カップルが多かったらしい。林檎はまだ異性との交際の経験がないから、それが妬ましいのだろう。

でも、いずれは林檎にも好きな人ができて、結婚したりするんだろうな。そうなったら、私は……。

「……みかん？」

顔を真っ赤にした林檎が、とろけた顔でこちらを見上げてくる。私は熱を帯びたその手を取り、

「林檎。もしも好きな人ができて、その人と暮らしたくなったら、私に遠慮しないでいい」

「どうしたの？ みかん」

「林檎の幸せが私の幸せだから、林檎が私のために我慢する必要はないからな」

理解しているのか、していないのか。林檎は柔らかな笑顔で大丈夫だよと頷いた。

「すきなひとなんてもうとつくにいるよお」

「……え」

少し戸惑う私に、林檎はかすかに震える私の手を優しく包み込んで、幸せそうに目を細めた。

「みかん、こどものころからだいすきだよ。これからもずっとずっと、いつしよにいようねえ」

それが、酔った勢いなのか、本音なのかは分からない。でも、きっと、本音だ。林檎

は嘘をつくのが昔から下手だしな。

自分でも分かるくらい顔が熱くなり、口元がニヤケてしまう。

「私も、大好きだぞ。林檎」

「んへへー。めりーくりすまあす！」

「ん、メリークリスマス」

大事な聖夜を君と過ごせるなんて、これほどの幸せがあるだろうか。

君を誰かにとられたくなくて

「鈴木さん、今日呑み行かない？」

お昼休み。社員食堂で回鍋肉を食べていた私に、新田先輩は私の対面に腰を下ろしてそう誘ってきた。

「呑みに、ですか」

「そ。うちの部署で行くんだけけど、鈴木さんいつも不参加じゃない。たまには鈴木さんとも呑んでみたいなーって」

「お誘いはありがたいんですけど、金曜以外はお酒飲まないようにしてるんです」

今日はまだ木曜日だし、いくら職場の飲み会とはいえ、ミカンとの約束を破りたくない。

じゃあ参加だけして呑まなきやいい、なんて言われるかもしれないが、周りがみんな少なからず酔っている中で自分だけが素面というのは、精神的に辛い。これは経験談。

新田先輩は「そつか、残念」と眉を下げて微笑んだ。少し申し訳なきを感じながら、回鍋肉を口に運ぶ。

「じゃあ鈴木さん。私と明日、二人で呑まない？」

「え」

◆ ふくれっ面、鋭い目つき、暴れるしっぽ。

ミカンはただ今、絶賛不機嫌で不貞寝してます。

「ねえミカン機嫌直してよー」

「ふん。林檎なんて酔い潰れて新田母さんとやらに幻滅されればいいんだ」

いつもなら金曜日はミカンと二人でプチ宴会をしているのだが、明日新田先輩との呑む約束を立てつけてしまったがために、この同居人はご立腹なのだ。

いや、だってあの先輩ずるいんだよ。上目遣いと涙目のコンボで

「私と呑むの……いや？」

なんて言われたら断れるわけないじゃん。

というか、この前「好きな人ができたら、私のことは気にしなくていい」とか言ってたのに（酔ってたから詳細は覚えてないけど）、実際他の人と予定を作るとこれだもんなあ……。

しかも何を勘違いしたのか、新田先輩を恋敵として認識しているようだ。

「ミカン、もしかして私が新田先輩にとられると思ってるの？」

「……」

私に背を向けて寝転がったミカンはシカトを決め込む。私はため息を吐いてその灰色の髪の毛をくしやくしやくと撫でた。ミカンの尻尾がそれに反応し、縦に小さく揺れ動く。

多少乱雑に撫でたほうが喜ぶことを、私は知っている。

何年一緒にいると思っているのだ。

「私の好きな人はミカンだよ。それは絶対変わらない」

その言葉に、ミカンは少しこちらへ顔を向けた。目は少し潤んでいるように見える。

「……本当に？」

「本当に」

「……なら、いい」

安堵したように表情は柔らかくなり、布団を握っていた手が緩んだ。

「浮気したら許さないからな」

「それが本音？」

「……本音だ」

「最初から素直にそう言えばいいのに」

「だって……」

そこまで言いかけて、ミカンはまた表情を曇らせる。

「私が林檎を好きでも、林檎がどうかかわからないじゃないか……」

やれやれ。普段のクールなミカンはどこへ行ったのやら。

不安そうなミカンの顎に右手を添え、上に傾ける。そして――

「んう……」

「つぶは、これで分かった？」

真っ赤な顔のミカンを撫で繰り返す、その夜はそのまま、夜の営みを経て眠りについた。

君を私のものにしたくて

「鈴木さんで彼氏さんと同棲してるのかな」

「さあ……でもよく電話してるよな。めっちゃ笑顔で」

「そういや前はコンビニ飯買って帰ってたけど、最近は買ってないよな」

「同棲相手を作ってくれるってこと？ やっぱ今の時代は男も料理できなきゃか……？」

「くそ、料理勉強しようかな……。にしても料理してくれる彼氏とか……」

「そりゃあんだだけ可愛ければなあ……。仕事はともかく」

「はあ、俺ひそかに狙ってたんだけどなあ……。仕事はともかく」

「にしても、鈴木さん料理できないのか……。可愛いな」



男性社員たちの戯言が耳に入り、私―新田^{にったいち}苺はなんとなく鈴木さんに視線を向けた。

うん、いつも通り熱心に仕事に取り組んでいる。が、恐らく多くのミスをしているだろう。彼女はそういう子なのだ、残念ながら。

(でも、そうよね。真面目なことに変わりはないし、すごく可愛いし……)

彼らを含めた男性社員の数人は、彼女が入社した時から目をつけていただろう。かくいう私も、彼女を狙っているうちの一人ではあるのだけど……。

「あの、新田先輩。何か御用ですか？」

声を掛けられてふと我に返ると、私の後輩―鈴木林檎さんが私のデスクまでやってきていた。

しまった、と反省する。

「いえ、別に用があつた訳じゃ……今日も鈴木さんは熱心だなあつて」

「あ、ありがとうございます！ このまま皆さんのお役に立って見せます！」

やる気は十二分なんだけどなあ……。私は笑顔で自分のデスクに戻る彼女を見送り、再び仕事にとりかかる。



今年で二十七になる私は、今まで異性とお付き合いをしたことがなかった。異性と
は。

初めて付き合ったのは高二の頃の高二の同級生、同じクラスの女子生徒だ。大学進学を機に別れてしまったが、大学でも彼女はできた。この頃、私は自分がそういう人間であることに気が付いた。

その人と別れても、この会社に入社して、暫くして同期と交際を始めた。

しかし彼女も異動が決まり、この関係は続けられないと別れた。

そして、私が指導係として任命された新入社員の鈴木林檎さんに、今日をつけている。というか、心を奪われている。

決して嫌われてはいないし、むしろ好かれているだろう。日常的に気張った顔が多いが、私に向ける笑みはとても柔らかい。

前に缶コーヒー奢ってあげたときなんか、子犬みたいな笑顔でお礼を言うもんだからつい理性を失いそうになった。

(そろそろ攻めてみようかな……)

彼女に同棲相手がいるかもしれないというのは、私も感づいていた。

最近やけに早く帰るし、飲み会には参加しないし、よく電話してるし……。でも、彼氏と決まった訳じゃない。ただの友達かもしれない。もしかしたら兄弟姉妹かもしれない。

可能性があるのならば、私は彼女と付き合いたかった。

昼休みになり食堂へ向かう鈴木さんを目で追い、私は少し遅れて席を立った。

「鈴木さん、今日呑み行かない？」

君と買い物、君とお揃い

「……」

「どうした、そんなに凝視して」

私が換気扇の下で一服していると、何故か林檎が遠巻きにこちらを見つめてきた。

じーっと、何かを見定めるかのような目で。長い付き合いだが、今回は流石に何を考えているのか読み取れない。

仕方なく、私は煙草の火を灰皿で消してから林檎の脇を抜けてリビングの椅子に腰かける。後を追うように私の傍に寄ってきた林檎が、

「ミカン、ピアスとか開けないの？」

「と、唐突だな」

林檎曰く、黒ジャージと啞え煙草がこんなに似合うんだから、ピアスとかつけたら絶対格好いい。とのことだ。

うーん、髪留めとか小物とか洒落たものは、人の姿になつても特に興味は抱かなかつたな。でも、林檎に似合うと力説されて、少しばかり欲が出てしまった。

「じゃあ、林檎選んでくれるか？」

「うん！」

耳がばれないようにフードを被り、林檎と肩を並べて街並みを歩く。林檎の鼻歌を聴きながら、ふとカフェの窓ガラスに映った自分を見て気が付いた。

「林檎……私外出するときフードだから、ピアス見えないぞ……」

それに対し林檎は少し考えるそぶりを見せたあと、

「私が家で見れば満足なんだけど……折角だし帽子も買おう！」

と提案してくれたので、お言葉に甘えることにした。

先に帽子を買ってしまおうと意気込む林檎に感謝の心と微笑まじさを感じながら、繋がれた手をぎゅっと握りしめる。

それに反応して頬を緩める横顔が、堪らなく愛おしかった。



「んー、これも似合いそうだし……あ、こっちも良い！」

あれこれと帽子を手に取り、それを私のもとへ持ってきては似合い不似合いを判断し、また戻っていく林檎。

その様子がなんだか犬みたいで、くすりと笑みが零れる。狼女の私が何を言ってるんだか。

「ねーミカン、これ見て！」

興奮した様子で林檎が持ってきた帽子に目をやり、私の口からは無意識のうちに「おお」と漏れ出ていた。

それは暗めの黒色の帽子―マリンキャップという種類―で、私自身、私に合いそうだと直感的に思った。流石は林檎だな。

その帽子の会計を済ませると、私は試着室で一旦フードを外し、買ったての帽子で耳を隠す。試着室を出た私を見て、林檎は満足げに頷いてくれた。鏡を見る

と、私の表情も満ち足りていた。



「次はピアスだねー！」

「林檎はピアス開けないのか？」

「んー痛そうだから、私はいいかなあ」

先ほどの衣料品店と同じ建物内のアクセサリショップで、林檎は私のピアスを真剣に選びながらそう答えた。それならばと、私はミカンに提案する。

「林檎、イアリング買わないか」

「え、なんで？」

林檎は不思議そうに首をかしげた。少し照れくささを感じながらも、理由^{わけ}を答えた。

「林檎とお揃いで、何か付けたくて……」

自分でも顔が熱くなるのが分かる。そういうガラじゃないことは重々も承知だが、それでも、折角ならば林檎と同じものが身につけたかった。

満面の笑みで賛成してくれた林檎と、どれにしようかと品定めをする。

買い物から帰って、リビングで戦利品を身に着けた。お互いの耳を飾る桜を模したアクセサリーに、自然と笑みが零れる。

「またお揃いで何か買おうね」

「ああ、そうしよう」

顔を見合わせて、ふふふと笑いあう。桜が咲いたように、心が温かくなった。

君と昼寝日和

ベランダから青空を見上げるとお日様が眩しくて、私は思わず目を細めた。同時に柔らかな暖かさに眠気が刺激され、私は柵に腕を預けて瞼を閉じる。

遠くから聞こえる踏切のリズム、雀の囀り、近隣住民の庭の花の香り、今まで意識していなかったそれらが、一気に身近に感じられた。

やはり人間は五感のうちどれかを封じると、他の感覚が敏感になるんだなあ実感する。まあそうだよな、だから夜の営みも電気消すんだよな。

「おーい寝るなよ。早く取り込んでくれ」

「……はーい」

部屋の中から声をかけられ、私は渋々瞼を開いた。何も急かさなくつつたつていいじゃんか。ミカンのせつかちー。

ベランダに吊るされた洗濯物を回収し、籠に放り込んでいく。布巾、タオル、私の私服、仕事服、ミカンの私服、私の下着、ミカンの……。

「理不尽だよなあ」

ミカンのブラジャーを自分の胸に当て、その差に絶望する。この前もちよつとキツク

なってきたとか言ってなかった？ 私なんて中学生のころから成長してる気がしないんですけど!? どうして豊満の神は私に微笑んでくれないの!?

「何してんだ馬鹿!」

後ろから叩かれてはつと我に返る。もう少しでこのブラを外に投げ捨てる所だった。後頭部をさすりながら他の洗濯物もすべて取り込み、それなりの重さの籠を抱えてリビングの中央へ運ぶ。ふうと一息吐き、もう一度ベランダに戻る。

次は布団類を取り込むのだ。バランスを崩して転ばないよう気を付けながら布団を抱きかかえ、リビングに運び込む。そして、倒れこむように取り込みたての羽毛布団にダイブした。

「あーお日様の匂いするー」

「……寝るなよ。もう昼ご飯できたから」

「ミカンもおいでよー」

「……炒飯が冷めるじゃないか」

口では咎めながらも、結局私が伸ばした腕の中に身を委ねてくるミカン。胸元に埋められた灰色の髪の毛を撫で、私は目を瞑った。

お日様の匂い、背に差すお日様の暖かさ、胸元の温もり。身の回りの要素すべてが、まるで私に昼寝を促しているようだ。まずい、このままでは本当に寝そうだ。

「ミカン、ご飯食べよ。……ミカン？」

少し体をのけぞらしてミカンの顔を覗き込むと、そこには瞼を閉じて寝息を立てる美顔が。

(起こすのも悪いよね……)

私はそつと腕の中の同居人を抱きしめ、その耳元で囁いた。

「おやすみ、ミカン」



「林檎の馬鹿、炒飯冷めたじゃないか！」

「ミカンが爆睡しちゃうからでしょ!？」

「起こしてくれよ！ 折角の炒飯が……」

すつかり冷たくなった皿の前に、ミカンの尻尾が悲しそうに項垂れる。

「大丈夫だよ。ミカンの炒飯は冷めても美味しいから」

「そんな調子の良いこと言ってもチャラにならないからな」

「ちえ」

考えを見透かさされ、私はわざとらしく拗ねたように唇を突き出した。

「まったく……ふふ」

「えへへ」

温めなおした炒飯はやっぱり美味しくて、二人で顔を見合わせて微笑むのであった。

君に酒の勢いで

一週間に一度の飲酒解禁日、それが金曜日だ。だからといって飲み過ぎたら意味がないのだが。

「かんぱーいー!」

それでも、一週間我慢したビールは堪らなく美味しい。これで飲み過ぎるなどというのは酷な話だ。ミカンの持ったグラスと缶をこつんと当てると、私は缶ビールを一気に啣あおり半分ほど飲んで、テーブルに勢いよく缶の底を叩き付けた。

「っはーこれの為に生きてるわー!!」

「林檎、すぐくおっさん臭いぞ」

向かいに座っているミカンが苦笑しながらそう突っ込んでくる。ちなみにミカンが飲んでるのはただの烏龍茶だ。

ミカンは相変わらずお酒が苦手で、たまに一口だけと挑戦しているけど、やはり渋い顔で首を振ってしまう。

「ミカンが一緒に飲んでくれたら、おっさん嬉しいのになー」

「否定しろ。もう酔ったのか？」

やれやれと呆れながらクラッカーを口に運ぶミカン。

お酒は飲めないけどおつまみの類は好物で、金曜には私に合わせておつまみを沢山買ってくる。ちなみに今日のラインナップはクラッカー、ビーフジャーキー、チー鰯^{たら}にポテトチップスだ。

これらをつまみながら、私たちは日付が変わるまで楽しく呑み明かすのだ。呑んでるの私だけだけ。



「だーかーらー！ 私ミカンに攻められてみたいのー！」

何本目か分からない缶ビールを飲み干し、声を大にして訴えた。いつも我慢していたのだ。今日こそはと、私は酒の勢いに任せてミカンに詰め寄った。

いつになく強気な私に、ミカンは狼狽えたように頬を朱に染めて俯いていた。組んだその両手がせわしなく動いている。私は立ち上がり、向かいの椅子―ミカンの隣に腰を下ろした。

ミカンの筋肉質な腕に抱き着きながら、羞恥に満ちた顔を覗き込む。

「ねえ、ダメ？」

「ダメ、ではないが……その……」

煮え切らないその返答に、私はミカンの腕を抱く力を強めた。

「なんで！ ミカン美顔だし声も格好いいから、攻められたら絶対興奮するのに！」
「こ、興奮するとか、はつきり言うな！」

熱でもあるんじゃないかと疑うほど顔を真っ赤にして、ミカンは私の腕を振りほどいた。

私は攻めでも受けでも、相手がミカンならどっちでも構わない。だが、ミカンは頑なに受けを譲ろうとしない。受けが好きなのは一向に構わないが、たまには攻めてくれたっていいじゃないか。

「ねえなんで攻めてくれないの!？」

肩をつかみ、ぐぐつと顔を近づける。恥ずかしそうに顔を背けながらも、ミカンはついに答えた。

「…………だと、…………から」

「え、何？」

「林檎が下だと、可愛すぎて止まらなくなりそうだから…………」

その台詞で酔いは覚め、しかし私の欲情を駆り立てた。

「ベッド行こう」

「え、ちよ」

「ベッド行こう」

有無を言わせずに寢室へ引つ張り、ベッドに私は横たわる。腕を伸ばし、躊躇った様子の子のミカンを誘った。

「ミカン、来て」

とうとう観念したように溜息を吐いたミカンが、私に覆いかぶさってくる。その顔は赤く、ミカンも興奮しているのが見て取れた。

「……私も遠慮しないからな。後悔するなよ」

「ミカンにされるなら、いくらでも喜んで」

カーテンの隙間から差し込む淡い月光の中、私たちはいつもと逆の位置で身体を重ねた。

夜は、まだまだ長い。

君のことを守りたくて

「たまにはどっか行くか」

珍しくミカンが外食を提案してきた。

ソファで寛いでいた私は「うえ？」と間拔けな声をあげ、更にはソファから転げ落ちた。

普段は「外食は身体に悪い。林檎は私が作ったバランスのいい飯を食って長生きしろ」と言っているのに。どういう心境の変化だろう……。

は、もしや「もういいよ早死にしろ」と暗に伝えているのか？ そうなのか!?

「ミカン様見捨てないでくださいお願いします」

「は？」

怪訝そうに眉をひそめるミカンに支度を促される。どうやら見捨てられたわけではないらしい。取りあえず一安心だ。

寝間着を脱いで洗濯籠に入れ、お気に入りのワンピースに袖を通す。お化粧は……普段からしてない。不器用過ぎて、デビルフェイスと化してしまう。

友達に「スツピンのほうが万倍可愛い」と切り捨てられ、以来化粧はしていない。幸

い、会社でも「すっぴんのまま来てる私生活も仕事もダメな女」というレッテルは張られていないようだ。

玄関ではすでに身支度を終えていたミカンが、耳を飾っている桜のピアスを触って待っていた。

「林檎、その黒いワンピース似合うな」

「えへへーミカンも帽子、似合ってるよー」

ミカンの服装は、先日買った黒色の帽子に黒いジャケット、そしてスキニージーンズだ。ミカンは背も高いし脚も長い上、それを履くとその細さが顕著にあらわれる。羨ましいなこんちくしょー。

同居人のスタイルの良さに劣等感を抱きながら、同時に見惚れながら、私はスニーカーを履いて玄関扉を開けた。



ミカンは街並みを歩きながら、外食の理由を嬉しそうに教えてくれた。

「この前林檎が寿司を買ってきてくれただろう。あれが思ってたよりも美味くて、なんか無性に食べたくなったんだ」

だから回転寿司に行こうと、そういう訳らしい。

そういえば回転寿司なんて久しく行ってないなあと、最後に行った記憶を掘り起こ

す。

「……二年前か、うん。そりや久しぶりだ。

割と近所にあるのに、一度も行っていないのが逆に不思議である。

そんなことを考えてながら歩いていると、ふとミカンが車道側にいることに気が付く。車道側は危ないと思い、差し掛かった曲がり角で私が車道側に回った。

「……」

「……え？」

不満そうな表情のミカンに腕を引っ張られ、私が戸惑っている間に立ち位置が再び入れ替わってしまった。

車道側を歩きながら、満足そうに手を握ってくるミカン。しっかりと繋がれたその手には、車道側は譲らないぞという意志が強くあらわれていた。

「……車道側危ないよ」

「だからだよ」

ミカンは少し身をかがめ、私の顔を覗き込むようにして微笑んだ。

「林檎を守るのは、私の役目だからな。大人しく歩道側歩いてろ」

その笑みに、体温が一気に上昇するのが分かった。思わず赤くなった顔を隠すように反対側に顔を背ける。

「はあ彼氏かよ……ミカン大好き」

「私の方が好きだぞ」

「なんなのミカン、今日変だよ!? キュン死しちゃう!」

熱くなった頬を空いている方の手で撫でながら、必死に平常心を保とうと試みる。ミカンはそんな私をからかうように笑っていた。

「もう……なんでそんなに好き好きオーラ出してくるの」

「寿司が楽しみで仕方なくてな」

「つまり……寿司寿司オーラ?」

「やっぱ林檎車道側歩け」

「ごめんなさい」

繋いだミカンの手は温かかったけど、私の渾身のギャグには冷たかった。

君のすべてを愛してる

「りっ、林檎！ やめっ……」

「ダメ、もう我慢できない」

ベッドに無理やりミカンを押し倒し、身動きが取れないように覆いかぶさる。顔を近づけてやると、その凛々しい顔を真つ赤にして恥ずかしがった。右

手をシャツの裾からそつと忍ばせ、程よく割れた腹筋に沿って指先を這わせる。くすぐるように撫でるたび、ミカンの身体はびくびくと反応して、それが私をさらに興奮させた。

カーテンから零れた満月の眩い明りが、ミカンの顔を照らした。頬を真つ赤にし涙目になりながらも、反抗的な目で私を睨み付けてくる。

その表情に背徳感が込み上げ、ぞくぞくと全身に興奮が広がる。

——ああ、なんて愛らしい表情なんだろう。

腹を撫でていた指をもつと奥へ、その豊満な胸を何度か優しく撫でると、私は本命へと指先を進める。

私の本命を察したミカンは咄嗟に腋を閉めたが、もう遅い。

「そこはっ……！」

手に伝わる感触に、私は興奮した。その手をなぞるように脇腹へと運ぶ。腋から脇腹へかけて、その感触は続いていた。

顔を両腕で隠しながら、身体を震わせるミカン。私は脇腹を撫でながら、率直に感想を述べた。

「本当に満月の日は毛深いんだね」

「っ……林檎の馬鹿！」



左頬に残った赤い手形をさすりながら、私は淹れたてのコーヒーに口をつける。別に、眠気覚ましではない。眠気だったら先ほどのビンタですべて吹き飛んでいる。

深夜にコーヒーを飲むときの理由は、いつも大体同じだ。

夜の営みでひと際興奮した時、その余韻に浸るためである。

今日は実によかった。ビンタされ途中で逃げられ、最後まで行けなかったものの、後悔はしていない。

ミカンはずっと満月の夜、「毛深くなるから今日はしない」「満月だから、今日は我慢してくれ」と、行為を避けてきていた。

腋や下腹部を中心にが毛深くなるらしく、それを恥ずかしがって今まで見せてくれな

かった。しかし、今夜とうとう我慢の限界が来た。

「今日ミカンとえっちしたい」

「きよ、今日は満月だから、その……」

「満月だからだよ」

「……え」

その後、無理やり押し倒し、無理やり攻め、今に至るわけだ。

コップを下げて寝室へ戻ると、ミカンは枕に顔をうずめていた。

「ミカン、それ息苦しくない?」

うずめるならこっち! と両腕を広げるも、ミカンはちらとこっちに目をやっただけで再び枕に顔を伏せてしまった。そんなに怒っているのかと、顔を覗き込んでみると、枕カバーに染みができていることに気が付いた。

「……え、泣いてるの?」

ミカンの肩を掴んで身体をこちらへ向けさせると、ミカンはぼろぼろと涙を零していた。

あまりにも泣きじやくっているので、私は咄嗟に力強く抱きしめてしまった。

嫌がられるかと思ったが、ミカンは抵抗せずに私の胸の中で泣き続けた。

それから数分してようやくミカンは泣き止み、私はどうして泣いてたのか尋ね、その

理由に呆気にとられた。

「……林檎に嫌われたかと思ったから」

「へ？」

目元を真つ赤にしたミカンの耳と尻尾は悲しそうに項垂れていた。

「なんで私が嫌うと思ったの!? どっちかという嫌われるの私じゃない!?」

だって、とミカンは眩く。

「林檎、前に」お父さんの身体毛だらけで気持ち悪い」って……」

私は目を瞑ってその言葉を思い出す。結局思い出せはしなかったが、心当たりはあった。

「ねえそれってさ、いつ言ってたの……？」

「林檎が中学生の頃」

「反抗期真つただ中!!!」

私は嘔き出した。

ミカンはそんな反抗期の頃の言動ひとつで、今まで恥ずかしがって、それを見られて私に嫌われると思つたのか。なんて可愛いんだろう。

「ミカン。私はミカンが毛深くなっても気持ち悪いとか思わないよ」

「……ほんとか？」

むしろ興奮した……とは言わないでおこう。

「ほんとほんと。それに、私はミカンの全部が好きだからね」

安堵したのか、倒れるように抱き着いてきたミカンを受け止め、その頭を撫でてやる。

「嫌いにならないか？」

「ならないよ。私の方こそごめんね」

「……もう少し撫でてくれたら、許してやる」

「はいはい」

私は満月の優しい光に包まれながら、少しポリウームの多くなつた髪の毛を撫で続けた。

君の恋人は私だから

「す、鈴木林檎さんっ！ 前から好きでした、お付き合ひしていただけませんか!？」

野次馬に囲まれながら、私は深く頭を下げた同期を前に、どうすればいいか分からず立ち尽くしていた。



告白されたことは決して嫌ではないが、もう少し場所を選んでほしかったというのが素直な感想だ。私は溜息を吐きながら、社員食堂の窓際の席でカレーうどんを啜った。

朝から今日はカレーうどんと心に決めていたので、汗が飛ぶことを考慮して黒いワイシャツで出勤している。

新田先輩に「黒も似合うわね、鈴木さん」と褒められて、今日はいいい日だと思ったのに、昼前にあんなことが起こるなんてなあ……。

告白してきた同期については、ひとまず考えさせてくださいと保留してある。

少なくとも、今日中に返事をするのは難しそうだ。とはいえ、答えは決まっている。勿論NOだ。

好意を寄せてくれるのは有り難いが、今の私にはミカンという同居人兼ペットがい

る。残念ながら彼と交際することはできない。

ただ、断り方に悩むんだよなあ……。

(お母さんに相談したら、是非とも付き合いなさいって言うんだろうなあ……)

母にはミカンが人型になったことは話していない。話したところで信じてもらえないだろうし。つまり母は、私が未だ恋人もおらず一人暮らしをしていると思っただけだ。

ごめんねお母さん、もう同居人もいるし、進むところまで進んじやったんだ……。女だけど、狼だけど。

ふと、ミカンと私は恋人なのかと疑問に思う。

お互いに好きなのは明白だし、何度も身体を重ねている。これは最早恋人なのでは？
スマホを取り出し、ミカンにメッセージを送る。返信は一分足らずで届いた。

『私とミカンって恋人？』

『恋人かどうかは知らん。』

でも世間一般的に見たら、恋人みたいなもんなんじゃないか。

なんかあつたのか？』

『職場の人に告白されたの』

時計の針が、間もなく昼休みの終了時刻を指す。

私はスマホを仕舞い、カレーうどんの汁を一気に飲み干し、よしと意気込んだ。オフィスへ戻り、件の同期の席へと歩み寄る。

「え、あ、鈴木さん……」

同期は立ち上がり、私と向かい合った。周りにはまた人が集まっていた。上司よ、止めなくていいのか。

そわそわとしていた同期が、意を決したように口を開く。が、それより少し早く、私は深く頭を下げた。

「ごめんなさい、貴方とはお付き合いできません」

口を噤んだ同期を、私は顔を上げてまっすぐに向き合う。

「……だけど、告白してくれて、嬉しかったです。こんなに仕事のできない私のどこを好きになってくれたかは分からないけど、それでも嬉しかったです。好意を向けてくださって、ありがとうございます」

一瞬の沈黙のあと、同期の「こちらこそ、ありがとうございます」という絞り出した一言を境に、野次馬はその場を離れていった。

私ももう一度頭を下げ、自分の席に戻った。どつと疲れが押し寄せ、ふうと息を吐く。不意に目の前に缶コーヒーが置かれ、顔をあげると新田先輩が柔らかなく微笑んでいた。

「お疲れさま」

「あ……ありがとうございます」

なんかやけに嬉しそうだったけど、どうしたのだろう……。

缶コーヒーに口をつけながら不思議に思っていると、スマホの画面にメッセージが表示されていることに気が付いた。いつの間にか返信が来ていたようだ。

表示されたその文面に、思わず笑みが零れる。

「もう、可愛い恋人だなあ」

『そいつより私のが林檎のこと好きだからな』

君が可愛すぎて、つい

自分の帰りを待っている人がいるというのは、思っているよりも幸せなことなのかもしれない。

「おかえり林檎。飯も風呂も用意できてるけど、どっちかいい？」

「んー、ミカンがいいな」

「ん、選択肢聞いてなかったのか？」

「ミカンが冷たい」

「……私は夜になつたら、な」

そう言い残して居間に引っ込んでいったミカンの頬は微かに朱に染まっただけで、その愛らしさに私は仕事の疲れを忘れるのであった。

空腹を強く感じていたので、私は手早く楽な格好に着替えると、ミカンの待つ食卓へと向かう。そこに並べられた料理は出来立てのように湯気が立っていて、私の腹の虫は抗う術もなく鳴き声を上げた。

「ミカンとの約束事の中に、“帰る前に連絡すること”がある。

私が連絡を入れることで、ミカンは私が帰宅するおおよその時間を把握し、それに合

わけて料理を用意してくれているわけだ。

うーん、いったいこの恐ろしく高い主婦力はどこで手に入れたのか……。少しくらい私に分けてくれないかな。

席に着き、向かい合ったミカンに合掌をする。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」



濡れた髪の毛を愛用のタオルで拭きながら、食器を洗っていたミカンに声をかける。

「お風呂あがったよー」

「ん。まだ寒いんだから早く乾かせよ」

おかんと呼びたくなるのをぐっと堪え、はーいと返事をしてソファに腰を下ろした。

ローテーブルに手を伸ばし、リモコンをつかんで適当なチャンネルをつける。画面に映ったのは今流行りのドラマで、主演の女性には見覚えがあった。

「この女優さん、新田先輩が好きなんだって。確かに美人さんだよー」

新田先輩という単語に反応したのかミカンの耳がピンと伸び、こちらを睨み付けてくる。

手を拭きながら居間に来たミカンは不満げな顔のままソファの後ろに回り、私の髪を

毛をタオルで拭き始めた。

いや、拭くなんて優しいもんじやない。乱暴にこする、と言った方が適当な、そんな力加減である。

「ふーん、新田苺が好きな女優なのか、そうかそうか」

「ちよ、あの、ミカンさん、い、痛い痛い！ ごめんなさい！」

謝罪もむなしく、ミカンの手つきが弱まることはなかった。

結局、私の髪がすっかり乾いて尚且つぼさぼさになるまで、ミカンは私の頭を乱雑に拭き続けたのであった。

今のは不用意に新田先輩の名前を出した私に非があるというのには認めるが、ここ最近ミカンがやけに嫉妬深くなってきている気がする。気のせいだろうか。

むすつと私の隣に座ったミカンの膝に頭を預け、私はむくれたその顔を見上げた。

(まつ毛長いなー)

下から見るその顔に新鮮味を感じながら、じつくりとミカンの顔を観察する。と、不意に後頭部に手が回され、頭を持ち上げられた。

意図が読めずに困惑したのも束の間。気が付けば私の眼前には、ミカンの整った顔が迫っていた。

「んむ……」

「……あんまり見つめてくるから、我慢できなかつたじゃないか」

この状況で、身体を折って私にキスをしてくるなんて、ミカンも積極的になつたね……つていうか心拍数が跳ね上がったまま落ち着かないんだけど。

火照つて仕方ない頬を隠すように、ミカンの腹に顔をうずめた。さつきとは打つて変わつて、優しい手つきで髪の毛が撫でられる。

「最近ミカン、ぐいぐいくるね……」

「林檎が可愛すぎてつい、な」

「……」

いつになく積極的なミカンに、私は暫く顔を上げることができなかつた。

君への本命チヨコレート

——君の小さな寝言で、私は目を覚ました。

裸で眠る君は気持ちよさそうに頬を緩めて、「りんごお」と、私を夢に見ている。裸で寝ているということは、まあ事後である。

昨晩はお楽しみでした。

そう、お楽しみ、でした……。

昨晩の行為を思い出した私は、顔を両手で覆って腹の底から溜息を吐いた。

(昨日のミカンめつつつつちや可愛かったあああ)

頬を真っ赤に染めて私を求めるミカンが脳裏に浮かんでくる。

それはいつもの営みの何倍も、欲情にまみれた顔つきだった。

◆ 「そうか、バレンタインか」

本日の家事を終えたミカンは私にチヨコレートを手渡され、数秒遅れて遅れてそのチヨコの意味を理解した。

今日は二月十四日、女性が意中の相手にチヨコと想いを届ける日だ。

まあ私の意中の相手は言わずもがなミカンであり、そんなミカンにあげるのだから、腕によりをかけてチョコレートを作ったのだが……

「林檎が、作ったのか……」

手の中のチョコレートを眺めるその目には明らかに不安が募っており、微かに手が震えている。

確かに私は料理が絶望的にできないが、流星にチョコレートを劇的な不味さにする技術は持ち合わせていない。

なんらチョコを溶かして、ちよつとひと手間加えて、また固めただけである。これでは不味くなったらそれは最早才能だ。

「その『ひと手間』が怖いんだよ……。変なもん入れてないだろうな？」
「どれだけ信用ないの私……恋人でしょ、信用してよ」

恐る恐る。そんな言葉が当てはまるような表情で、ミカンは私の作ったチョコを口も含んだ。咀嚼音だけが、この部屋に音をもたらししている。

「ごくりと飲み込んだミカン。その表情は柔らかく、私はガッツポーズを決めた。
「どうよ、美味しいでしょ」

ミカンはホツとしたように笑みを浮かべながら、疑って悪かった。と謝りながら私の頭を撫でた。

その頬は朱に染まっております、暑そうに自分の顔を手で仰いでいる。

「なんか身体が熱いんだが……何か入れたか？」

隠す気は毛頭ない。私はミカンに小瓶を手渡した。

そして素直に、笑顔で、その“ひと手間”をミカンに伝えた。

「お前、これまさか……」

「うんそう媚薬」

「なっ……！」

チョコレートつて元々媚薬効果あるんだつて。そこに媚薬を加えたら……ねえ？

こちらも照れそうなほど顔を赤くしたミカンの手を取り、寝室へ強引に連れ込む。

「林檎……私……もう……」

全身を火照らせたミカンは欲情と理性の葛藤の末、私に腕を伸ばした。その身体を抱き、ベッドに押し倒す。

「ミカンの身体が、私へのバレンタインチョコ。つてことで」

「……ばか」



媚薬とは恐ろしいものである。

言い表すのも躊躇われるほどの激しい営みが、私の頭から離れない。

まだ目を覚まさないミカンの顔を眺めていると、昨晩のあの火照って欲情のままに私を求めてきたミカンを思い出してしまい、私の興奮がまたぶり返してきた。

(来年はもつとすごいのを入れよう……)

ミカンの頬にそつとキスをして、私はもう一度目を瞑った。

幸せ過ぎるバレンタインデーだった、とあの悦びを噛みしめながら。

君の為なら頑張れる

大好きな声に名前を呼ばれながら、身体を揺すられて目を覚ます。毎日のように体験していることだが、未だにその幸福感は薄れる気配がない。

顔を洗って寝癖を直して、スーツに着換える。

他のOLに比べて化粧する手間がないのは、睡眠時間アップに直結するので割とうれしい。

まあ同僚らにそんなこと言ったら憎悪のこもった眼差しを向けられるだろうから、絶対言わないけど。

「おはよーミカン」

「おはよう。今日の弁当はハンバーグだぞ」

「あ、昨日作ってたやつか。やったー！」

昼休憩の楽しみができたことに心を躍らせながら、用意されていた朝ご飯を食べ始める。

「いただきます」

「はい召し上がれ」

今日の献立は白米、チンジャオロース（昨夜の残り）にワカメと豆腐の味噌汁。

ミカンの作る味噌汁はいつも美味しいが、私はこのワカメと豆腐の味噌汁が特別好きだ。

それを知ってか、朝食に高確率で出されるのはこの味噌汁である。

時間を気にしつつ、向かいの席で一緒に朝ごはんを食べるミカンと談笑するのが、毎朝の日課。そして、今日もミカンの為に頑張って働くぞと、一日のやる気を充電するのだ。

大好きなミカンと幸せに暮らすためなら、私はどんなに辛くても頑張れる。



私はいつも決まった時間に朝飯を作り終える。というよりは、決まった時間に作り終えるように心がけている。

林檎の毎朝の生活リズムを整えるためだ。

「ほら林檎、起きろ」

布団にくるまって緩み切った顔をしている林檎の身体を揺すり、起きるように言い聞かせる。

林檎は一度起こせばきちんと目を覚まして身支度を始める。寝起きの良さは小学生の頃から今に至るまで健在だ。

朝飯と並行して作っておいた弁当を詰め、林檎が朝飯を食べ始めると、その向かいに腰を下ろす。朝飯は必ず一緒に食べるといのが、私と林檎の約束だ。

美味しい、と嬉しそうに私の作った料理を口に運ぶ林檎と談笑していると、胸の奥がとても暖かくて幸せになる。

「ごちそうさま！ 今日も美味しかったです」

「お粗末さま」

私にできることは家事くらいしかないから、林檎が喜んでくれるなら、これからも料理の腕を磨き続ける。

◆ 大好きな人の為なら、私はいくらでも頑張れる。

食後のコーヒーを飲み終え、私は玄関で靴を履いた。ミカンから鞆を受け取り、よしと声を出して自分に喝を入れる。

「気をつけてな。あと、帰りに卵と食パンを頼む。あとでメッセージも送つとくから」
「分かった、いつてきまーす」

ミカンに手を振ってドアノブに手をかけ、私はふと妙案を思いついた。振り返り、不思議そうに首を傾げるミカンに近寄る。

そしてその頬に手を伸ばし、こちらへ引き寄せた。

「ちよっ……んむっ」

「んう……えへへ。行つてきますの、チュー」

不意打ちに怒ってるのか照れてるのか、むすつと私を睨むミカンに、わざとらしく舌を出して微笑んだ。

「……明日からは私がする」

「あはは、楽しみにしてるね」

今度こそ、と手を振つてドアノブに手をかける。視界を照らす日差しに少し目を眩ませて、私は歩き出す。

大好きな人の為に、今日も頑張る。

君に癒してほしくて堪らない

数日分の疲労感が一気に押し寄せ、私は自室のベッドにその身を放り投げた。ここところ、本当に多忙だった。仕事がてんでこ舞いで、周りよりノロマな私は朝早く出勤し夜遅くに返ってくるという生活を数日間繰り返していた。

本日漸くその忙しさも納まり、今日は久しぶりに早く帰ってこれたのだ。最近の食事は自分で適当に用意して手早く済ませていたので、自室で一息ついた途端、激しい食欲が私を襲ってきた。今、ミカンが台所で少し豪華な夕食を作ってくれている。今日は私をいっぱい労わってくれるんだと。普段から労わってもらえばなしなのにね。しかし、今日はミカンのお言葉に甘えるでしょう。

それにしても、こうしてベッドに横たわっているとどうも眠たくなってしまった。このところ睡眠時間も足りてなかったからな。と、台所から私の大好きな声が聞こえてくる。

「眠かったら寝てていいからな。食事ができたら起こしてやる」
「んーありがとお……」

私はミカンに言われた通り、ささっと着替えを済ませてベッドに潜り込んだ。すると

すぐさま瞼は重くなり、私は数分もたたぬうちに眠りについた。意識が落ちる瞬間、「おやすみ」という優しい声とともに頭を撫でられた気がするが、それを確認することはできなかつた。

◆ 「ほら林檎、起きろ。飯できたぞ」

いつものように揺さぶる起こし方ではなく、まるで幼子を扱うかのように柔らかく頭を撫でられて目を覚ました。ミカンの微笑んだ顔を認識すると同時に、いい香りが居間の方から漂ってくる。私のおなかの虫は正直で、ミカンに撫でられたままぐうぐうと間抜けな音を奏でた。ミカンにくすぐすと笑われ、その恥ずかしさで目はすっかり覚めた。

「もう、笑ってないでよ。飯食べようよ」

「そうだな、悪い悪い」

口ではそう言いながらもまだ笑っている。釣られて私も笑った。

食卓には私の好物ばかりが並んでいて、しかも今日は金曜日だからビールもOKだ。ミカンは「金曜じゃなくても特別にビール許可しようと思ってたんだがな」と微笑んだ。本当に甘やかし過ぎじゃあなかろうか。まあいいか。

「林檎お疲れさま。乾杯」

「ありがと、かんぱーい！」

烏龍茶とビールで乾杯して、私たちは数日ぶりに顔を合わせて、温かい絶品の料理を頬張った。胸の中が暖かくなって涙が零れそうになっただけ、心配かけたくないからぐつと堪えた。

ああ、今、すごく幸せだ。

睡眠欲も程よく満たされ、食欲も十二分に満たされた。さて、あと残るのは何か。無論、性欲である。

(長いことミカンとえっちしてない……猛烈にしたい。あの攻められてトロトロになった顔が見たい)

湯船にゆつくり浸かって体の疲れを取りながらも、頭の中はそんなことばかり考えていた。明日は休みだし、したいなあ……。

そんな風にぼうつとしていたから、すりガラスに映った姿に私は気づくことができなかった。ガラガラと戸を開ける音に顔を向けると、ミカンがあられもない姿で浴室に入ってきた。いや、浴室だからあられもない姿は当たり前か。普段一緒に入ったりはしないのだが、どうしたのだろうか。というか、ついさつきまで欲塗れな物思いに耽^{ふけ}っていたから、いざミカンの裸の前になると心臓の高鳴りが半端ない。

硬直したままの私に触れることなく、ミカンは軽く全身を洗うと湯船に入ってくる。この湯船は二人で入るには少々狭く、身体がびたりと密着している。

我慢の限界が来た私はミカンの身体に手を伸ばそうとしたが、それより早くミカンの顔が私に近づいていた。

「んう」

「……我慢してたのが、林檎だけだと思ふなよ」

真つ赤に染めたその顔で、ミカンの手が私の身体に迫る。攻められた顔が見たいと思っていたのに、まさか攻められるとは微塵も思つてなかった私は、呆気なくミカンの思ふがままになっていた。

その後、私たちはのぼせるまで浴室で欲に身を任せ続けた。

君が格好良くないわけがない

「なあいいじゃんちよつとだけ！ な、俺とあそぼーぜ？」

「あ、あのだから……」

「マジでおすすめのところあんだって！」

「いい加減しつこいぞ」

通行人たちは私たちの周りを避け、少し大回りで通り過ぎていく。ミカンと久しぶりにランチして折角いい気分だったのに、帰り際に大変面倒くさいことになった。

突然声をかけてきたのは金髪にグラサンという、いかにも「輩」^{やから}といった男性だ。

「ねえ君たち可愛いね！」

その声をかけられ、そのまましつこく誘われ続けて帰ろうにも引き留められてしまう。最初の方は適当に流してたけど、流石にそろそろ鬱陶しい。もうかれこれ十分は経過している。ミカンに至っては身体の後ろで中指を立て始めた。

周りの人たちは面倒くさいことに関わりたくないのか、それともこの男性のチャラさが近寄りたくないのか分からないが、助けてくれる見込みはなさそうだ。

「お茶するだけでいいーからさー、ね？」

「あの、本当に迷惑なので……」

「いい加減迷惑だからさっさと帰れ」

私がやんわりと断ろうとするも、遮るようにミカンが強い口調を男性に投げつけた。相当イラついてるみたいだ。男性はそのミカンの言い方に腹を立てたのか、露骨に態度を悪くし始めた。

「んだよ折角誘ってやってんのによ？ これだから馬鹿な女はよオ」

私は視線を下げ、ずっと口を結んでいた。男性が怖いからではない。怖いのは私の隣、ミカンだ。悪態をつく男性に、今にも殺しそうなくらいのガンを飛ばしている。気が付いたら背後で立てた中指が両手になっていた。

男性ははあと溜息を吐き、私たちを睨み付けて方向転換した。漸く諦めてくれたかと安堵したが、最後に吐き捨てたその言葉に私は激しい怒りを覚えた。

「ちっ、いいよもう。このブスどもがよ」

気が付けば私とミカンは男性を捕まえ、私は詰め寄り、ミカンは胸倉に掴みかかって同時に叫んだ。

「ミカンがブスなわけじゃないじゃん謝ってよ！」

「おい今林檎に何て言った、訂正しないと殺すぞ」

私たちの――主にミカンの――気迫にたじろいだ男性は、舌打ちをして逃げるように走り

去っていった。その後ろ姿が見えなくなると、私たちは顔を見合わせて微笑んだ。

「あの人が最低だね、ミカンこんなにかっこいいのに」

我が家へと向かいながら、先ほどの男性のことを口にする。本当、ミカンのどこを見てブスなんて言っただら。目無いのかな。ミカンは嬉しそうに目を細め、私の頭をくしゃくしゃと撫でてくれた。

「そうだな、林檎も可愛すぎるくらいなのにな」

「えへへ、ありがとっ」

互いに照れ笑いを浮かべながら、私たちはぎゅつと手を繋いだ。誰が何と言おうと、今日も私の同居人は世界一かっこいい。

……まあ夜は世界一可愛くなるんだけど。

君に振る舞う料理

——酷い匂い。

私は目の前の惨状に顔をしかめた。黒ずんだそれは強烈な臭さを放っており、近くに居るだけで気が滅入りそうだ。

(見つかる前に、どうにかしなきゃ……)

焦る気持ちを抑え、私はそれに手を伸ばした。その時。

「ただいま」

「あっ」

買い物物を終え、居間に入ってきたミカンと目が合い、私は硬直した。ミカンもすぐに異変に気が付き、顔をゆがめて鼻を塞いだ。そして、私の手元を覗き込み——

「お前……何焦がした？」

「た、卵焼きです……」

「……もう炭じゃないか」



慣れないことはするもんじやない。私はミカンの作ったお昼ご飯を頬張りながらし

みじみと思った。

たまには料理して、ミカンに日頃の恩返しをしようと試みたのだけれど、やはり料理は私には向いていないようだ。恩返しは、また別の形でするとしよう。

「まったく。気持ちは嬉しいが、せめて一声かけてくれれば手伝つてやるのに」

「それじゃ恩返しになんないじゃん」

「む、そうか……」

ミカンの作った形の整った卵焼きを口へ運び、その美味しさを噛みしめた。やはりミカンの作る食事はとても美味しい。突然人の姿になったその日でさえ、出された料理は並大抵の主婦に劣らない腕前だった。ミカンに直接訊いたことがあるけど「愛の力じゃないか？」と適当に返された。

「ミカンの料理の腕はすごいけど、ほんと不思議だよねえ」

そう私がいじみと呟くとミカンはくすりと微笑み、「そうだな」とコーヒーに口をつけた。と、そのときミカンの背後で尻尾がゆらゆらと大きく揺れていることに気が付く。ミカンの尻尾の動きはほぼ無意識で、その揺れ方の癖を私は把握している。

「……もしかしてミカン嘘ついてる？」

——小学生だった頃、私のお気に入りぬいぐるみが見当たらずに探し回ったことがある。しかし長時間探しても見当たらず、居間の隅で鎮座してすましているミカンに抱

き着きながら問いかけたのだ。

「みかん……私のうさちゃんどこかわかるう……？」

「くうん」

ミカンは「知らんな」とでも言うようにまたそっぽを向いたが、その時尻尾が大きく揺れていた。そして、そのぬいぐるみはミカンがずっと抱きかかえていたのだ。つまり、あの時ミカンは嘘をついていたというわけだ。

「……林檎に隠し事ができる気がしないな」

「隠し事しなきゃいけないような仲なの？」

「いや、別に隠してるわけじゃないんだが……料理を教えてくれたのは、檸檬れもんだよ」

「檸檬れもんって……お母さん？」

目の前できよとんと目を丸くする林檎に、私は説明してやった。

「檸檬が料理してる時よくそれを見てたんだが、檸檬はほら、癖でよく独り言をいうじゃないか。料理のときなんか特にそうだろ？」料理教室みたいに説明口調で楽しそうに

料理してて、林檎もよくそれ見てたよな。

で、そんな檸檬の料理教室を毎日、私は見ていたんだ。だからかな、この姿になった時、その記憶が全部残ってたんだよ。そのおかげで、私はこうやって林檎に料理を振る舞えるわけだ」

へえーと納得したように、卵焼きと白米を頬張る林檎。そんなに一気に食わなくても飯は逃げたりしないというのに、相変わらず食いしん坊な奴だ。と、林檎がでも。と首をかしげる。

「その割にはお母さんの味とは似てないね？」

その疑問に、私は思わず苦笑した。

「私は檸檬の料理を一度も食ったことがないんだから、当たり前だろ」

「あ、そっか」

そうだったね、と林檎が恥ずかしそうに笑う。

「じゃあこれはミカンの味だね」

「そうだな」

「私、ミカンの料理大好きだよ！」

「そうか、ありがとう」

確かに私の料理は檸檬と味つけは違うが、檸檬の味と共通しているのは、愛情がたくさんこもっているところだ。確信をもって、そう言える。

君への唯一の恩返しだから

「いい加減にしろ鈴木！」

「も、申し訳ございません……」

やらかした。最近ミスが少ないから、新田先輩にも褒められたからと調子に乗った自分が馬鹿だった。

今日提出の重要書類に不備が見つかり、その担当はいわずもがな私であった。課長は憤り、その手前新田先輩も私に声をかけるのは控えてくれていた。その代わり課長に何度も頭を下げてデスクに戻っても、新田先輩がくれるいつもの慰めの缶コーヒーはなかった。

(……少し自信を持てたのに、やっぱり私は能無しだな)

失敗をしても、仕事はある。普段よりも少ない同僚たちとの会話に、肩が重く感じた。やはり周りから少し距離を置かれているようだ。

(早く、ミカンに会いたい……)

おかえり、と出迎えてくれるミカンの笑顔が脳裏に浮かび、私は気を取り直して仕事にとりかかった。

◆ ミカンに『今から帰るね』とメッセージを送り、私はオフィスを出た。早く帰って、ゆっくり休んで、明日からまたミスがないように気を引き締めなければ。そう自分に喝を入れ、エントランスを通ろうとしたその時、新田先輩の姿が見えた。声をかけようとして、出掛けた声を私はひっこめた。

「最近は調子がいいと思ってたが、やっぱりあいつはダメだな」

課長だった。私は足を止め、身をひそめる。上司がエントランスから居なくなるまで帰りづらい。仕方なく、私は近場のトイレに引き返そうとしたが、次いで聞こえた声に身体が硬直した。

「……そうですね、私からもきつく叱っておきます」

「……っ！」

気づけば涙が頬を伝っていた。上司の前だから仕方がないが、新田先輩にまでそう言われて心が折れた私は、思わずエントランスを走り抜けて会社を飛び出していた。

「あいつ……反省してるのか本当に！ いっそ上に取り合っ——」

「まあまあ課長。それより、今日私と飲みに行きませんか？ 私と二人つきりで……」

「え……」



「おかえり……っつておい」

私はミカンの出迎えも無視して、自室に飛び込んだ。ベッドに顔を埋めて、声をあげて泣いた。自分のふがいなさが、仕事のできなさが、新田先輩の上司への肯定が、どんな涙を溢れさせた。

ミカンははじめ、どうしたと困ったように問いかけてきたけど、暫くすると黙って私の傍らに座り込んで背中をさすってくれた。その優しさに、また嗚咽が漏れた。

「……落ち着いたか」

「うん……ごめん」

「気にするな。先に風呂入ってきな」

「……うん」

くしゃやくしゃとミカンに髪を撫でられ、私は漸く泣き止んで風呂場に向かった。鏡に映る自分の目の周りは赤く腫れていた。湯船に浸かって深く息を吐くと、少し気持ちが落ち着いた。

帰ってきていきなり部屋で泣き出すなんて、ミカンもびつくりしただろう。悪いことをしてしまった。折角のおかえりも無視してしまったし。

風呂を上がり、夕飯の支度をしていたミカンに謝罪の言葉を述べる。

「ミカンごめんね」

そんな私を見て、柔らかに微笑んだミカンはまた、私の頭を力強く撫でた。

「だから気にするな。仕事で何があったかは分からないが、私は林檎の味方だし、ずっと傍に居るよ」

「……ありがとう」

「ああもう、また泣くなよ」

ミカんに抱きしめられ、私はまた涙を流してしまった。こんなに愛されているのに、私は何も返せていない。私に出来るのは、稼ぐことだけだ。せめて、せめて仕事だけはしっかりとしなければ。

そうだ、今私が働いているのは自分の為だけではない。ミカンの為にも、私はたとえ心が折れても働かなければ。

◆
それが、私がミカンにできる唯一の恩返しだ。

「おはよう鈴木さん」

「お、おはようございます……」

新田先輩に朝早くから声をかけられたが、昨日のことが頭をよぎり、少し尻すぼみの挨拶になってしまう。そんな私を気にする様子もなく、新田先輩は嬉しそうに話してくれた。

「昨日のことだけど。課長もね、きつく言い過ぎたかもって。次からまた気を付けられればいいって言ってたわ」

「ほ、ほんとですか？」

「ええ、本当よ」

そう微笑む新田先輩に、また涙が零れそうになった。

もう一度課長にも謝りに行き、私はデスクに向かうとよしと意気込んだ。
愛するミカンの為に、私は今日も働く。

君と夢見心地

口から煙を吐き出し、私はベランダの柵に身を預けながら朝焼けを眺めた。

「良い天気だな……」

見上げた空には雲ひとつなく、青と茜の混ざった色彩が幻想的な雰囲気醸し出している。そしてこんな良い天気にも吸う煙草も美味い。

携帯灰皿に灰を落として振り返ると、静かな居間がただそこに広がっている。

林檎はまだ夢の中だろう、ついさっきまで裸のまま寝息を立てていたからな。普段なら、営みの次の日に先に目を覚ますのは林檎なのだが、今日は珍しく私が早朝に目を覚ましたのだ。二度寝する気にもなれなかったので、今こうしてベランダで一服している。

それにしても不思議なものだ。長年ベットとして寄り添ってきた私が、飼い主の林檎と身を重ねる関係になるとは。今更ながらその珍妙な関係に、私は苦笑した。シガレットを咥え、スマートフォン待ち受け画面を開いて私は頬を緩めた。林檎には恥ずかしいから内緒だが、私の待ち受けに設定してある写真は昔の林檎と私の写真だ。そこに映っている林檎は懐かしい制服を身にまとっている。これは中学の時の制服だ。

まだ狼の私と中学生の林檎。写真の中で、私は林檎にキスをされていた。確か、林檎が高校に合格した時に母親―檸檬れもんに撮ってもらった写真だったはずだ。以前林檎が持っていた写真データを二人で眺めていた時に見つけ、こっそりとそれを私のスマートフォンに送って待ち受けに設定しておいた。

今ではキスなんて何度もしているが、未だに慣れというものは来ない。いつも林檎と生活しているだけで、私は幸せで満ち溢れている。そして、林檎も同じ気持ちであるという事実が堪らなく嬉しい。

灰を携帯灰皿に落とし、火を消すと私はベランダを後にした。そろそろまた眠くなってきたし、ベッドへ戻るとしよう。

◆ 最後に口から吐き出した煙が、そよ風に揺られてそつと消えた。

不意に隣で動く気配を感じ、私は目を覚ました。まだ日が昇っていないのか、部屋全体は薄暗い。

「すまん、起こしたか」

目が合ったミカンは申し訳なさそうに耳を垂れさせると、私の方へと身をよじつて近づいてくる。

「んーん、大丈夫。どうしたの」

「ちよつと煙草吸つてた」

「そつか」

密着してきたミカンに抱きつき、胸に顔を埋めた。いつもの柔軟剤の香りど、染みついた煙草の匂い。それらとは別を感じるこの落ち着く香りは、ミカンの香りだろう。その匂いが大好きだと率直に伝えると、ミカンは照れたように私の頭を乱暴に撫でまわした。

しかし、こうして温もりに包まれていると胸の奥が暖かくなるのを感じる。これまで何度も何度もミカンとは身を重ね、抱きしめあっているというのに、未だに幸せは薄れない。

「ねえミカン」

「なんだ」

私は顔をあげてミカンの優しい目を見て呟いた。

「ずっと大好きだよ」

ミカンはそれに狼狽えて目を泳がせたあと、誤魔化すように私を強く抱きしめてきた。少し苦しいが、とても落ち着く。

「私も、大好きだ。ずっと、これからも」

「えへへ、嬉しい」

私とミカンは見つめあい、それからキスをして、お互いに照れ笑いを浮かべた。ミカンは眠たそうに大きくあくびをすると、再び私をぎゅっと抱きしめた。

「もうちよっとおやすみ、ミカン」

「ん、おやすみ」

ミカンの胸に顔を埋め、私は目を瞑った。まだ、日は昇らない。

君の腕の中

「いつもご苦労様です」

顔なじみの配達員に礼を述べた林檎が、玄関から鼻歌交じりに戻ってきた。なにやら両手で大きな段ボール箱を抱えている。amazonとロゴが入っているので、通販でなにか買ったのだろう。林檎は満面の笑みでそれをカーペットの上に置くと、

「ねえミカン、カッターどこ？」

「そのペン立てに差さってなかったか？」

カッターはやはり私の示したところにあつたようで、それを用いて早速開封し始めた。

それにしても、本当に大きい段ボール箱だ。林檎だったら身を丸めれば収まつてしまうのではないだろうか。猫のように丸まつて箱の中でぼおつとしている林檎を想像して、胸の奥がきゅんとした。と、私がそんな想像をしている間にも荷物の開封はどんどん進んでいる。そして、ついに荷物の正体があらわになった。

段ボール箱から出てきたのは、直径一メートルはありそうな、巨大なマカロンのクツシヨンだった。桜色のそれはとても肌触りが良さそうで、林檎の腕の中で柔軟に形を変

えている。

「んふふく可愛いでしょ！ この前適当にサイト見てたら一目惚れしちゃってさ」

満足げにクツションを抱きかかえて林檎はそう笑った。林檎は子供の頃もよく両親にぬいぐるみをねだっては、それを抱きしめて気持ちよさそうに寝ていた。ただ、私とこうして暮らし始めてからは寝るとき私に抱き着いていたから、ぬいぐるみとかクツションは必要なかったのに……もしかして、私飽きられたのか？ 抱き心地悪かったのか……この筋肉質の体が悪いのか？

「ちよつとミカン、なんでそんなに落ち込んでるの!？」

慌てた様子で林檎は私に近寄り、顔を覗き込んできた。

「ミカンどうしたの?」

「えつと、その、だな」

思わず目を逸らしてしまった私が口ごもっていると、林檎はクツションを持つてくると私に押し付けてきた。抱きしめろということなのか、無理矢理私の腕の中にそれを収めようとしてくる。私は抵抗しても無駄だろうと察し、おとなしくクツションを抱きしめた。

おお、中々に良い抱き心地だ。滑らかな肌触りに程よい反発感、これを抱きしめて横になるとすぐにも眠気に誘われそうだ。

想像以上のクッションの心地よさに私が感心していると、林檎の安心したような笑い声が聞こえた。

「よかった、ミカンの顔が可愛くなつた」

「なつ、可愛くない！」

「え〜？」

私はにやけ面の林檎にクッションを押し返し、ソファに腰かけた。追つて林檎も私の隣に腰を下ろす。

「ねえ、さつきはどうしたの？」

「……」

まさかクッションに嫉妬したなんて言ったら、さすがに揶揄われそうで私は押し黙ってしまう。それでも購買動機は気になるわけで……。

「なんで、クッション買ったんだ？」

その問いに林檎は一瞬呆気にとられ、すぐに微笑んで答えた。

「ミカンが日中私がいなるときに、腕の中が寂しくならないようにと思つて」

そう言つて私にクッションをはい、と手渡してくる林檎を、私は思わず抱きしめた。なんだ、心配した私が馬鹿だった。林檎を抱きしめる腕に力が入る。

「ありがとう」

「もう、折角買ったんだからクツション抱きしめてよ」
「今は林檎がいるから、寂しくないよ」

君を見てると我慢できない

いい湯だな、あははん。私は懐かしい歌を口ずさみながら、首からタオルを下げて脱衣所を出た。お風呂といったらこの曲だよね。いやまあ、もうお風呂あがったんだけど。

「お風呂あがったよー」

「おう、つて……なんて格好してるんだ」

食卓で本を読んでいたミカンは顔をあげて私を視認すると、少し頬を赤らめて私から目をそらした。確かに身に着けてるのはパンツだけだけど、首から下げたタオルで両胸は隠せてるからセーフだと思う。

というか、今更なにを照れてるんだろうか。今まで身体を重ねたり、一緒にお風呂にも入ったりして散々裸なんて見てるだろうに。私がそう言っても、

「それとこれとは別だ！　せめて上になんか着てくれ……」

とミカンが怒るので私は仕方なくブラとシャツを身に着けてリビングに戻った。まったく、ミカンは相変わらず照れ屋さんなんだから。狼じゃなくて本当は子犬なんじゃないのかな。

「そうだミカン、今度行くお花見のお昼さー」

「あー、コンビニがいいんだろ。たまにはコンビニでも——」

ミカンの言葉はつまり、その視線は私の下半身をまっすぐ捉えていた。そして、

「ズボンも履け、はしたない！」

「お母さんかよ……別に女同士だし、見慣れてるからいいでしょ」

「まったくこいつは……」

赤くなつた顔を隠すように、額に手を当てて俯くミカン。生真面目なミカンに少し呆れながらも、私は話を戻した。

「そうそう、お花見だ。いやね、お昼じゃなくて夜行きたいなつて」

「夜か？ いいけど、暗いだろ」

「いやそれがさー」

会社の先輩から聞いた、ライトアップされた夜桜が楽しめる公園の話はミカンにした。なんでも、飲食可能のベンチテーブルがいくつあつて花見に最適なんだとか。しかも近くにコンビニもある。これは酒を飲みながら夜桜を楽しむという、とても大人っぽい嗜みができるチャンスだ。

私の熱弁を聞き終えると、なぜかミカンはくすくすと笑いを漏らして柔和な笑みを浮かべた。

「大人っぽい嗜み、とか言ってる時点で子供っぽいぞ、林檎」
「ひどー!」

私はわざと拗ねたように口を尖らせ、ソファにぼすんと腰を下ろした。膝を抱えてスマホをいじっている、躊躇ったような声でミカンが私をとがめた。

「林檎、その、下着見えてるぞ」

「……」

「な、なんだよその目は」

「はあ、今日はどうしたのさ。やけに私の身だしなみに厳しいけど」

私が問いかけると、ミカンは照れたようにそっぽを向いて、もごもごと口を動かす。

「だって、最近……シてなかったから……その……」

「なに、聞こえないよ」

「……あんまり無防備な格好してると」

私が咎めると、ミカンは朱に染まった顔をぐいっと近づけて、私の耳元で囁いた。

「狼が我慢できずに襲ってくるぞ」

その一言で、私も自分の顔が熱くなるのが痛いほど分かった。言葉を失い、数秒ミカンと見つめ合ったあと、欲情したような目の狼をぎゅっと抱きしめて、そっと呟いた。

「ベッド、行こっか」

君と甘味と幸せな日々

強まり始めた日差しで目を覚まし、枕もとのスマホを手繰り寄せて画面をつけると、そこ表示された時刻を確認した。

「……もう九時じゃん」

体を起こすと頭を鈍痛が襲う。私はうめき声をあげながら頭を押さええてベッドから身を下ろした。

そういえば、昨日はビール飲みまくって酔ったままミカンとえっちしたんだって、Tシャツに袖を通してながら思い出す。

ミカンはもうすでに起きていたようで、私が着替えを終えてリビングに向かうと、台所で鼻歌を歌いながら朝食を作っていた。この匂いは、前作ってくれたしじみのお粥だ。

私が二日酔いだということを見越して作ってくれていたのだろう。ミカンの優しさに心が温かくなる。

「ミカン、おはよ」

「おはよう。やっと起きたのか」

エプロンを身に着けたミカンの傍によると、焼きあがったばかりの卵焼きが目に残る。相変わらず綺麗に整った形で、それはただそこにあるだけで私の口の中を唾液で湿らせた。

そんな私を見てミカンが微笑を浮かべる。

「……一つ先につまみ食いするか？」

「する！」

「ほれ、口開けろ」

ミカンの好意に甘えて、卵焼きを食べさせてもらうために私は口を開けた。しかし、数秒の沈黙のあと、ふいにミカンにキスをされた。びっくりして私は間拔けな声をあげてしまう。

顔を離れたミカンは、自分からしたくせに頬を朱色に染めていて、それを誤魔化すように私の口に卵焼きを無理やり突っ込んだ。

「どしたのミカン」

卵焼きを飲み込み私が訊ねると、ミカンは恥ずかしそうに朝食の準備をしながら小さく呟いた。

「林檎が可愛くて……つい」

「もうミカンてば、朝からお盛んなんだからー」

「お盛んとか言うな、馬鹿」

軽く頭を小突かれ、お互い顔を見合わせて微笑んだ。

私はミカンの朝食の準備を手伝おうとしたが、ミカンに「二日酔いは大人しく座って待つてろ」と言われてしまい、今は素直にソファで待機している。

窓から差し込む日差しに温もりを感じながら、今日一日の予定を考える。

（そういえば駅前新しいクレープ屋できたらしいし、ミカンと一緒に……あ、ミカン甘いあんまりだったっけ）

私は振り返り、お盆をもって食卓へ向かうミカンに声をかけた。

「ねえミカンって甘いのが苦手だっけ？」

「んー？ ああ、駅前のクレープか」

「あれ、知ってたの？」

「この前チラシが入ってたからな。別に林檎が行きたいなら、付き合うぞ」

「だけど、それじゃミカン食べれないんじゃない？」

「私は林檎と一緒に出掛けられるだけで満足だよ」

でも、とミカンが続ける。

「二日酔いは大丈夫か？」

朝食の並んだ食卓につくと、向かいのミカンは心配そうに眉を下げて訊ねてきた。確

かに二日酔いで頭は痛い。しかし、ミカンの作ってくれたしじみのお粥を食べてしばらく休んでればすぐに良くなるだろう。

そう伝えると、ほっとしたようにミカンは微笑んだ。

「じゃ、昼過ぎにでも行くか」

「うん！」



「ほらミカン、一口あげる」

「ん、ありがとう」

苺ホイップのクレープを一口齧ったミカンは数度咀嚼した後、驚いたように目を見張ると、柔らかかに頬を緩めて呟いた。

「美味しい……私も折角だから買おうかな」

結局ミカンも一つクレープを買って、日当たりのいいベンチに肩を並べて腰を掛けた。そして、この後どうしようかと会話に花を咲かせる。

ミカンと過ごすこんな日々が、幸せでたまらない。

「林檎、口の端についてるぞ……ほら」

「えへへ、ありがとう」

君が浮気をするなんて

嗚呼、手が出そうだ。思わずその頬に平手打ちしそうになるのを、私は下唇を噛んでぐつとこらえた。

今私は、目の前で困ったような顔で正座している林檎を見下ろしている。

なんで、そんな顔なんだ。「ミカンが面倒くさいことを言い始めた」とでも言いたそうなのその表情に、私の苛立ちはさらに募っていく。悪いのは、どう見たって林檎のほうなのに、まるで反省の色が見えない。本当に、ピンタしてやろうか。

なぜ私がこうして涙を流しながら林檎に直面しているのか。それは、きつと無いだろうと信じていたことが起きてしまったからだ。

——林檎が、浮気をした。

机に、写真が無造作に置かれていた。そこに写っていたのは、他の奴に口づけをしている林檎。

私はすぐに問い詰めたが、当の林檎は困ったように、呆れたように眉を下げてため息をついた。自然と涙が込み上げた。林檎にとつて私とはその程度の存在だったのだから。恩を着せたいわけではないが、家事はほとんど私は請け負った。林檎のためを

思つて献立もきちんと考えたり、できるだけ出費を抑えられるようにやりくりもした。私の素直な想いも、何度も何度も伝えた。身体を重ねたのだから、林檎も同じ気持ちだったからじゃないのか。今まで私を幸福で満たしたあの言葉は、すべて嘘だったのか。

私は、黙つたままの林檎を、黙つてにらみつけた。

◆ さて、ミカンが面倒くさいことを言い始めたぞ。

私は涙交じりに難じてくるミカンの声を右から左へ聞き流しながら、どうしたものかと頭を悩ませる。そもそも、ミカンは今は同居人としての立ち位置が一番当てはまつているのだから、責められる筋合いはないと思うのだが……いや、こうなつたミカンに反論しても逆効果だろう。それにしても、相変わらず嫉妬深い狼だ。

いや、確かに私にも非はある。昨夜とある写真をしまい忘れ、それをミカンに見られたのが事の発端だ。私がきちんと隠し通していれば、ミカンを傷つけることもなかっただろう。私がそう謝罪すると、ミカンはさらに顔を歪ませてそうじゃないと私を叱咤した。あーあー、折角の綺麗な顔が台無しだよ。と私はさらに心の中で溜息を吐いた。

だが、決して、断じて、神に誓つて、ミカンに飽きたわけではない。今もこれから、

ずっと大好きだ。恩だつて感じてゐる。何度も伝えた想いに、嘘偽りは無い。だから、このままギスギスするなんて嫌だ。

……素直に、謝ろう。すぐに許されなくても、何度も謝ろう。私はミカンを見上げた。

「…………ごめんなさい」

「許さない」

「もう猫カフェ行かないから……」

「うるさい！ そんなの信じれるか！」

根気よく、謝り続けよう。

君の照れ顔が見たくて

「二名様ご案内しまーす」

今日は珍しくミカンが外食をしたいと言いつ出した。たまにカフェでお茶をしたりすることはあれど、普段は私の健康体を維持するために外食には反対していて、その代わり家で絶品かつ健康な食事を毎日作ってくれている。しかし、二か月に一度くらいの頻度で「たまにはな」と言いつて外食をするのだ。

ちなみにミカンが外食をあまり好まないのにはもう一つがあつて、それはミカンの頭に生えている耳だ。

当たり前だが、ミカンの耳を他人に知られてしまうと大問題だ。以前は外出時はずつとフードを被つていたが、最近はピアスと一緒に買った帽子を被っている。

「フードずつと被つてると、周りから変な目で見られるんだよな」

帽子を買う前のミカンはそれが原因で買ひ物が少し憂鬱だつたらしい。しかし帽子を買つてからはそんな悩みもめでたく晴れ、周りから変な視線を浴びることなく買ひ物できているようだ。我ながらいい買ひ物をしたなと言つたら、調子に乗るなどデコピンされた。

「ミカン、鞆こつち置くから頂戴」

「ん、ありがとう」

椅子に腰かけようとしていたミカンから鞆を預かり、私はミカンの向かいのソファ席に二人分の鞆を置き、その隣に座った。そういえば何気にいつも私上座に座ってる気がするけど、まさかミカンは意図的に自ら下座に座っているのだろうか。もしそうだとしたら、一体どこでそういうのを知るんだろうか……。

「……ミカン、上座下座って知ってる？」

「ん？ 一般常識だろ、それくらい知ってるさ」

自慢するそぶりもなくただ淡々と言ったミカン。当然だと言わんばかりのその表情に面食らったが、私はふと思いつ出した。

「そういえば、就職する前に社会人マナーの本買ったけど、もしかしたらそれ読んだの？」

「そうだが……。というかそれより、早く注文する品を決めろよ」

どうやら当たりのようだ。自分用に買ったものだったが、思わぬところで二度目の活躍をしていたことに軽く嬉しさを感じた。

ミカンに急かされるがままに私はメニューを開き、そこに記された数々の料理に目を落とす。ちらと視線を上げると、ミカンも同様にメニューを眺めていた。下を向いてい

るとよく見えるそのまつ毛の長さに羨望していると、不意に顔を上げたミカンとぼつちり目が合った。

「な、なんだよ。じつと見て」

「んーん、やっぱりミカンの顔綺麗だなーって」

「はあ？」

戸惑ったように少し頬を赤らめたミカンは、メニューを持ち上げて顔を半分隠してしまった。照れ屋なのはいつもだが、今日は外ということもあって五割り増しくらいで照れている。私も性格が悪くなったもので、そんなミカンを見てついつい悪戯心が芽生えてしまった。

「ミカンって肌荒れないし、めっちゃ白くて綺麗だよね」

「……林檎だつて肌荒れしてないだろ」

「髪の毛もグレーアツシユで格好良いし」

「も、元の毛色だし……ていうかちよつと待ってくれ……」

「モデルさんみたいな体型しててホント——」

「林檎!」

突然大声で制され、私はとっさに口を閉じた。付近の他の客も何事かとこちらに視線を向けている。流石にやりすぎたかと怒られることを覚悟したが、ミカンは怒鳴ったり

することなく、またメニューで顔を隠して小さく呟いた。

「は、恥ずかしいから……帰ってからまた、続き聞くから……」

普段のミカンからは想像もできないような、か弱くて可愛いその声に私は思わず固まってしまった。そして、お互いが赤面したまま沈黙は続き、結局注文したのはそれから暫くした後だった。

家に帰ってからまたミカンを褒め殺しにしたのは言うまでもない。

君は酒に溺れ、私は君に溺れ

「みかんなんかおつまみつくつてえ〜！」

「はいはい、作つてやるからその缶でやめとけ」

私はソファから腰を上げ、隣の飲んだくれに強く握られた手を引き抜いて台所へ向かった。

手を離れたことで残念そうな声が林檎から発せられるが、気にせず冷蔵庫からつまみの材料を取り出す。

つまみを作れと言つといて席を立つたら寂しがるとはどういふことか、酔っぱらいの考えは分からん。

アルコール中毒者と擲^{から}擲^かおうとしたが、ニコチン中毒者と返されたらぐうの音も出ないのでやめておいた。

最近互いに酒とタバコへの依存が高まっている気がするから、近いうちに軽く規制した方がいいかもしれない。

私は今まで一週間にひと箱という制約のもと、基本的に一日一本吸っていたため二週間でひと箱でも十分だった。しかしここ数か月は一日に二、三本吸ってしまったている。

成人男性の一日の平均喫煙本数に比べれば大したことはないし、制約も守れてはいるが、私にとっては大きな悩みだ。

林檎も林檎で、飲酒は金曜日だけという制約があるものの、今日のように五本も飲んでしまつてはあまり意味がない気がする。

いや、もし飲酒の制限をなしにしようものなら、こいつは毎日のように四、五本飲むだろう。

実際、まだ一人と一匹の生活だった頃は毎晩のようにビールを数本飲んでいた。

その様子を見ていたからこそ、飲酒は金曜限定という制約を課したのだと、今更ながらに思い出す。

「ほれ、つまみ出来たぞーって……おい」

私が盆にニンニク風味の揚げパスタを乗せてリビングに戻ると、丁度林檎が六本目の缶ビールのプルタブにその華奢な人差し指をかけたところだった。

私の気配に気が付いた林檎は蕩けた笑みを私に向けると、プシュつといい音を立てて六本目を開けた。

「このアルコール中毒め……」

五本目でやめろと言つたが、酔っぱらいに言葉だけの注意は無意味だったか。私は盆をローテーブルに置くとビールの入った段ボールと冷蔵庫の中の冷えたビールを別の

場所へ隠す。あの様子ではこうでもしないと七本目に手を出しそうだからな。

リビングでは林檎がポリポリと幸せそうに揚げパスタを食べてはちびちびビールを飲んでいた。

隣に腰を下ろすと早々に右手を絡めとられる。その手から伝わる体温はすっかり熱を帯びており、見なくても顔が真っ赤になっているのは想像ができた、

「えへへ、みかんもびーるのむう?」

「結構です。それ飲んだらもう寝ような」

「んうゝまだのむう……おえ」

「頼むからここで吐かないでくれ……」

私は肩にもたれかかってくる林檎の髪の毛を手で整えながら、その朱に火照った顔を眺めた。

決して酒には強くないくせして、毎度毎度よく飽きもせず酔い潰れるまで飲めるものだ。酒は呑んでも飲まれるな、というが、是非ともそれを林檎の座右の銘にしていたきたい。

しかしこんな酔っぱらいでも、たとえ本当に私の真横で吐かれても、強引に酒臭いキスをされても、私は林檎を嫌うことはできないだろう。制約をこっそり破っていても、きつと愛してしまう。

それは、私自身が林檎への愛に溺れているからだ。

私は今日も、一晩限りの酒に溺れた同居人と、長い長い夜を過ごす。

「おええええ」

「うわっホントに吐く奴があるか！」

君の好きなところ

毎日顔をやつれさせて帰ってくる林檎だが、今日はいつにも増して疲れ切った顔をしていた。おかえりのハグをしようとしたが、その体力さえ無いようでも玄関先に突つ伏してしまふ。ハグできなくて少し残念なのは林檎には内緒だ。せめて普段の生活においては主導権は握られたくないという願望からだ、これが夜のみ下になる者の性さがだろうか。

「ほらほら、せめて寝るならベッドに行ってくれ。夕飯は？」

華奢な体を支えて起き上がらせてやりながら訊ねると、林檎は力なく、しかしそれでいて強い意志が伝わってくるような口調で、短く答えた。

「食べる」

林檎の好きなところのひとつ、どんなに疲れてても用意した飯はしっかり食べる。二日酔いするときも例外ではない。(二日酔いときは私が二日酔い専用の食事を用意しているからなのだが)

「林檎のそういうところ好きだぞ」

「……他に好きなところは？」

たまには素直になるのもいいかと思つたが、やはり慣れないことはしない方がよいな……さらに求められてしまった。林檎に肩を貸したまま、一緒に寝室へと足を運ぶ。私に身を預けた林檎から外の匂いがする。

「ん、あと百個くらいあるぞ」

「えー百個だけ……？」

「まだまだずつと一緒に暮らすんだから、そのうち千個くらいまで増えるぞ」

肩を抜き、林檎をベッドに降ろしてやる。私を見上げたその顔は、先ほどまでのやつれた様子はすっかりなくなり、ほんのり紅潮した頬で私を嬉しそうに見上げていた。その上目遣いに思わず私は目をそらしてしまう。不意打ちでのあんな可愛い表情はやめてほしいものである。

「うわ目えそらされた……」

それでもまだ疲れてるのか、棒読みくさいセリフを吐きながら林檎はベッドにぼふんと体を倒した。暫く林檎は天井を見つめ、私はそんな林檎を見つめていた。口にはしないが、心の中で審査員が、林檎のスーツ姿の可愛さに、百点満点の札を掲げていた。元が良いから何を着ても似合うな、林檎は。

そんな時間が数分間続いたのち、林檎の突然の一言で沈黙は破られた。

「は、寝てた」

「うん、そんな気がしてたよ。飯はどうする?」

確認の意味合いも含めてもう一度訊ねると、林檎は「んー」と唸り、スーツの袖で目を擦ってから

「お風呂先はいる」

とだけ呟いた。風呂に入るのは結構だが、湯船に浸かりながら寝落ちするのは勘弁してほしい。前科があるから、なおさら不安である。寝落ちしないように、とだけ注意して、風呂場に向かう林檎を見送ってから私はリビングへ戻った。林檎が上がってきたら食事はもう一度温めるとして、それまで洗濯物でも畳んでおこうか。

私はテレビ前に敷かれたカーペットに腰を下ろし、その近くにあつたかごから取り込んでおいた洗濯物を引っ張り出してそれを一枚ずつ丁寧に畳んでいった。

「お風呂あがりました〜」

「はいよ。飯にしようか」

膝に手をつけて立ち上がろうとすると、それを抑え込むような形で林檎が上から抱き着いてきた。腕が首にあたつて少し苦しい。私は林檎の腕に手をかけて少し緩めると、まだ少し湿っている林檎の髪をそつと撫でた。

「どうした、まだ眠いのか?」

「んーん、おかえりのハグでできなかったから。ミカンも残念そうだったし」

そんなことない、と咄嗟に反論できなかつたのは、勿論凶星だからである。私が言葉に詰まっていると、体を離れた林檎が悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「尻尾は素直だからね、すぐ分かるよ」

「……うるさい」

「ミカンのそういうやっぱり素直じゃないとこ、私好きだよ」

林檎のその揶揄うような表情がうつとおしかつたので、仕方なく抱き着いてその顔を視界から外した。あくまでも、仕方なくだ。決して、ハグが物足りないわけじゃない。

君がいないと駄目なんだ

目の前が、真つ暗になった。

絶望する傍ら、頭の片隅では、これは比喻ではなく本当に視界が暗くなるのだと感心さえしていた。

私が帰つてくると、君はいなくなっていた。

仕事の疲れを癒してもらおうと急いで帰ってきたのに、君はいなかった。その事実にも、思わずその場にへたり込んでしまう。何も考えられなくなる。大げさと言われるかもしれないが、それくらい、私にとっての心の支えだったのだ。

とはいえ、自分が受けたショックは予想以上のものであった。自分で思っているよりも依存していたのだと、失って初めて気が付いた。

……早く君を見つけに行かなければ。頭では分かっている、身体が動かない。心に受けたショックに加え、さらに身体には月曜日からの一週間分の疲れが蓄積している。心身ともにズタボロになった私に足には、中々力が入らなかつた。

数分間かけてなんとか冷蔵庫に手をつけて立ち上がる。そのままフラフラと足を進め、リビングのソファに腰をぼすんと下ろした。それだけでどっと疲れ、私は深く息

を吐いた。

「どうしよう……」

頭を抱え、私は歯を食いしばった。もちろん、今すぐに君のもとへ駆け出したい。しかし、何度も言うが疲労が溜まりすぎて動き回れる気がしない。今この状態で外に出ようものなら、そのまま力が尽きかねない。行きたいけど行けない、そんなもどかしい状況に、自分への苛立ちがだんだんと募っていく。

そもそも悪いのは私なのだ。もっと早くに気が付いていれば、こんな事態にはならなかったはずだ。自分の至らなさに、私は下唇を噛みしめた。私はいつだってそうだ。仕事でも日常生活でも、鈍感ですぐに大事なことを忘れる。いい加減、うんざりだ。

ああ、こうしている間にも、私の体はますます動きが重くなっていく。最早、立ち上がることもできない。君がいなくて、こんなにも苦しい。そして、そんな君に気を配ってやれなかった自分が、ふがいなくて仕方がない。私はうなだれ、強く願った。

神様、どうかお願いします。もう一度だけ、チャンスをください。もう一度、やり直させてください。今度こそちゃんと気を付けるから、もう同じ過ちは繰り返さないから……！

◆ 君がいなくて、私は駄目なんだ――。

「……さつきから何をしてるんだ、お前は」

「ビールが、なかった……」

「そうか」

「先週飲み干したの忘れてた……」

「買って来いよ」

「疲れすぎて無理……」

「……」

「金曜だから、帰宅即ビールしたかったのに……」

「諦めろ」

「ビールがないと、私死んじやう……」

「このアル中め……」

結局、ミカンがコンビニで買ってきてくれた。

君の帰りが待ち遠しい

「あー……ひまあー」

ソファの上で何度も寝返りをうち、傍に置いてあった小説をちらと読んではずぐに放り出し、テレビは点けたものの興味を惹く番組はやっていなかった。何も手に付かない、何をしても満たされない。私は今そんな状況下に置かれていた。

折角の日曜日なのにもかかわらず何故こんなにも暇を持っているのか。その答えは、非常に単純であった。

「ミカン早く帰ってきてよー……」

◆ 愛しの同居人^{ペット}が買い物に行つてしまったからである。

朝起きるとーいや起きたの十時過ぎだけど。ともかく私が目を覚ましてリビングへ行くと、ミカンはすっかり着替えを済ませて頭には橙色の帽子を被っていた。

「おはよう林檎。私ちよつとスーパーのセールに行つてくるから留守番頼むぞ。朝飯はテーブルの上にあるからそれ食べる。じゃ、行つてきます」

口早にそれだけ言い残したミカンは颯爽と玄関を出て行つてしまった。留守番て子

供じやあるまいし、そもそもこの家主私なだけけど。

私はミカンに言われた通り遅めの朝食を摂ったあと、特に何をするでもなくソファに腰を落ち着けた。スマホを弄り、ぼおつと惚けたり、そんな風になっている間に、気が付けば私は寝転がって天井をただただ眺めていた。何故か？ そう、暇だからである。

ミカンは普段平日に必要な買い物を済ませるから、休日は基本ずつと家にいる。だから、仕事以外で私の傍にミカンがいないということは滅多にないのだ。

(ミカンがいないと何もする気が出ない……こんなことならついていけばよかった)

しかし後悔しても遅い。なんなら今頃買い物を終えて帰路についている頃だろう。だからもう少しの辛抱だと、自分に言い聞かせる。いい加減子供じやあるまいし、一人が寂しいだなんて恥ずかしいじゃないか。

すつかりミカンの匂いが染みついたマカロンのクッションを抱きかかえ、私はミカンの帰りを待った。

◆ 大好きな君の帰りが待ち遠しい。

「あつ……」

私は人目を気にしつつもシャツの襟元を摘み、身体へ風を送った。梅雨が明けたと思っただけの暑さだ。この気温の落差で林檎が体調を崩さないように気を付けなければ

ば……。

鋭い直射日光に耐え続け、漸く到着したスーパーマーケットの店内は、極楽と称するに値する涼しさだった。入口付近のかごを手に取り、買い物メモを見ながら各種売り場を回る。生鮮食品のコーナーで品定めをしていたら、近くのアイスコーナーの大きなPOPが視界に入り込んできた。折角だ、予定にはないがアイスでも買っていこう。林檎が嬉しそうにアイスを口に運ぶ様が目に浮かび、思わず頬が緩んでしまう。

ああ、早く林檎の待つ家へ帰りた。店内を回る足を、少し早めた。

スーパーマーケットの店内を出ることに数秒躊躇ったが、諦めて再び炎天下に我が身を差し出す。家までの道のりは過酷そのものだが、林檎の元へ戻るには歩くしかないのだ。仕方あるまい。

(林檎の自転車借りればいいんだが、乗ったことないしなあ……)

人の形になって随分経つとはいえ、自転車に乗った経験がない私にとってはそれはひどく難しく見えた。だから、林檎が平然と自転車にまたがって会社へ向かう姿に、いつも密かに嘆息している。

私も乗れたら近場の買い物ももっと楽になるし、少し遠出してショッピングモールでの買い物だってできるはずだ。

帰ったら、林檎に自転車のコツでも聞いてみるかな。私はずり落ちかけた買い物袋を

肩にかけなおし、まっすぐ前を向いて帰路を速足で進んだ。

早く林檎の顔が見たい。折角の休みの日、林檎がずっと家にいる日なのだ。平日の日中のように、寂しくない幸せな日。セールがなければずっと林檎の傍で一日を過ごしていたはずだ。

もうとつくに子供じゃないが、決して口にはしないが、林檎がいないと寂しくてたまらないのだ。

大好きな君の元へ私は駆け出した。

君のことが知りたくて

今日も変わらず彼女は可愛い。

私は少し離れた席で熱心に仕事をしている鈴木さんを眺め、キーボードを叩いていた手を止めた。見る限りきちんとしたお化粧をしていないようだが、それであの可愛さはどうなのだろうか。実はそれが原因で、彼女は女子社員たちからの反感を買っていた時期があった。勿論私があの手この手で宥めて、陰湿ないじめなどへの発展は阻止したが。

手元のパソコンに真剣な視線を送っている鈴木さんから視線を外し、壁に掛けられた時計で時刻を確認する。

十二時手前、もうじき昼休憩の時間だ。

私は立ち上がり、鈴木さんの席へと向かった。彼女は近づいてきた私を見つけると、その子犬のような可愛らしい目で私に微笑みかけた。そんな顔されたら勘違いしてしまいそうだ。彼女に同居人がいることはもう明らかだが、その間柄はまだ不明だ。兄弟姉妹か友人ならまだ私にもチャンスはあるが、彼氏だった場合はもう手遅れだ。

それでも可能性にかけて、私は今日も彼女を昼食に誘う。

「鈴木さん、一緒に食堂行かない？」

「喜んで！今日は私お弁当なので、先に席取つときますね」

そう言って嬉しそうに弁当を鞆から取り出す彼女は、鼻歌交じりに「今日はハンバーグ」と口ずさんでいる。そのハンバーグも、やはり同居人に作ってもらったのだろうか。以前は私と同じく食堂か、もしくはコンビニ弁当だったのだが。

「お弁当嬉しそうね。誰に作ってもらってるの？」

食堂への道のりで、私は思い切つてそう訊ねてみた。その返答は、眩しい笑顔とともに返ってきた。

「同居人が月水金はお弁当作ってくれるんです。食堂もいいけど栄養管理しやすいからって」

「そうなの、優しい人ね」

違う、私が聞きたかったのはそうじゃない！その返答では私の中の情報は一切更新されない。その同居人が家族なのか友達なのか、はたまた恋人なのか、私が知りたいのはそういう情報なのだ。

まあ仕方がない。鈴木さんにばれないようにこつそり肩をすくめ、暫くすると私たちは食堂へ到着した。

「新田先輩、こつちです！」

カウンターでA定食を受け取り、食堂内を見回していると、奥の方から私を呼ぶ声があった。見ると、鈴木さんがこちらへ大きく手を振っていた。私が席につく、鈴木さんは礼儀正しく「いただきます」と合掌してから弁当のふたを開けた。

「相変わらず綺麗なお弁当ね」

「えへへ、私料理下手なので、本当に尊敬します」

幸せそうな微笑みを浮かべてそう言う鈴木さんは、ハンバーグを口に運んでより一層嬉しそうに目を細めた。

「同居人さん、お料理上手なのね」

「はい。私、料理だけじゃなくて家事も苦手なので、本当助けてもらってばかりなんです。だから仕事だけでも……って思ってるのに失敗ばかりで……」

悲しそうに俯く鈴木さんに、私は慰めの声をかける。

「きつと、そうやって感謝してもらえるだけで同居人さんは嬉しいと思うわ。鈴木さんはその人に大切にされてるのね」

そう言うのと鈴木さんの顔は再び明るくなり、私の大好きな笑顔を見せてくれた。

「ありがとうございます。大切にしてくれるし、料理もうまくて、家事もできて、本当にかっこいいんですよ」

私はその一言を聞き洩らさなかった。「かっこいい」、か。ということとは彼氏の可能

性が高いのか……。いや、まだ確定したわけではない。

チャンスはまだまだある。もつと、鈴木さんのことが知りたい。

目の前の愛しい後輩と言葉を交わしながら、その笑顔を目に焼き付けた。

君が見てくれないから

ふかふかなソファに身を沈めながら、私は仰向けになつて手元のスマホの画面に視線を注いでいる。対人戦のゲームに熱中して慌ただしく指を動かしていると、お風呂上がりのミカンがリビングにやってきた。おかえり、と声をかけるが、生憎ゲーム中のため視線までは送れなかった。

「なんだ林檎、またそのスマホゲームやってるのか」

半ば呆れてそう言ったミカンは、余つたソファのスペース―私の頭の傍に腰を下ろした。それと同時にシャンプーのいい匂いが鼻をくすぐり、思わずほうと息をつく。同じシャンプーのはずなのに、他人がつけるとどうしてこうも感じ方が変わるのだろうか。

シャンプーの匂いに気を取られてゲームへの集中力が切れたせいで、私は敵に攻撃されてしまう。深く溜息を吐きながらスマホを掲げていた腕を下げた。

「お、負けたのか?」

「そうだけど、なんで嬉しそうな」

ミカンの口調は明るく、見上げるとその顔は笑みを浮かべていた。その意図が分からずに私が頬を膨らましていると、何故かミカンはいそいそ立ち上がり、冷凍庫から何か

を取り出して戻ってきた。

「ほら林檎、アイス食わないか？ お前の好きなやつ買っておいたぞ」

そう言つてアイスを手渡してくるので、有り難く身体を起こしてそれを受け取る。お、しかも新発売のやつだ。

ソファで食べると汚してしまうのが怖いので、食卓へ移つてからアイスを食べ始める。私についてくるようにして、ミカンも私の向かいの席につき、煙草を啜えた。ちなみに最近になって、ミカンは電子煙草に乗り換えた。理由は健康のためと、煙草を吸うのにわざわざ換気扇の下やベランダに行くのが面倒くさくなつたかららしい。電子煙草なら私も匂いは気にならないので、ミカンは私の傍で喫煙することが増えた。

「私も電子ビール欲しいな」

「何馬鹿なこと言つてるんだ」

そんな戯言をミカンに一蹴され、私はわざと不貞腐れた顔をしながら、手元のスマホをいじくる。それを見て、ミカンが眉間に皺を寄せた。

その渋い表情に私が驚いていると、ミカンは席を立つて食卓を迂回し、私の隣までやつてくる。そして突然胸倉を捕まれ、顔をぐいと寄せてきた。私はその間、ただ茫然としているだけで何も反応できていない。

ミカンは口から煙草を離すと、キスするのかと思うくらい顔を近づけて、一言呟いた。

「スマホなんかよりも私を見ろよ」

揺れる耳と尻尾、ほんのり朱色に染まった頬。むすつとした表情のまま睨み付けてくるミカンを、私は気が付けば抱きしめていた。

「可愛いー！ なぁに構ってもらえなくて寂しかったのー？」

「ちがつ、林檎の視力が悪くならないようにだ！ おい、子供みたいに撫でるな！」

そう抗議しながら腕の中で暴れていたミカンも、暫くするとその抵抗をやめた。そして小さく、

「……だって、最近ずっとゲームじゃないか。私には目もくれないで」

私の胸に顔をうずめてそう呟くミカンの髪の毛を撫でながら、私も反省していた。

「ごめんね。やりすぎには気を付けるよ」

「ふん、分かればいいんだ」

そのあと今までの寂しさを埋めるように、ミカンは暫く私の腕の中を離れようとしなかった。

君の眼中に私はいない

「——ご、りんご、林檎！　ねえ話聞いている!？」

私は自分を呼ぶ声にはっと顔をあげると、向かいの席では友人である春野桃がむすつと頬を膨らませながらお弁当を食べていた。スマホ画面に集中しすぎて桃の声が耳まで届いてなかった。素直に謝ると、桃は拗ねたように頬を膨らませ、唐揚げを口に放り込んだ。

「まったく林檎ってば、何度呼んでも反応しないんだもん。そんな熱心に何を見てるの?」

「ごめんごめん。お母さんからミカンの動画送られてきてさ」

画面にはリビングで昼寝をしているミカンの姿が収められた動画が延々リピートで流れている。桃の話聞き流しながら五分位ずつとこれを見ていた。桃は私のスマホ画面を覗き込むと、呆れたように溜息を吐いた。

「ミカンって……林檎のペット?　ペットなんて家帰れば見れるでしょ、私の話聞いてよ!!」

桃は何やらクラスの中に気になる相手がいるらしく、その相手とどうすれば恋人にな

れるか相談に乗ってほしいらしい。中学生なのにもう恋人を作ろうとしてるなんて、桃は進んでるなあ……それとも私が遅れてるのかな？

顔をかすかに赤く染めながら恋語りをする桃、それを聞きながらこつそり私はまた画面の中で寝息を立てるミカンに視線を注いだ。

「でね、その……気になる人はペットのこと大好きで、それはいいんだけど、どの友達よりそのペットの方が好きというか——」

「へえー、大変だねえ」

「……ほら、そういうとこ」

「え？」

私の生返事に対するその小さな一言に違和感を感じて顔を上げると、少し悲しそうに眉をひそめた桃が私をじっと見つめていた。今のはどういふことか訊ねようとしたが、桃は廊下から友達に呼ばれて席を立てってしまった。まあまだお弁当を食べてる途中だからすぐ戻ってくるのだろうけど……。

私はさっきの桃の表情をもう一度頭に思い浮かべてしばらく惚けてから、お弁当を食べる手を再び動かし始めた。

なんで桃はあんなに悲しそうにしていたのだろうか、ミカンの寝顔をガン見してたから話をきちんと聞いていなかった……。いや、だから悲しそうにしていたのか。確かに

あれは良くなかった。いくら親友だからと言って無視したり聞き流すのは、親しき中にも礼儀ありというものだ。

(戻ってきたらちゃんと言わないとな……)

桃が戻ってくるのを待ちながら、私は反省の意を込めてスマホをポケットにしまつて弁当を食べ進める。



「——え、鈴木さんまだ気づいてくれないの？」

「うん……ペットのワンちゃんの動画に夢中で聞いてくれない……」

桃は自分呼んだ友人と廊下で壁に寄りかかりながら話していた。

「あー、鈴木さんのペット愛の異常さは、他クラスでも有名だしね……。男子からも人気高いのに、ペット以外興味なさそうだし……」

友人のその言葉に、桃は俯いてしまう。桃が林檎に想いを寄せて長いが、今のところその想いが伝わったことは一度もない。

桃は深く溜息を吐いて、頭の中に林檎の笑顔を思い浮かべた。

願わくば、いつか、この想いが伝わりますように——。

君の眠り姿について

なんということでしょう。私は仕事用の鞆を静かにカーペットに下ろすと、目線の先の女神へそつと近づく。

「……………んん……………」

私が仕事から帰ってくる、ミカンがソファで気持ちよさそうに寝ていた。いつも通り退勤時の報告をしたにもかかわらず反応が返ってこなかった。急いで帰ってきていたら、ただ寝ていただけのようにだ。

ミカンの無事に安堵すると同時に、その愛おしい寝顔で私の幸福度は跳ね上がった。た。

「可愛い……………」

いつもは私が帰ると玄関まで出向いてくれるミカンだけど、今日は眠気に耐えられなくてソファで眠ってしまったのだろう。それでもタゴ飯の支度はきちんと終わっているあたりミカンらしい。

起こすのも悪いし、取りあえず先にお風呂入ってこようかな。そつとグレーアッシュの髪の毛を一撫ですると、私は物音を立てないようにリビングを後にした。

お風呂から上がってリビングを覗くと、ミカンは変わらず気持ち良さそうに寝息を立てていた。傍によると、寝息に合わせて鼻が小さく動いている。それが可愛くて、悪戯心が芽生えた私はそれをちよいと指でつついた。

「んう……」

鼻先にくすぐったさを感じたのか、ミカンは顔をしかめて身をよじる。そのせいで、シャツがめくられて白いお腹があらわになってしまふ。風邪をひいてしまふといけないので、シャツを直そうとするが、私はその手を思わず止めた。

ミカンのお腹は無駄な肉がなく、引き締まっていて美しい。さらに適度に割れた腹筋は、私の目を釘付けにしてくれる。なんて綺麗なお腹なんだろう、と、私はミカンの裸を見るたびに心の中で感嘆していた。しかしミカンは恥ずかしがり屋のため、不用意にお腹を褒めたり触れたりしようものならば、すぐ真っ赤になってそっぽを向いてしまふだろう。だから今まで心の奥底に秘めていたのだ。

「だけど、今ならば。」

「ミカン……」

私はそつと、白く美しいお腹に手を伸ばす――。

「……なにしてるんだ」

「ひゃいつ、ごめんなさい!!」

不意に開かれたその口に私は思わず飛び上がった。少し頬を赤く染めたミカンは身体を起こし、こちらを怪訝そうにじつと見つめてくる。お腹周りには手があてがわれ、しつかりとガードされてしまった。

私に注がれる猜疑さいぎの視線から逃れるように、私は冷や汗を流しながら寝室へと逃げ出した。

「まさか寝込みを襲うほど欲求不満だったとは……」

「だからごめんって！ 別に欲求不満なわけでもないし！」

怒ってるのか恥ずかしいのか、こちらを決して振り返らずに料理を温めなおしているミカンに、何度目か分からない謝罪をする。いい加減に機嫌を直して欲しいが、非があるのは私なので大人しく待つしかない。

ミカンが漸く振り返ったときには頬の赤身は消えており、湯気の立つおいしそうな料理が食卓に並べられた。

「ほら、早く食べるぞ欲求不満」

「あれ、まだ怒ってる!? あと欲求不満じゃないって！」

私は強めにそう否定したが、ミカンは「へえ」と言って私に顔をぐいと近づけてきた。「折角お前の好きな腹触らせてやろうと思ったのにな」

その意地悪な笑みに、私の意志は脆く崩れ落ちた。

「……欲求不満なので、触らせてください」
「ん。じゃあ、夜に、な」

その日の夜は普段の五割増しくらいで触った。

君の初めての酔った顔

毎週金曜は私の飲酒解禁日であり、その度にミカンと夜中に自宅飲み会をしている。言わずもがな私はビールが大好きで、いつものように箱で用意された缶ビールを飲んでいた。

「相変わらず旨そうに飲むな」

「ミカンも飲めたらいいのにねー」

私がそういうと、ミカンは少し残念そうに眉を下げて首を振る。ミカンはやはりビールの独特の苦みが不得意なようで、最近では試し飲みすらしなくなってしまった。もうビールに慣れることは諦めたようだ。

しかし、私はふと気が付いた。

「ねえ、ミカンってビール以外のお酒飲んだことあったっけ」

ミカンは暫く考え込むと、

「そういえば飲んだことなかったな。林檎がビール以外飲まないから、そもそも買ってもないな」

と言って裂きイカを口に啜えた。

ミカンの言う通り、私は基本的にビール以外のお酒に興味がないので、焼酎やワインなどの他の酒類には手を出していなかった。しかし、毎回私だけがお酒を飲むのは不公平ではないか。折角ならミカンと一緒にお酒を飲んで二人で盛り上がりたい。

ビール以外のお酒ならば、ミカンも飲めるかもしれない。そう考えた私は、ばつと立ち上がりコートを羽織った。

「ミカン、ワインと焼酎どっち飲んでみたい？」

「え。あ、ああじゃあワイン」

「おっけー！」

「おい、気をつけろよ！」

「まだ一本飲み切っていないから平気ー！」

心配そうなミカンの声を背に、私は近所のコンビニまで全力疾走した。

「たっだいまー！」

「早っ、おかえり」

ミカンの前にレジ袋から取り出したワインの瓶をドンと置き、コートを脱いでミカンの用グラスを用意する。

「……こういう時って普通ワイングラス出すんじゃないか？」

「え、うちにはビールジョッキしかないよ」

用意されたジョッキを見て不服そうに眉をひそめるミカン。ごめん、許して。ワイングラスなんておしやれなものうちにはないんだよ。

ジョッキに注がれたワインを恐る恐る一口飲んだミカンは、一拍おいてその表情を満面の笑みに変えた。こちらに向かつて嬉しそうに掲げてきたジョッキに、私も飲みさしの缶ビールを合わせて掲げる。

「改めて、かんぱーい！」

なんだか感慨深い思いに浸りながら、私は一気にビールを啣あおった。まさかミカンと二人でお酒を楽しむ日が来るなんて……。向かいのミカンも幸せそうにワインをごくごく——。

「あの、ミカン？ お酒慣れしてないんだからあんまり……」

「うう、りんごおお……だいすきい……」

なんとということでしょう。先ほどまでピンピンだったミカンちゃんが、顔を真っ赤にして呂律も回らなくなっています。

あまりの酔いの早さに私が茫然としている間も、ミカンは何故か目を涙で潤わせながら独り言葉を垂れ流している。

「りんごがいなかったらわたしいまごろしんでたろうしい、りんごとくらすのがしあわせだし、りんごにあえてよかったああ。ぐすっ」

号泣しながら私に礼を述べてくるその姿に思わず胸がきゅんとなったが、私はなんとか理性を取り戻してミカンを寝室へ連れていく。まさかこんなにお酒に弱いとは思わなかった。今日はもう寝かせよう。

「ほらミカン、もう寝よ？」

「んうう、りんごひんやりしてる〜」

「ミカンが熱いんだよ！」

首元にすりすり顔を押し付けてくるミカンを半ば無理やりベッドに横たわらせると、あつという間に寝息を立て始めてた。なんだかどつと疲れが押し寄せたが、真つ赤になったその寝顔を眺めていたら、いつの間にか私の頬は緩み切っていた。

初めて見た君の酔顔すいがんは、ビールなんかよりずっと私を幸せにしてくれた。

君とお出かけナウ

天気は快晴。雲一つない青空を眺め、私はソファに寝転がりながら溜息を吐いた。

折角のいい天気なのに、出掛ける用事が何も無い。必要な買い物は今しがた終えたばかりだし、まだ昼前である。ミカンと家でくつろぐのも良いが、こんな日に外に出ないなんて勿体ない。

「ねーミカンどっか出掛けないー?」

「どっかって……どこにだ」

「どこだろう……」

「……」

呆れたように「やれやれ」と肩をすくめながら微笑んだミカンは、台所からこちらへ向かってくる。身体を起こしてミカンに顔を向けると、その手には菜箸を持っており、この後昼食で出されるであろうミートボールがつままれていた。

「ほら、あーん」

「あー」

口に放り込まれたミートボールを咀嚼して味わっていると、優しく頭を撫でられる。

まるで母親のような柔らかな笑みを浮かべたミカンは、私の額に小さく口づけをした。

「もうすぐ昼にするから、そしたら適当に外でもぶらつこうか」

「うん！」

◆ 心地よい日光を浴びながら、私はどこを回ろうかと午後の予定に想いを馳せた。

今日は日差しが暖かいので、私もミカンも薄手のパーカーで外を歩いている。ただの無地パーカーなのに、ミカンが着るとなんでこんなに格好よく見えるんだろう、不思議。

「なんだ、そんなじろじろ見て。危ないからちゃんとお見ろ」

「えへへ、ごめんね。でも危なかったら助けてくれるんでしょ」

調子に乗るな、と頭を小突かれる。呆れたように笑うミカンの手を取り、私たちは街並みを歩き出した。

目的は特にないが、強いて言えばウィンドウショッピングだろうか。二人で肩を並べて適当に歩き回っていると、いろいろなお店が目に入ってくる。駅前最近できたブティックや、お洒落な小物を店先に並べた雑貨屋、女子高生たちが並んでいるタピオカドリンクの専門店。

「そういえばミカン、タピオカって知ってる？」

「知ってるさ。あれだろ、えっと、ナウなヤングに人気なやつだろ」

「合ってるけど、その言葉は古いよ。ナウくない」

「そうか、ナウくないのか……」

ふむ、と難しそうに顎に指を添えて考え込むミカンがおかしくて、つい笑い声をあげてしまう。ミカンは基本的に買い物以外で外出しないので、そもそも他人と接触する機会が少ない。その代わり、日中はうちにある本を読んだり、ニュースを見たりして暇を潰していると言っていた。

そのため、今どきの流行語というものには少し疎いのだろう。まあ“ナウなヤング”という言葉に関しては、むしろよく知っているなど驚いたけど。

難しそうな顔をしているミカンの手を引き、女子高生達の行列へと向かう。

「折角だし、タピオカ飲んでいこ。写真も撮ろ！」

「ん、あれだろう。“いんすたばえ”ってやつだろう？」

自信满满そうにそう言って私に笑顔を見せてくるミカン。普段しつかりしているだけに、こういう時のミカンはとても可愛らしく感じ、つつい頬が緩んでしまう。

「そうそう、大正解。超ナウい」

タピオカドリンク専門店の行列は長かったが、繋いだ手の温もりと隣に寄り添うミカンのおかげで、ちっとも苦にはならなかった。



「ねえミカン、構ってー！」

「今夕飯作ってるナウ」

それから数日間、ミカンは気に入ったのか、“ナウ”を連発しまくっていた。

君が不機嫌な理由

『仕事そろそろ終わりか？ 気を付けて帰って来いよ』

『ありがと！ ミカン大好き〜?? 今日のご飯なに？』

『餃子と炒飯だよ』

『餃子??? 最高！ すぐ帰る！』



……気まずい沈黙が、最高に美味しいはずであるミカンの手作り餃子の味を隠してしまっている。私はミカンに気付かれないようにそっと目線を茶碗から上げた。

「……」

綺麗に伸びた眉をひん曲げ、眉間に皺を寄せたまま仏頂面で餃子を口に運んでいる同居人。彼女の不機嫌の理由を、私は察することができていない。帰宅するや否や、今と変わらない仏頂面を出迎えられ、何故怒っているのかという私の問いにも答えることなく、今に至るといわけだ。

「……、御馳走様でした……」

「……」

いつもならば「お粗末様」と嬉しそうに目を細めて私の完食を喜んでくれるミカンが、私にもくれずに食器を下げてそそくさとお風呂へ行ってしまった。

「林檎先風呂入るか？ それとも腹いっぱいまでまだ入りたくなきや先もうけど」

と、気を遣ってくれたミカンはどこへ行ってしまったのだろうか。私は、彼女に何をしてしまっただろうか。

ソファに力なく倒れ、自分の行いをひたすらに遡る。が、それらしい原因は浮かび上がってこない。今朝はいつも通り優しくお見送りもしてくれて、行つてらっしゃいのキスもしてくれた。そもそも、私が帰宅する頃にメッセージを入れてくれた時点では不機嫌さは全く感じなかった。

なら、一体何が原因なのだ。いよいよ心当たりがなくなり、私は思わず泣きそうになる。

もうここまで来たなら仕方がない。怒られるのを承知で、直接ミカンを問い詰めるしかない。答えてくれるまで、粘ろう。このまま気まずい状態が続くだなんて、死ぬほどいやだ。

「おかえり」と、温かく出迎えてくれるミカン。ご飯を食べる私を優しく見守ってくれるミカン。いつでも私に一番に寄り添ってくれるミカンを、取り戻したい。

「……………なんだ」

お風呂から戻ったミカンの腕をつかみ、無理矢理寝室へと連れ込む。そのままベッドの脇へ座らせ、未だに不満そうな顔のミカンを、私は問い詰めた。

「お願い。なんで不機嫌なのか教えて」

「……」

「このまま気まずいままなんて嫌だよ。ダメなところがあるなら直すから。お願い」

「……」

少し罰が悪そうに目線を下げるミカンに、私は「お願い」と泣きそうになりながらも訴えた。

「ミカンに冷たくされるのが、一番つらいよ……」

しばしの沈黙の後、ミカンは静かに、スマホを取り出した。そこに、ミカンの不機嫌の理由があるようだ。

差し出された画面に表示されていたのは、私が退勤する前のやりとりだった。

『仕事そろそろ終わりか？ 気を付けて帰って来いよ』

『ありがと！ ミカン大好き〜?? 今日のご飯なに?』

『餃子と炒飯だよ』

『餃子??? 最高！ すぐ帰る!』

私とそのやり取りを確認し顔を上げると、ミカンはむすつと顔をしかめながら、不服

そうに呟いた。

「ミカン大好き」よりも、餃子の方がハートが多い……」

……脳裏には以前の猫カフェ事件が浮かんでいた。そして私は、この同居人が存外面倒くさい拗ね方をするのを再度思い知らされたのであった。

君に手を差し伸べた日のこと

東京は迷路のようだと、上京したての鈴木さんは苦笑しながら私にそう愚痴をこぼした。東京で生まれ育った私には分からないが、恐らく住んでるうちに慣れるだろうと、鈴木さんを励ました。

「もし行きたい場所があれば、私が連れてってあげるからね」

などといった、下心だらけの言葉も付け足して。まあ結局今に至るまで、鈴木さんからプライベートのお誘いーもとい道案内の依頼が来ることは無かったのだが。

（まあ迷路みたいって言っても、スマホには地図アプリもあるし、そうそう、困ることはないか……）

すつかり会社にも東京にも馴染んだ鈴木さんを思い浮かべ、肩を落としながら私は電車を降り、駅の構内を歩く。

未だに鈴木さんの同居人について詳しく知れていないし、プライベートのお誘いも出ていない。このままではいつまで経っても距離を縮めることが出来ないとは理解しているのだが、どうも鈴木さん相手には奥手になってしまっている。

（想いを寄せるのはこれで4人目なのに、こんなの初めてね……）

はあ、と溜息を吐く。空気は充分すぎるくらいに冷えきっているので白い息が出るかと思つたが、私の吐息は目に映ることなく寒空に消えていった。寂しさを少し感じながら、見えない吐息を追つた視線の先で、私は――

「どうしよう……(ハハハ)……」

と駅の出口で、スマホ片手に涙目で狼狽えている女の子を見つけた。女の子についても、20代前半――鈴木さんと同じ年くらいだ。

道に迷っているらしく、地図アプリを見ているのかスマホを必死にくるくると回している。彼女の周囲の人々は彼女のことなんて気にも留めていないようで、皆澄まし顔で彼女の脇を通り過ぎていく。

私も周りに溶け込むように、俯いて彼女の横を抜けようとして――東京は迷路のようだと、困つたように笑う鈴木さんの顔が、脳裏に浮かんだ。

「えっと、あの建物が……」

「お嬢さん」

涙目の彼女へ手を差し伸べ、私は優しく微笑みかける。意外と背の低かつた彼女は、私を見上げて今にも泣きそうな顔を浮かべた。

「どこ行きたいの？ 連れてってあげるわ」

「あ、あの、日向社に行きたくて……」

日向社といえば、有名な小説の出版社だ。思わぬ行先に驚きながらも、地図アプリで日向社の場所を確認する。……現在地と日向社は、駅を挟んで反対側だった。

「出る出口を間違えたのね。多分すぐ着くわ、一緒に行きましょうか」

そう言つて、彼女を連れて日向社へ向かう。

「へえ、打ち合わせ。貴方小説家なの」

「はい……デビューをきっかけに最近上京したんですけど、まだ都会に慣れなくて。なので、お姉さんに声掛けてもらえて助かりました」

なんでも、乗る電車の方向を間違え、挙句に道にも迷ったので、予定を大きく遅れてこんな時間に打ち合わせする羽目になったという。

「気にしなくていいのよ。当たり前のことしただけだしね」

なんなら初めは素通りしようとした——というのはい言わないでおく。

そうこうしていると日向社へ到着し、彼女は何度も何度も頭を下げてきた。

「じゃあ私はこれで」

そう立ち去ろうとした私を、彼女の手が捕まえる。

「あのっ、今度お礼したいので、連絡先！ 教えて貰えませんか！」

その必死な表情に、私は半ば気圧されるように、メッセーリアプリの連絡先を彼女に伝えた。彼女は登録された私のアカウントを確認すると、

「新田 苺…苺さんですね！」

と眩しいくらい笑顔を浮かべた。そして、また今度必ず連絡をすると行って、駆け足で日向社へ入っていった。

そんな彼女の背中を見送り、私は再び帰路に戻った。歩きながら、彼女のアカウントを確認して、一つ小さく息を吐いた。

「春野 桃さん、ね」

君と出会って変わったこと

ずっと繰り返してきた日常の中で、少しだけ変わったことがある。

とはいえ、今日も今日とて上司は鼻息荒くふんぞり返っているし、食堂のおばちゃんも優しい笑顔で労ってくれる。可愛らしい鈴木さんも、真面目に仕事をしては、上司に失敗を指摘されて頭を下げている。

そうだ、変わったのは職場でのことではない。

最寄り駅で降りて、すっかり暗くなった夜道を歩く。この通勤路も、いつも通りだ。では何が変わったかと言うと――

「あ、母さんおかえりなさい！」

我が家に、度々客人がやって来るようになったことだ。

私は鞆を机に置くと、スーツを脱ぎながら客人に声をかける。

「あのね、おかえりじゃなくて。貴女自分の家あるでしょう」

「一人暮らし慣れなくて心細いんですよ！」

そう言ってお気に入りのクッションを抱きしめて口を窄めたのは、一ヶ月前のあの日、私が手を差し伸べた彼女だった。

「心細いって、貴女ももう大人でしょう……春野さん」

腕に力を入れたのか、春野さんが抱くパンケーキの柄のクッションがぐにやりと歪んだ。

「もう、桃って呼んでくださいいって言ってるのに。大体苺さんのが歳上なんですから、さん付けしないでくださいよ」

「はあ、仕方なかったとはいえ一度でも家に上げたのが間違いだったわ」

ぶーぶーと文句を言い続けている春野さんを素通りして、私はキツチンに立つ。夕飯の支度をしながら、まだ頬をふくらませている春野さんに、溜息混じりに呼びかけた。

「ほら、手伝って。春野さんもどうせ食べるでしょう」

「はーい」

◆
そうして、今日も私は春野さんと食卓を囲むのだ。

春野さんを助けた日の翌日。早速彼女から連絡が届いた。

『今日空いてますか？ 昨日のお礼に夕ご飯奢らせてくださいー！』

通知欄に表示された春野さんからのメッセージを見て、私は手早く返信を済ませる。

『空いてますよ。昨日の駅で19時に集まりましょう』

春野さんは私よりも早く駅についていて、私を見つけると顔に満面の笑みを浮かべて

こちらへ駆け寄ってきた。

昨日は打ち合わせがあったからかキツチリした服装だったが、今日の彼女はガーリーなワンピースを身にまとっていて、随分可愛らしい印象を受けた。春野さんは背がやや低い、身体が細いのでワンピースがよく似合っている。

「母さん、こんばんは！ 先日は本当にお世話になりました！」

「そんな大したことはしてないわ。今日は楽しくご飯食べましょ」

「はい！」

春野さんはまだこの辺りに詳しくないため、私がたまに行くレストランで食事するごとに。春野さんと歩きながら、会話に花を咲かせる。

「へえ、じゃあその“初恋の人”に会うために上京したってこと？」

「上京したのはデビューしたからですけど、その人に本当に支えられたので、お礼を言いたくて」

「ただ、数年ぶりに連絡する勇気が出ないのだと、春野さんは苦笑交じりにそう言った。なんでも、彼女の小説家になる夢を応援してくれたのは、その“初恋の人”ただ一人だったのだとか。だから、夢がかなった報告とそのお礼がしたいとのことだった。

「さて、続きは食べながら話しましょうか」

「はい！ 何食べようかなあ」

レストランに到着し、私たちは料理を頼んで食事を始めた。
しかし、

「あええ、いちごさんがさんになんいるう」

「ワイン一杯で泥酔って冗談でしょう……？」

驚異的なお酒の弱さに私は溜息を吐き、泥酔状態の彼女の代わりに代金を払い、仕方なく自宅へ連れ帰って介抱したのだった。

翌朝、春野さんにはすり減りそうなくらい額を床に擦りつけて謝罪された。

君しかないから

ここ最近、新田先輩の笑顔を見る機会が増えた。というより、新田先輩がスマホを眺めながら笑みを浮かべていることが多々ある。何を見ているのか分からないが、時折何かを打ち込んでいたので誰かと連絡を取っているようだ。

(彼氏さんでも出来たのかな、新田先輩美人さんだし、彼氏さんも格好良いんだろうなあ)

新田先輩の変化は気になるが、仲が良いとはいえプライベートに踏み込むのは失礼だろうから、訊ねたい気持ちはぐつと堪えている。

だけどやっぱり気になるわけ——。

「うーん」

「どうした、そんな難しい顔をして」

ソファで唸っていると、夕ご飯の食器を洗い終えたミカンが手を拭きながら戻ってきて、私の隣に腰を下ろした。なんだか最近、ますますミカンがお母さんみたいに見える。手を拭きながら台所から出てくるところとか、私のお母さんにそっくりだ。

「んー、最近新田先輩が嬉しそうだから、どうしたのかなーって思ってただけ」

「……お前は本当に、新田苺が気に入ってるんだな」

その口調は明らかに不満そうで、顔を見遣るとやはりむすつと顔をしかめていた。ただ、心なしかいつもよりも悲しそうに見えた気がした。

「気に入ってるっていうか、一番お世話になってるし、仲が良いだけだよ」

そう弁解するも、ミカンは暗い顔のままだ。珍しい。こういうことはよくあるが、いつもはもつと軽く拗ねるくらいだ。今のミカンは、不貞腐れているというより、寂しそうな顔をしていた。

「……ミカン？」

心配になつて顔を覗き込みながら声をかけると、ミカンはこちらへ身体を向け、暫く迷つたように視線を泳がせてから、意を決したように口を開いた。

「心配、なんだ」

振り絞るようにして発せられたその声は、いつもの声とは似付かぬほどにか細かった。

ミカンは顔をまつすぐこちらへ向け、不安を滲ませた表情を浮かべる。

「林檎には、同僚がいて、上司がいて、友達や親友もいる」

ミカンはそこで言葉を区切り、寂しそうに、ぎゅつと私の手を握つた。その手から伝わる小さな震えに、私はミカンのやや潤んだ瞳をまつすぐ見つめ返した。普段のミカン

からは考えられないような、抗えない寂しさと弱さを含んだ、今にも泣きだしそうな瞳。

「だけど、私には、林檎しかいないんだ……私は、自分を外に出せないから」

「うん」

相槌を打ち、握られた手を優しく、強く握り返す。ミカンは狼女だ。他人は恐らく、それを受け入れてはくれないだろう。ミカンがありのままの自分でいられるのは、基本的にこの家の中だけだ。

「私には林檎しかいないけど、林檎の周りには多くの人がいるから、不安で堪らないんだ」

倒れ込むように私の方に頭を預けてくるミカンを安心させるように、くしゃくしゃとそのグレーアッシュの髪の毛を撫でた。それから、優しく背中をさすりながら語り掛ける。

「不安にさせてごめんね。でも、大丈夫だよ。私はずっとミカンの同居人で、友達で、家族で、恋人だから。ね」

身体を起こして再び向き合ったミカンの瞳は濡れていて、いまだ不安が離れずにいるようだった。そんな不安を拭いたくて、私はそつとミカンを抱き寄せ、二回続けて口付けをした。

「ね、約束。私はずっと、ミカンと一緒にだよ」

「……ああ」

少し震えた、涙ぐんだ声で返事をする、安心したようにぎゅつと私に抱き着てくるミカン。私はその背中をミカンが落ち着くまで撫で続けた。

君と赤面と火照る身体

身体が熱い。火照って仕方がない。

「ん、はあ……」

そんな私を、ミカンは悪戯っぽい微笑みを浮かべて眺めている。

「んんっ……！」

慣れない体感に、私は悶えている。

「ミカン……私……っ」

声が、吐息が震える。視界が滲む。涙が一滴頬を伝った。

「私っ、もっ、無理……」

熱を抑えきれない自分の身体を抱き、私はミカンに訴える。ミカンは柔らかな笑みを浮かべて、その綺麗な手を私に伸ばした――。

「だからやめとけって言っただ」

「だって美味しそうだったんだもん、この担々麺!!」

コップに注いだ冷たい緑茶を一気に飲み干し、私はからかうように笑っているミカンに抗議した。

◆ 今日久しぶりに外食しようかとミカンに提案された私は、たまにはカップ麺を食べたいと思いいスーパーに向かった。

「カップ麺久しぶりだなー、何にしよう」

「随分嬉しそうだな」

私が鼻歌交じりに棚を眺めていると、隣のミカンが少し不服そうに私の頬を指で突く。カップ麺にまで嫉妬するとは……まあそこも可愛くて好きだけど。

「勿論ミカンの手料理の方が好きだけど、やっぱりたまにはこういうジャンキーなもの食べたいんだよ」

だから落ち込まないで、と背伸びをしてミカンの頭を帽子の上から撫でてあげると、ミカンは照れてすぐにそっぽを向いてしまう。相変わらずの照れ屋だ。なんて可愛いんだろうか。

そんなミカンの機嫌を取るために手を繋ぎつつ、改めて棚一面のカップ麺の中からお昼に食べる品を選ぶ。

どれも美味しそうだが、その中でも特に私の目を惹いたのは――

「これにしよっ！」

「それは……担々麺か」

私の手元を覗き込んだミカンは意外そうに眩き、少し考えてから

「林檎、小さい頃から辛いのが得意じゃないだろう。やめといた方が良いんじゃないか？」と心配そうに眉をひそめた。

「大丈夫だよ、私もう大人だし！」

自信満々に答えた私は、得意げな顔をしながら買い物かごに担々麺を入れた。

そう、私も立派な社会人になったのだ。辛いラーメンくらい朝飯前だ、多分。これ、お昼ご飯だけ。



「大丈夫だよ、私もう大人だし！」

「ねえ真似しないでよ！」

ミカンはスーパードでの私の言動をわざとらしく真似、くすくすと笑う。私は恥ずかしくて赤くなった顔を隠すように、ミカンと交換してもらった塩ラーメンを啜った。

それにしても、ミカンはよく平気で食べられるなあ……。目の前で涼しい顔をしながら担々麺を淡々と食べるミカンをじっと眺め、感心する。辛いものを平然と食べるその様は私の目に格好よく映り、思わず箸を動かす手が止まってしまう。

「……なんださつきから。こっちじつと見て」

ミカンは私の方を怪訝そうに見遣ると、すぐにまた麺を啜り始める。

「んーん。やっぱりミカン格好いいなって思ってただけ」
「つくぐ!?!」

次の瞬間ミカンがむせてしまう。顔も真っ赤だ。私はそれが可笑しくって、さっきの仕返しのもりで悪戯っぽく尋ねてみる。

「それは辛いのか？ 恥ずかしいのか？」

「……今日の夕飯覚悟してろよ」

結局、その日の夜は激辛麻婆豆腐がたっぷり食卓に並んだ。

君を魅了するもの

窓から見える星空に得も言われぬ魅力を感じ、心を奪われてしまう。

私はベッドに横になったまま、手にしていた本を閉じて暫くその星空を眺め続けた。何故だろう。綺麗なようで、どこか寂しさも感じる。そんな星空に、私の視線は釘づけだった。

「林檎お待たせ。電気消すぞ——って、どうした。ぼうっとして」

寝室にやってきたミカンに声を掛けられて、私は漸く星空から意識を外し、不思議そうに首をかしげるミカンに顔を向けた。普段は髪を後ろで一つに結っているミカンだが、寝るときは結わずに下ろしている。肩辺りまで伸びたグレーアッシュの髪の毛を揺らしながら、私の隣に寝転がりこんできた。

「んーん、星空が綺麗で眺めてただけだよ」

「ああ、確かに綺麗だな」

私の返事で窓へ視線を向けたミカンも、納得したように優しい微笑みを浮かべた。

消すぞ。と言って、ミカンはリモコンで部屋の照明を豆電球に切り替えた。薄暗くなったベッドの上で、ミカンの体温を真横に感じながら、私はもう一度窓の外へ想いを

馳せる。

「……ねえ、ミカン」

「なんだ」

寝返りを打ってこちらへ顔を向けたミカンは、眠そうに一つ大きなあくびをした。

「今日は豆電球じゃなくて、真っ暗にしてもいい？」

「いいけど、林檎は真っ暗じゃ怖くて寝れないんじゃないか？」

「それ何年前の話？ もう大丈夫ですー」

ミカンは反論する私をまるで子供をあやすように、分かった分かった。と頭を撫でて微笑みを浮かべた。小学生の頃からずっと一緒に居るからか、ミカンからすると私はまだ少し子供っぽく見えているようだ。おじいちゃんが高校生の孫に対して、小学生を相手しているように接するような、そんな感じ。

「林檎ももう、すっかり大人だもんな」

だからミカンは、私が大人であることを主張する時、いつも子供を見るような目で微笑むのだ。

豆電球を消すと、隣のミカンの表情でさえ曖昧になり、私は布団の中でミカンの手をぎゅつと握った。

「ふふ、やっぱり怖いのか」

「違います、手繋ぎたくなっただけです」

「そういうことにしといてやる」

違う。と言っているのに、ミカンは私が怖がっていると思い込んで、クスクスと笑いながら頭をぼんぼんと撫でてくる。

「なんで、真っ暗にしたかったんだ？」

ミカンに胸元に顔を埋め、されるがままに頭を撫でられていると、そう静かに訪ねられる。私は顔を上げ、暫く窓の外に目をやってから答えた。

「真っ暗にした方が星空が綺麗に見えるかと思つて」

再びミカンに抱き着いて身体を密着させる。ミカンの鼓動が直に伝わり、胸元に顔を埋めてそのリズムに身を委ねる。

いつも使っている、我が家のボディソープの甘い匂い。電子煙草に変えてからやや薄れた、ミカンの煙草の匂い。胸いっぱい香りを感じ込むと、深い安心感に包まれる。

「で、星空は眺めなくていいのか」

ミカンにそう言われもう一度星空を眺めてから、やはりミカンの胸元に顔を戻す。

「星空よりも隣の同居人の方が、私を夢中にさせるみたい」

「当たり前だろ。私がどれだけお前の事を大事にしていると思つてるんだ。たかが星なんかに負けてたまるか」

「えへへ、大好きだよミカン。いつもありがとう」

暗闇の中で隣のミカンの表情は見えないけど、私が大好きないつもの笑顔を浮かべた気がした。

君に初恋をした瞬間

「え、桃つてもしかして、小説家になりたいの!？」

「ちよ、声大きい！」

私は慌てて目の前の友人を宥め、周りに聞かれていないか周囲を見回して確認する。どうやら誰もいないようだ。人通りの少ない廊下で助かった。

胸の中のリングノートをぎゅっと抱きしめ、顔を驚ろかせたままの友人から視線を逸らして俯く。

やらかした。ネタ帳なんて移動教室にまで持って行くんじゃないやなかった。まさか廊下に落として、しかもその中身まで見られるだなんて。自分で小説書いてるだなんて、きつと彼女にも引かれただろうな。

◆
昔から、頭の中で物語を作ることが好きだった。外で遊んだり流行りのものに乗らず、空想ばかりしていたから、周りの目には気味悪く映ったのだろう。小学生の頃、自分の考えた物語を書き留めていたノートをクラスの主格的女子に見られ、馬鹿にされた。しかも彼女はそれを誰彼構わず言いふらし、気が付けば周りからは嘲笑われる毎

日。

「妄想してにやにやしてんじやないわよ、この根暗！」

ノートを取り上げられ、中身を大声で読み上げられ、挙句には破り捨てられた。恐らく、別に彼女らは本当に私が気に食わなかったわけではない。ただ、自分らがカーストの上位に居座るため、虐げる相手が欲しかったのだ。それがたまたま、根暗で気の弱い私に向いてしまったのだ。反抗するすべのない私は、卒業まで陰湿ないじめを受け続けた。

私はトラウマから逃げるように、中学は少し離れたところへ進学した。小学生時代の二の舞にならないよう、努めて明るく振る舞った。根暗だと言われないよう前髪を切り、自分から周りに話しかけるようにした。

その甲斐あって、私は無事普通な女の子だと周りに認識された。

しかし、創作意欲は収まるどころかどんどん溢れ出していた。将来は小説家になりたいと願っていたが、母親には「小説だけで生活できる人なんてほんの一部なのよ」と諭され、父親は「そんなことより宿題はやったのか」と取り合ってもくれない。

それでも次々沸いてくる物語を捨てることはできず、私はこつそりとリングノートにその物語を書き記していた。ネットにも小説を投稿し始めていたから、その案や次の話のネタなどもそこに書いてあった。

だから、誰にも見られてはいけなかったのだ。良いネタが思い浮かびそうだからと言つて、移動教室に持つていくだなんて言語道断だったのだ。小説家になりたいと知られば、白い目で見られるのだ。親から、友達から、他人から。



最悪だ。中学ではいじめられまいと努力してきたのに。このまま逃げだしたら、彼女はネタ帳のことを誰かに言うかもしれない。それだけは、止めたい。

「あの、このノートのこととは——」

「私、桃のこと応援するからね！」

予期せぬその言葉に、俯いていた顔を上げる。私の前に立つ彼女は目を輝かせ、眩しい笑顔を浮かべていた。

「小説書けるなんてすごいよ、私なんてなんの才能もないや」

「……でも、小説家なんて無理だって、皆言うし」

卑屈になり目を伏せた私に、笑顔のままの彼女は、私の手を取つて力強く言った。

「無理なんかじゃない。桃がなりたいて願つて、努力し続ければ絶対叶うよ。だから、私は応援する」

その言葉に、どれだけ救われただろうか。これまでの人生で私の夢を肯定してくれたのは、夢は叶うと、応援すると、私を鼓舞してくれたのは、彼女だけだった。

「……ありがとう、林檎」

「ちよ、ちよっと、なんで泣いてるの!?!」

この日、私は彼女―鈴木林檎に、恋をした。

君が好きでたまらない

——私いつも、きみが好きだよ。

「おーい林檎。起きろよ」

林檎の身体を揺するが、林檎は中々起きない。そればかりか、布団を被ってしまった。
「いや潜るなって。今日は出掛けるんだらう？ 早く起きろよ」

「あとごぶん……」

「そのセリフ三回目だぞ。いい加減起きろ」

最初に起こしてからもう二十分は経っている。私は痺れを切らして林檎から布団をはぎ取った。

流石に起き上がった林檎に着替えるよう促し、リビングへ向かって朝食を支度する。

ちらにと寝室を確認すると、林檎はきちんと寝間着を畳んでしまっていた。以前はよく脱ぎ散らかしていたので注意したら、最近はちゃんとしまうようになった。偉いな、林檎は。

私服に着替えてきた可愛い林檎と食卓をはさみ、各々の席に座る。

白米、目玉焼とベーコン、そして味噌汁。シンプルなメニューだが、林檎が一番好きな献立だ。特に目玉焼き、林檎は半熟が好きなので、いつも火加減には気を使っている。好きな人には美味しい料理を食べてもらいたい一心で、昔こつそり頑張ったのだ。

林檎は礼儀正しくきちんと合掌してから、朝食を食べ始める。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

美味しそうに目玉焼きを食べる林檎を見て、私は胸の奥に幸せを感じる。林檎のその笑顔だけで、朝早く起きて朝食を作る価値がある。

と、林檎がこちらをじつと見つめているのに気が付き、少し恥ずかしくなる。

「な、なんだよ」

林檎に訊ねると、幸せそうな笑顔で、こう言った。

「ミカンありがとね。私いつも、君が好きだよ」

唐突なその言葉に、思わず固まってしまう。不意打ちに弱いのを知ってるくせに、林檎は平気でこういうことを言ってくる。もう、なんなんだ。嬉しすぎて、幸せ過ぎて怖い。

◆ 今日最高に、幸せな朝ご飯だ。

「おーい林檎。起きろよ」

ゆさゆさと身体を揺すられるが、眠気が私を掴んで離さない。窓から指す日差しから逃げるように布団を被る。

「いや潜るなつて。今日は出掛けるんだらう？ 早く起きろよ」

「あとごふん……」

「そのセリフ三回目だぞ。いい加減起きろ」

とうとう痺れを切らしたミカンに布団をはぎ取られ、私の樂園は終わってしまった。グッバイ、エデン。

流石にこれ以上は怒られそうなので、目を擦りながら渋々身体を起こす。上向きにぐいっと身体を伸ばして、大きく欠伸をした。

「ほら、着替えて朝ごはん食べよう」

「はーい」

寝間着を脱いで私服に手早く着替え、寝間着をきちんとタンスにしまってからリビングへ向かう。脱ぎっぱなしにしていると、ミカンから母親のようなお説教が飛んでくるのだ。

リビングではミカンが食卓に料理を並べていて、それらは美味しそうな香りと湯気を立ち昇らせていた。

白米、目玉焼とベーコン、そして味噌汁。シンプルな朝ご飯だけど、ミカンは卵の火加減がとても上手い。だから、目玉焼きはいつもとろつとろの半熟なのだ。私はミカンの作る目玉焼きが大好きだ。

席に着き、手を合わせて朝ご飯を食べ始める。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

目玉焼きの黄身に箸を入れ、半熟加減を確認する。うん、今日もとろとろだ。最高。醤油をかけ、口へ運ぶ。口の中の幸せに感動しながら、正面のミカンを見つめる。

「な、なんだよ」

「ミカンありがとね。私いつも、黄身が好きだよ」

こんな半熟の目玉焼きを作るなんて、最高の同居人だ。

何故か顔を真っ赤にして固まっているミカンを眺めながら、私はベーコンを堪能する。

今日も最高に、幸せな朝ご飯だ。

君が隣にいることが

行きつけのスーパーマーケットを、夕飯のメニューを考えながら歩き回る。

(今日は野菜が安い日だから、多めに買っておこう。あと調味料も減ってきてるから……)

「苺さん苺さん、今日餃子にしません？ 冷凍食品コーナー見てたら食べたくなっちゃいました」

買うものを真剣に考えていた私の元へ歩みより、そう言いながら朗らかな笑顔を浮かべる彼女。その手にはお徳用の冷凍餃子を持っていた。私は数々の野菜から目線を上げ、彼女にわざとらしく溜息を吐いて見せる。

「あのね、今日は野菜が安いから、野菜を使って——」

「じゃあ野菜も買って、今日は餃子にしましょ！」

「……桃って割と頑固よね」

ここ数か月ですっかり私の家に入り浸るようになった彼女—桃とは、もう気を使わない程度の仲になった。というか、なってしまった。

桃はほぼ毎日私の帰宅に合わせて私の家にやってきて、一緒に夕飯を食べ、週末は泊

まりさえしている。今日は買い物をしてから帰るとメツセージを送ったら、一緒に行くと言つてスパーで合流したのだ。

それにしても、きつかけはただ道案内をしただけだというのに、何故こんなにも私に懐いたのだろうか。今までの彼女でさえ、こんなに家に上げてはいない。

そしていつの間にか、そんな彼女を私は拒むことなく受け入れてしまっている。

「ほんと、遠慮がない子ね貴女は」

「えー、ちゃんと夕飯は交代で作ってるし、食費も払ってるじゃないですか」

「そういうことじゃなくてね。大体、今日の当番は私でしょう」

「じゃあ今日は私が作りますよ!」

「作るつて、ほとんど餃子を焼くだけじゃない……。分かったわよ、もう」

やったあ。と桃は無邪気な笑顔で、私の持つ買い物籠に餃子を入れた。彼女は出会つた頃とは打つて変わつて、我が儘をよく言うようになった。遠慮の要らない仲、というより、彼女に気を遣うの必要性を感じなくなつてしまったのだ。だから「春野さん」から「桃」と呼び捨てに変えたわけだが、結果的に桃はそれを喜んでいた。

「最近苺さんが優しくしてくるから嬉しいです。すっかり呼び捨ても定着しましたし」

「優しくしてるんじゃないくて、諦めてるだけ。自惚れないの」

「またまた〜照れないでくださいよ」

桃はいつもならここで私の腕を指で突いてくるが、今はお互い買い物袋で手が塞がっているため、軽く肩を私に当ててきた。

桃はよくこうしてちよっかいを出してくる。成人している割には幼い性格だから、もしかししたら私は放っておけないのかもしれない。だから、こうして関係を受け入れてしまっているのではないか。

(実は一緒にいて居心地が良い、っていうのは、調子に乗るから黙っておきましょう)

隣を歩く桃の楽しそうな笑顔を見て、私は自然と頬を緩ませていた。いつも明るくて無邪気な桃が傍にいと、こちらも釣られて元気になつてしまう。仕事疲れも、もう薄れてきている。

「あれ、やっぱ苺さん嬉しいんですか？ 顔にやけてますよ」

「失礼ね、にやけてなんかないわよ」

私は桃の頭を小突き、彼女はえへへと笑いながら私に肩を当ててくる。

それから、桃が振つてくる下らない話題に付き合いながら、二人肩を並べて夜道を歩いた。

君は私のもの

林檎はよく、唐突な提案をしてくることがある。小さい頃から突拍子もない発言をしてよく親を困らせていたし、同居してずいぶん経つので私もそれに慣れていた。慣れたつもりでいたのだが……。

「ミカンにキスマーク付けたい」

流石にこの提案には、咄嗟に言葉を出すことができなかった。



夕食も風呂も終え、あとは寝るだけの二十三時。ベッドの上で私は料理のレシピ本を読み、林檎は私の肩に頭を預ながらスマホをいじっていた。肩に乗つかる温もりに幸せを感じながらレシピを眺めていたら、林檎が唐突に提案してきたのだ。

「ねえ、ミカン」

「ん、どうした」

「ミカンにキスマーク付けたい」

真顔で、至って真剣な口調で、林檎はそう言った。キスマーク。キスマークって、あれだよな。

林檎は私の顔を覗き込みながら、真つすぐにこちらを見つめてくる。普段だったらそのままだつめ返すか、キスの一つや二つするのだが……今しがたの発言のせいで、私は硬直してしまう。

「キ、キスマークか？ どうしたんだ急に」

なんとか声を振り絞ってそう訊ねると、林檎はスマホに視線を落として理由を述べた。

「キスマークって、自分のものだって証みたいな感じじゃん。だから、ミカンに付けたいなーって」

純粹な笑顔を浮かべて、林檎はスマホの画面をこちらへ向けてくる。そこには、キスマークを付ける心理などの解説が書かれていた。なるほど、これを見て付けたくなくなった。なるほど。

理由は分かったが、いざ付けたいと言われるとどうにも恥ずかしい。どうしたものかと悩んでいると――

「ちゅうう〜」

「あつ、ま、待てつ、ちょ、林檎！」

私の返答を待たず、林檎が私の首元に顔を埋めてくる。そして、強く私の肌に吸い付いてきた。林檎の唾液で肌が濡れ、より唇と密着する。強く吸われるその感覚に、思わ

ず身震いしてしまう。

止めようと林檎の肩を掴むも、林檎は頑なに離れようとしなない。構わずに私の首元を吸い続けている。

酷く長い時間が経ったように感じたが、実際には十数秒程度だろう。

漸く顔を離してくれた林檎は、満足そうに微笑みながら唇をぺろりと舐めた。その仕草に自分の顔が熱くなるのが分かる。

ベッド脇の手鏡を取って首筋を見ると、それはもうくつきりと痣が出来上がっていた。キスマークというよりも、吸引力皮下出血と言った方がしっくりくるような濃さだ。

「これで、ミカンは私のものだね」

林檎はにこにこしながら私に抱き着き、そう言った。

こんなことをしなくても、私はこの先ずっと林檎のものなのに。自分のものだという証を、独占欲の証を付けたいのは、むしろ私の方だ。私には林檎しかいないけど、林檎は、そうじゃないから。

「私は心配ないが、林檎は心配だな。新田苺もいるし、今度昔の友達と会うらしいし」
「……じゃあ、ミカンも証、付ける？」

身体を離し、両手を広げて私を誘う林檎。その誘惑に誘われるように、私は――

◆ 「あら、鈴木さん首筋どうしたの？」

新田先輩に声をかけられ、私は首筋に張った大きめの絆創膏に手を添える。

寝て起きても消えなかった、くつきり残った、独占欲。思わずにやけそうになるのを堪えながら、私は落ち着いて微笑んで答えた。

「飼いだに噛まれただけですよ」

君と深夜に“悪いこと”を

「林檎待て、早まるな」

「でも、我慢できないのっ……っ！」

私は心苦しく思いながらも、ミカンの手を振り払った。ミカンが辛そうな表情を私に向ける。やめて、そんな目で私を見ないで。

ミカンが私のことを大切に思ってくれていることは重々も承知だ。だけど、私の欲求に抗うことができなかった。

ごめんね、ミカン……。

私は、禁忌を犯した——

「どうしても、今ラーメンが食べたいの！」

「まったく……体壊しても知らんからな」



我が家では、基本的に外食は二ヶ月に一回か二回程度だ。一般的な子連れの家族であればその程度が普通だろうが、うちは女二人——片方は狼女だけれども——だけで暮らしている。同性と同居している友達は高頻度で外食をしているらしいのだが、我が家の外

食が少ないのは言わずもがな、ミカンが私の健康面に配慮してのことである。

「外食は身体に悪い。林檎は私が作ったバランスのいい飯を食って長生きしろ」が口癖のミカンだが、それでも「たまにはな」と言つて外食することはある。

ミカンの料理はすごく美味しい。それこそ、下手な飲食店には引けを取らないほどだ。

「だけど、そうじゃないんだ。私の舌は、今、不健康な食べ物を探しているんだ！」

「そう、今すぐ——深夜一時に、ラーメンが食べたい！」

「体に悪いからこそ、食べたいと思つてしまう……それが罪なことだと分かつていても、一度食べたいと思つてしまつたら、もう抗えないの！」

「もういいよ、分かつたから食べよ」

「ミカンが普段私の体調を気遣つてくれてるのは——」

「分かつたつて！」

二十分にもわたる私の熱弁に負けたミカンは、溜息を吐きながら食卓に着いた。

私は台所へ足を向け、戸棚からインスタントラーメンを取り出す。と、リビングからミカンが私に声をかけてきた。

「私は醤油ラーメンがいい」

その発言に少し呆気にとられてしまい、私は遅れて言葉を返す。

「あ、ミカンも食べる？」

「林檎が食べるなら、一緒に食べる」

若干拗ねたようなその口調に、思わずきゅんとしてしまう。何この子可愛い。折角なので私もミカンと同じ醤油を選び、二人前を手早く調理した。調理って言っても、ほとんど麺を茹でるだけだけど……。

へいお待ち、とラーメン屋の大將じみた口調でミカンの前に置くと、冷ややかな目線を向けられた。酷い、乗ってくれてもいいのに。

しくしくとわざと口にしながら、ミカンの向かいに自分のラーメンを置き、私も食卓に着いた。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

会話もなく、深夜一時を過ぎたりピングには、二人の麺を啜る音しかない。それが何故か心地よくて、ちらと目線を前に向けると、ミカンも笑顔を浮かべて一心にラーメンを食していた。

ミカンが下に垂れてしまった髪の毛を耳にかけ直す。無意識の行動だろうが、その仕草にどきりと胸が高鳴った。なるほど、世の男性の好きな女性の仕草ランキングに入る理由がよく分かった……。

「……なんだよ、じつと見て。早く食わないと麺が伸びるぞ」

そう言ったミカンの顔は赤く、ラーメンで暑いのか私の視線で照れているのかはわからない。

また暫く麺を啜る音だけが聞こえる時間が流れ、ポツリとミカンが呟いた。

「深夜のラーメンも悪くないな」

「少し悪いことしてる気分だけど、それが良いんだよね」

「ふっ、なんとなく分かったよ」

そして二人で見つめ合って、まるで悪戯な子供みたいに笑いあった。

結局そのまま勢いで冷凍餃子も焼いて、二人で平らげてしまった。翌日の食事が野菜ばかりだったの言うまでもない。

君との面倒くさいこの関係

『今日少しだけ残業するから遅くなる』

『はーい！ 適当なお店で時間潰してますね！』

スマホの電源を切り、手元の缶コーヒーを一口飲んでから、再び作業に取り掛かる。社内には他にも数名が残っていた。私と同じ、残業組だ。残業とはいっても、桃に送ったメッセージ通り、そんなに大したものではない、切りのいいところまで作業をしたら、直ぐに退社するつもりだ。

少しの残業でも桃に連絡を入れるのは、私が帰宅しない限り、桃は玄関の前でずっと待っているからだ。家の鍵は勿論かかっているので桃が私の家に入ることはできない。以前少し残業で遅れた時も、ずっと玄関の前に居たらしい。それからは、帰宅が遅れるときは桃に連絡を入れ、どこかで時間を潰してもらっている。

(まったく、面倒くさいわね……)

私はいつからか、そう思うようになっていた。

近場の喫茶店で時間を潰していた桃と合流し、自宅へ向かう。その道中、桃の話を聞き流しながら、私は考えていた。

残業で遅れると、桃に連絡をしなければならぬ。今まで残業した時は簡単な料理で夕飯を済ませていたが、桃もいるとそういうわけにもいかない。桃が当番の日だって、今から料理し始めるのだ。従って夕飯の時間は遅くなる。

なんて面倒くさいのだろう。

だから、この面倒くささ、煩わしさを解消する術を、私は用意した。すごく、簡単なことだったのだ。

この関係を、終わらせればいい。

「莓さん？ ちょっと、話聞いてます？」

「ごめん、聞いていなかったわ」

「もう、どうしたんですか。ずっと上の空で」

そう言っただけ私の顔を覗き込んだ桃に、私は言った。

「帰ったら、大事な話があるの」



手早く着替えを済ませてリビングに向かうと、先に桃が席について待っていた。私はその向かいに座り、桃を真っ直ぐ見つめる。

「……で、大事な話って、なんですか」

桃が不安そうに眉を下げて訊ねてくる。体を縮こまらせて、まるで怯える子犬のよう

だ。

私は一呼吸おいて、桃に正直に伝えた。

「今のこの関係が、面倒くさいのよ。正直言つてね」

桃は私の言葉に俯いてしまった。顔が隠れてしまい、その表情を読み取ることはできない。私は続ける。

「恋人が居たことはあつても、こんなに高頻度で会うようなことはなかったの。ましてやこんな、半同居みたいな関係。私が帰つてこないと貴女は外で待つてなきやならないし」

「……」

「貴女もいい加減面倒くさいでしょう。だから……」

その時、がたつと音を立てて桃が立ち上がった。私に向けられたその目には涙が浮かんでいた。……何故だろう。

桃は震える唇をなんとか動かして、声を振り絞った。

「め、迷惑かけたなら謝ります。でも、私は、苺さんと……!」

最後はどもつてしまつてよく聞こえなかったが、なんだか大きな誤解を生んでいる気がする。

ぼろぼろと涙を零す桃に、私は慌てた。結論をはつきり言わないままだったから、桃

が勘違いをしてしまったようだ。

私は呻きながら頭を掻くと、ポケットから小さな金属を取り出して桃の目の前に突き付ける。桃は涙を止め、呆然とその金属を眺めた。

「これって……鍵？」

私は何だか恥ずかしくなり、そっぽを向いて、桃に伝えた。

「面倒くさいだろうから、もうここに住みなさい」

上京して数か月の一人暮らしで、私の家に入り浸っているような彼女のことだ。どうせ自分の家にはほとんど物がないだろう。だから、こっちに移るとしても作業は大したことないはずだ。

だから、私は合鍵を桃に渡したのだ。

泣き止んだと思った桃は、合鍵を受け取るとまた涙を零し、だけど笑顔を浮かべて私を見つめると、

「前置きが不穏なんですよ、苺さん……」

「……悪かったわよ」

泣き止んだ桃と食事をして、お風呂を済ませ、ベッドに横になる。

ふふと笑い声がして、私の隣の桃に目を向ける。

「どうしたの桃」

「いえ、これから母さんと同棲だと思っただら嬉しくて」

「同棲じゃなくて同居ね。ど、う、きよ」

「もう、素直じゃないですね」

「自惚れないの、まったく」

そう言って、目を瞑った。頭の中に、いつも通り浮かぶ鈴木さんの笑顔。

そして、桃の笑顔も浮かび上がった。

君の今の心情を答えよ

珍しいこともあるものだ。

私は小説を開いたまま、ちらと私の腹部付近に目を向ける。そこには、ソファに横になつて私の腹部にしがみついているミカンの姿が。私も小説を読んでいるので、特に会話もないまま、この状態が二十分ほど続いている。

いくら素直じゃないとはいえ、構つてほしいときは何かしら声をかけてくるのがミカんだ。こんな風に会話もなくくつついてくるのは初めてだ。

一体どうしたのだろう……私は小説を読みつつ、ミカンのこの行動に関して考えてみる。

◆
一つ目、ただ甘えたいだけ。

稀に私に自ら甘えてくるミカンだけど、それが恥ずかしくて黙つて抱き着いているのではないか。十分にあり得る。照れ屋なミカンのことだ。何か口にしたら、私に

「なあに甘えたいのー？ 可愛いなあああー！」

と可愛がられるだろうと思つて押し黙っている可能性がある。

先ほどから時折頭をぐりぐりと脇腹に押し付けてくるのも、甘えてる行動だとしたら、納得がいく。

二つ目、体調が悪い。

いや、これは無いと思う。ミカンは自分の体調不良はすぐに察知するし、自覚症状がないというのは前例がないので可能性は低い。それに今のところぐったりした様子はなく、尻尾も元気に動いているので体調不良ではないだろう。

三つ目、夜のお誘い。

あり得る。ミカンは普段はイケメンオーラをまき散らしているくせに、夜になるとネコになる。そしてさらに、夜のお誘いのうち過半数はミカンからである。そんなザ・誘い受けのミカンの事だ、夜のお誘いの可能性も大いにある。最近頻度も減ってきていたし、そういう気分なのかもしれない。

しかもミカンは不器用なので誘い方が下手でもある。ちよつかいを出して私の気を惹こうとすることも多々あったので、その一種かもしれない。

四つ目、嫉妬している。

でもこれに関しては今のところ心当たりがない。最近是新田先輩の話題も口にしていないし、新田先輩以外でミカンが嫉妬することはあまりない。

いや、人間以外にも嫉妬することがあるか。前酷かったのは猫カフェの猫、あと餃子

だ。餃子に嫉妬って逆にすごいと思う。どんだけ私のこと好きなんだろうこの同居人。
 だけどそれでも心当たりはない。だから、嫉妬ではないだろう。

◆ さて、この中で有力なのは一か三、甘えてるのか、夜のお誘いかだ。折角だから、ミカンの心情をびしりと言い当ててどや顔を決めたい。

私は小説を閉じ、相変わらず私のお腹に頭を押し付けてくるミカンの髪を優しくなでる。すると、ミカンの尻尾と耳、それに身体がぴくりと反応を示した。

持ち上げた顔は少し赤く、私はそれを見て、答えを心に決めた。ミカンの頭を撫でながら、してやったり顔で私は言った。

「ミカン、えっちしたいんでしょ」

しばしの沈黙。ミカンの表情を一言で表すと、「何を言ってるんだ？」である。

……そっか。夜のお誘いじゃ、なかったか。やばい、とんでもなく恥ずかしい。私が後悔の念にうなされていると、ミカンが申し訳なきように説明した。

「えっと、林檎からいつもと違ういい香りがして……それが気に入って……くつついてたんだが……」

「そ、そうだったんだ……。これ新しいボディクリームなんだよ。新田先輩に貰った——あつ」

口を滑らせたことに気が付いた時には、もう遅かった。瞬く間にミカンの顔は不機嫌そうになり、そっぽを向いてしまった。私の推理はどれも外れだったが、今だったら確実に分かる。

答えは、四つ目の嫉妬一択だ。

その後、拗ねたミカンの機嫌を直すためにベッドの上でいっぱい甘やかしてあげた。

君の知らない私の親友

「え、桃からだ！」

私は思わず大きな声を出し、それにミカンがびくりと肩を震わせてこちらを振り返る。本に集中していたミカンは余程驚いたようで、恨めしそうに私を睨んできたので、すぐに謝った。

「まったく、いきなり大声を出すんじゃない」

「ごめんごめん。中高の頃の親友から久しぶりに連絡来てさ」

私のその言葉に、ミカンは首を傾げた。

「……林檎に親友なんて居たか？」

「居たよ！ 失礼な！」



ソファへやってきて私の隣に腰を下ろしたミカンが、申し訳なさそうな笑顔を浮かべながら、膨らんだ私の頬を突いてくる。

「悪かったって。そう拗ねるなよ」

「十数年一緒に暮らしてるのに、なんで知らないの！」

「いやだって……」

私の言葉にミカンは眉をひそめる。

「林檎実家に友達とか連れてきたこと無いだろ」

「……」

「放課後とか休みの日も、誰かと出掛けることほとんど無かったし」

私は学生時代の記憶を掘り起こし、それが事実であることを認識して、顔を背けた。首筋にミカンの冷たい視線が刺さっているのが分かる。やめて、そんな目で見ないで。

「檸檬れもんも、お前にちゃんと友達が居るのか心配してたんだぞ」

檸檬れもんというのは私のお母さんの事だ。お母さんにもそんな風に思われていただなんて。

決して友達が居なかった訳ではない。これには理由があるのだ。友達に誘われても断り、不要不急の用事が無ければ一直線に帰宅していた理由が。

「だって、家で一秒でも長くミカンと一緒に居たかったんだもん!!」

そう言い切った私に、ミカンは何故か言葉をかけてこなかった。不思議に思っ
てミカ
ンに目をやると――

「……うわあ」

茹だくみみたいに顔を真っ赤にして硬直しているミカンが、そこに居た。



漸く赤面が収まったミカンが、再び不思議そうに首を傾げる。

「友達なら分かるが、家で遊んだこともないのに、親友なのか？」

「どうやらミカンは、私が桃の事を“友達”ではなく“親友”と称したことに引っかけを感じているようだ。休日も一緒に遊ばず、家に呼んだことも相手の家に行ったことのない友達を、果たして親友と呼ぶのかと。」

しかし私はかぶりを振って、それをはっきり否定した。

「違うよミカン。親友の基準は人それぞれ違うから、これをしたならもう親友とか、あれをしてないから親友じゃないっていうのは、明確には無いんだよ」

「そんなもんなのか」

「そんなもんなんだよ」

まだ腑に落ちてはなさそうだけれど、ミカンは一応納得したようだった。私はスマホの画面に表示された桃とのやり取りを眺める。自然と顔が綻ほころんだ。

学校ではいつも一緒に行動し、一緒にご飯を食べ、下らない話で盛り上がったリ、私のミカン自慢を延々聞いてくれたり。

そんな他愛もない日々の積み重ねは、私にとって大切に、大好きな思い出だ。だから、間違いないのだ。

「桃は、私の親友で間違いないんだよ」

私のその言葉に、ミカンは少しつまらなげに唇を尖らせた。

「なあにミカン」

「別に……。林檎は随分そいつの事が好きみたいだな」

そいつって……。まさか桃にまで嫉妬をしているのか。嫉妬しやすい原因は理解しているけど、それにしても嫉妬の対象が広すぎやしないか。

私は呆れながらも、その愛おしい拗ねた同居人ペットの頭を撫でる。

「毎日一緒に暮らしてて、家族で、同居人で、ペットで、親友で、恋人で、私がこの世で一番愛してるのに、まだ心配なの？」

「……心配だから、証拠に毎日キスしろ」

「ほんと毎日してるじゃん」

「……たまに、しない日があるじゃないか」

「はいはい、毎日キスしようね」

そう言つて、抱き着いてくるミカンを受け止めて頭を撫で繰り返す。

今日も今日とて、この同居人ペットは私のことが大好きだ。

君の知らない私の想い

私はスマホの電源を切りポケットに仕舞って、ソファに仰向けに寝転がった。と同時に、深い溜息が体の奥から零れ出る。自分で思っていた以上に、私は緊張していたらしい。

勇気が出なくてずっとできずにいた、数年ぶりの林檎への連絡。それがつい先ほど完了したのだ。

高校を卒業してから一度もやり取りをしていなかったために、変な反応されたりだとか、林檎がすっかり変わっていたらどうしようという不安があつて今まで連絡できずにいたが、それは全くの杞憂だった。

林檎は突然の私からの連絡に、昔と変わらないノリで返信して、会いたいという私の提案を快諾してくれた。文末によく使う顔文字も高校生の頃から変わっていなかった。やっと、お礼が言える。

ずっとずっと、林檎にお礼が言いたかった。親の反対を押し切つてひたむきに夢を追いかけて、酷評を受けても挫けずに何度も何度も賞に応募して、やっとの思いで大賞を受賞してデビューすることができた。

それは、周りに否定された私の夢をまつすぐに応援してくれた林檎が居たからだ。林檎があの時私の夢を応援すると言ってくれたから、今の私がいる。

そんな林檎に、私は初恋をしたのだ。

(あの頃は、林檎の気を惹こうと必死だったなあ……)

学生時代の自分を思い出して、私は少し恥ずかしくなった。懸命に林檎にアピールするも虚しく、私の想いは林檎に伝わらないまま高校を卒業してしまった。

林檎と私が同性ということもあって、告白はできなかった。別に私はレズではないのだが、それでも同性に恋をしたのは事実だ。そして今も――。

まあどちらにせよ、告白したところで受け入れてはもらえなかっただろう。彼女の頭の中は常に、飼い犬のミカンちゃんदैいっぱいなから。

そんな学生時代の記憶を思い出しながら、私は首を持ち上げて部屋を見回した。私の私物が増えた、苺さんの家。いや、私たちの家だ。

新田苺さん。道に迷っていた私を案内してくれて、酔った私を自宅で介抱してくれて、何度も押しかける私を文句言いなながらも受け入れてくれた、お人好しな人。

苺さんに手を差し伸べられたあの時から、この人と仲良くなりたいたと強く思っていた。だから何度も遊びに行つて、一緒にご飯を食べて、苺さんと少しでも距離を縮めようとしたのだ。

(どうも私は、自分を支えてくれる人に弱いな……)

ソファの傍らの猫のぬいぐるみを引き寄せ、抱きしめる。ぬいぐるみは苺さんの匂いがして、胸が温かくなって、幸せが溢れた。

苺さんは、私のこの想いを知ったらどんな反応をするだろうか。

この想いはいつか、必ず苺さんに伝える。学生時代と同じ不安はあるが、伝えないまま終わる後悔はもうしたくない。ただの女友達では、ただの同居人では、私は満足できない。

私はいつか、苺さんと――

不意にチャイムが鳴った。そういえば、もうすぐ苺さんが仕事から帰ってくる時間だ。

(鍵持っていくの忘れたのかな……)

そんなことを思いながら、玄関扉を開ける。

「おかえりな――」

さい、は口から出ずに引つ込み、私の体に戻ってきた。扉を開けた先に立っていたのは苺さんではなく、長い金髪を後ろでお洒落に束ねた、背の高い女性だった。彼女から発せられているオーラを一言で表せば、ギャル。宅配便などではなさそうだった。

その女性は何故か驚いたように私をじろじろと眺め、数秒の沈黙のあと突然合点が

いったように手をポンと叩いて口を開いた。

「あんたもしかして、莓の今の彼女?」

私は耳を疑った。呆けている私を他所に、彼女は金髪を指先で弄りながら名乗った。

「アタシは三枝柚子。 莓の元カノだよ」

君の知らない私の秘密

「アタシは三枝柚子^{さえぐさゆず}。母の元カノだよ」



桃からの連絡を見て、私は帰路を全力疾走した。日頃運動なんてあまりしないから息がすぐに切れちゃうけど、それでも自宅へとひたすらに走った。

柚子が突然やってきたことには勿論驚いたが、それよりも桃からの連絡を見た瞬間、私は冷や汗が一気に噴き出した。

『母さんの元カノだとおっしゃってる、三枝さんがいらっしやってます』

いつかは話さないといけないと分かっていた。だけど、それで桃に嫌われてたらと思うと不安で、先延ばしにしまっていたのだ。

桃は学生時代からの想い人が居る、ごく普通の女の子なのだ。私の今までの彼女のように、お互いレズ同士なわけではない。

だから、レズビアンだと告白するのが、怖かったのだ。

しかし私がレズビアンであるという事実は、私が伝えるより先に、最悪な形で桃に知られてしまった。

胸の中が不安でいっぱいになる。私は菌を食いしばって、走る足に力を込めた。

◆ 乱暴に鍵を差し込んで玄関扉を開け、リビングに駆け込む。そこには桃と柚子が食卓に向かい合って座っていた。桃が「おかえりなさい」と立ち上がり、私の上着と鞆を預かって、

「私は部屋に行ってるので、気にせずお二人で話してください」

とあからさまに元気がない作り笑いを浮かべて、寝室へと姿を消した。

荒くなった息をなんとか整え、私は柚子を睨み付ける。相も変わらず派手な髪色で、大学の頃からなんら変わらない、私の元カノ。

「……何しに来たの、柚子」

「こっわ。そんなに威嚇すんなよ」

柚子はわざとらしく肩をすくめると、床に置いてあった紙袋を持ち上げて私に差し出した。中身を確認すると、見覚えのある本が数冊入っていた。

「大学の頃に借りてた参考書とか資料。借りてたのずっと忘れててさ」

「……てつきり無くしたものだと思ってたわ」

「いや無くしてたんだよ。押入れ掃除してたら見つけてさあ」

「……」

悪びれる様子もなくそう言った柚子をもう一度睨み付け、私は深く溜息を吐いた。せめて連絡の一つでも寄越せと言いたかったが、柚子は昔からそういう人間だった。相手の事情なんて二の次で、自分の都合中心で行動するタイプなのだ。

「用が済んだならさっさと帰って」

そう言つて追い返そうとするも、柚子は何故か再び椅子に腰を下ろし、桃が淹れたであろうお茶を飲んでから口を開いた。

「あの子、今の彼女？」

唐突な発言に、私はすぐに返事が出来なかった。あの子というのは、間違いなく桃のことだ。

「違う、桃は私の友達よ。ただの同居人」

そう答えると柚子は「あつそ」と寝室の方を一瞥して、すぐに私に視線を戻した。その視線は私を咎めるようなもので、思わずたじろいでしまう。柚子はそんな私に

「お前、あの子に自分の事話してないだろ」

と責めるような口調で言った。それは凶星で、私は思わず押し黙ってしまった。

そんな私を見た柚子は確信を得たように、呆れた顔で溜息を吐いて言葉をつづけた。

「自分がレズだつてこと隠して女の子を同居に誘うとか、男が女を唆^そして連れ込むのと変わんないじゃん。それに、あの子、傷ついてたぞ」

その言葉に、私は反射的に寝室の方に目を向けた。桃の先ほどの作り笑いが脳裏に浮かび、ずきりと胸が痛んだ。

自分を同居に誘った女がレズビアンでした、だなんて、桃からしたらショックで当たり前だ。それが分かっていたのに、私は桃は居心地のいい友達だから、という勝手な建前で言わなかった。逃げていた。

柚子に向かって、自分の都合中心で行動するタイプなんて、言えないじゃあないか。本当に自分勝手なのは、私の方だった。

君の知らない私の変化

見送りという名目で、私たちは桃に声の届かない玄関先に出た。

少し強い風が吹いて、私は身をすくめた。走って汗をかいてるし、上着を部屋に置いてきたから肌寒い。

柚子は壁に背を預けてしゃがみ込み、鞆から取り出した煙草を啜えて火をつけた。そして煙草を口から離して煙を吐くと、私を真つすぐに見て言った。

「恋愛対象でなくてもあの子が大切なら、ちゃんと自分のことを話せ。ビビッて隠すな」
「……」

柚子に説教されている屈辱と、何も言い返すことが出来ない悔しさに、私は押し黙ることしかできない。柚子は呆れたようにふうと煙と溜息を吐きだし、次には不敵な笑みを浮かべていた。私はその笑みの意味が分からず、訝しんで思わず一步後ずさつてしま

う。
そんな私を見て短く声を漏らして笑った柚子は、煙草の灰を携帯灰皿に落としながら、その不敵な笑みをもう一度私に向けた。

「私はな、正直お前がそうやって悩んでることが嬉しくて仕方がない」

「……それは、どういう嬉しきなのよ」

その質問に、柚子は唾えていた煙草を下ろしてにやりと広角を上げた。

「勿論、ざまあねえなって嬉しきだ」



柚子とは関わりこそなかったが、高校からの同級生だった。

その頃からすでに金髪で、生徒指導の教師にしょっちゅう追い掛け回されていた。かたや私は校則を破ったりなどせず、全うな生徒として過ごしていた。だからこそ、二人の間に接点はなかった。

「だけど、お前のことは知ってた。有名だったからな」

柚子はそう言って、私をじつと見た。その目を直視できず、私は目をそらした。

「まあそりゃ共学の高校で女と付き合って、それを周りに隠してなければ噂にもなるわな」

一際多い煙を吐き出して、柚子は笑う。

柚子の言う通り、高校二年生のときに初めてできた恋人は女子だった。当時は特に恋愛対象が女性だなんて自覚はなく、一番仲の良かった友人ともっと一緒に居たいと想った結果、なら付き合ってみようという話になったのだ。

隠すことでもないと思って、女子同士でオープンに付き合っていた私たちは瞬く間に

校内の噂になった。

「噂で聞いたんだよ。先にお前がその相手にグイグイ迫って、だけど付き合うのを提案したのは、相手の方だったらしいな」

「……まあ、そうね」

「だよな」

柚子はそう言うてから、私に煙草を向けた。すっかり辺りを包んだ夜に、煙草の火が赤く目立って見えた。

「私の時も、お前はそうだったな」

その言葉に、私は思わず押し黙る。

「その気にさせるだけさせといて、お前は絶対に私に告白しようとして来なかったよな。そのくせ、痺れを切らして私から告白したら、してやったりみたいな顔しやがって」

私を鋭い視線で睨みつけた柚子は、小さく溜息を吐いて視線を地面に落とした。

「同性愛者じゃなかった私を、こんな風にしたのはお前なのにな」

その言い方で、私ははっと息をのんだ。柚子にどう声をかければいいか分からず、俯いてしまう。

知らなかった。柚子が今も、そうであることを。

「だからアタシは、そんなお前があの子のことで色々葛藤してんのが、嬉しい。いい気味

だ」

「……」

そう言うのと、柚子は煙草を吸いながらスマホに視線を落とした。

——しばらく沈黙が続いたあと、柚子は疲れたように溜息を吐いてタバコの火を消すと、よいしょと立ち上がった。

「そろそろ帰るわ」

「……そう」

「桃ちゃん、だっけ。ちゃんと話してやれよ」

「……分かってる」

柚子はスマホで誰かと連絡を取っているようで、スマホに視線を注いだまま立ち去ろうとした。私は少し気になって、その背中に声をかけた。

「今連絡取ってるの、恋人？」

「……そうだよ」

そう答えてこちらを振り返った柚子は、悪戯な笑みを浮かべながらスマホ画面を私に向けてきた。

「同じ経験を持つてる、とびきり気の合う女だよ」

まばゆい光を放つその画面には、懐かしい名前が表示されていた。

君の知らない私の罪悪感

私は、苺さんを責めることが出来ない。

◆ 「ちっ、あいつ……言ってねえのか」

苺さんの帰宅を待つてる間、柚子さんはそんな呟きを漏らした後、小さく舌打ちをしていた。それだけで、なんとなく察しはついていた。

恐らくこの人は、見た目に反して良い人だ。

私は出会いがしらの柚子さんの言葉で、苺さんがレズビアン——私のようにレズビアンではないけれど、好きになったのが女性だったのかもしれないが——だという事を知った。

そして彼女は、私を家に置いている苺さんが、自身がレズビアンであることを私に教えていないことに対して、腹を立てている。

だけれど、私は苺さんを責めることが出来ない。

私だって、そうなのだから。

高校時代に好きな人が居たとは言ったが、それが女の子だったとは言っていない。そ

して私は今、苺さんに好意を寄せている。

それを黙って、同じ家で暮らして居る。

私も同罪なのだ。その事実には、胸がぎゅつと締め付けられた。

気まずい沈黙が長らく続いて、玄関の鍵を開ける音が聞こえて、私たちはそちらの方へと視線を向けた。

髪は乱れ、息を切らした苺さんがリビングに入ってくる。そして苺さんと目が合う。その不安を帯びた視線に、私は強い罪悪感に襲われた。

私はとっさに席を立ち、苺さんの上着と鞆を預かり、

「私は部屋に行ってるので、気にせずお二人で話してください」

と言つて、寝室へと逃げた。

私に自身の事を伝えていなかったことを悔いて、焦つて、不安になっている苺さんに合わせる顔がなかった。私だって同罪なのに、彼女が私に罪の意識を抱いているのが辛い。

(……私も、ちゃんと打ち明けなきゃ)

告白までとは行かないが、私の学生時代の想い人も女の子であることを、きちんと伝えよう。



柚子さんを見送りに外へ出ていた苺さんが帰ってきて、私たちは自然と食卓に向き合って座った。

お互いに視線は自然と下を向き、沈黙が流れる。

言わなきゃいけない。私は、苺さんに罪の意識を持たせてはいけない。意を決して、顔を上げた。

「苺さんっ、実は」

「桃、ごめんなさい！」

私と同時に、苺さんも言葉を発していた。それに驚いたように、苺さんはきよとんとしている。

そんな苺さんに、私は深々と頭を下げた。

「苺さん、大体の事は察しています。だけど、私は苺さんを責めることは出来ません」

顔を上げ、状況をまだ飲み込めていない苺さんに、私は打ち明けた。

「私が以前話した、私の大切な恩人―初恋の人も……女の子なんです」

その言葉に、苺さんの表情に更に驚きの感情が広がっていく。

「だから、私も同罪なんです。私も、同性に好意を抱く人間だという事を、打ち明けていませんでしたから」

私は静かに深呼吸をして、苺さんに笑みを向ける。

「ですから、気に病まないで、これからもよろしくしてほしいです」

母さんは数秒の間、呆気に取られたような、何かを考えているような、そんな表情をしてから、私に優しく微笑んでくれた。

「……分かった。じゃあお互いさま、ってことで。これからもよろしくね、桃」



桃との話し合いが終わり、いつものように二人で夕ご飯を食べる。

ふと桃が思い出したように口を開き、ぽあと顔を明るくさせた。

「そういえば、例の子にやつと連絡できたんですよ！ 今度久しぶりに会うんです！」

「例の……ああ、恩人の子ね」

……そうか、とうとう連絡を取ったのか。桃がずっと気にかけていた恩人―初恋の子。

初恋の子と再び関係が戻ったら、桃は……。

桃は、ここを出るかもしれない。

鈴木さんに想いを寄せながらも、桃と一緒に暮らして居たいだなんて、私はなんて欲張りなのだろう。

そう思いながらも、桃が私の傍に居なくなることが、とてつもなく寂しく思えた。

しかし、彼女を止める権利など私にはないのだ。私はこの思いを心のうちに留め、桃

に笑顔を向ける。

「良かったわね。貴女に会った時からずっと気にしていたし」

「えへへ、ありがとうございます。もう、嬉しすぎてやばいです!」

興奮したように、桃の声のトーンが上がる。

「そうだ、聞いてくださいよ。その子、高校の頃ずーっとペットのワンちゃんの事で頭がいっぱいだったんですよ」

「へえ、よっぽどペットの事が好きなのね」

「もう学年中で有名でしたよ。口を開けば”ミカン”、”ミカン” っていうさくて——」
「ミカン……? どこかで聞いたことがあるような気がする名前だ。気のせいだろうか。」

「ミカンというのはその子のペットの名前だろう。そこで私はふと気が付いた。」

「そういうえば、桃のその恩人の子はなんていう名前なの? 気になるわ」

「あれ、言ってませんでしたっけ。名前はですね——」

次の瞬間。桃の口から発せられたその名前に、私は思わず手にしていた箸を落とし
た。

「鈴木林檎、っていうんですよ!」

君の知らない私の想い人

「そういえば、桃のその恩人の子はなんていう名前なの？ 気になるわ」

「あれ、言ってますませんでしたっけ。名前はですね、鈴木林檎、っていうんですよー！」



箸を落として固まる私に、桃が心配したように声をかけてくる。

心臓の音が嫌というほどはつきり聞こえる。困惑のあまり、声が思うように出ない。

「ど、どうかしましたか？」

どうしたもこうしたも……今、桃は自分の恩人の名前を「鈴木林檎」と言った。聞き間違えではないだろう。

鈴木林檎。それは毎日のように職場で呼んだ名字であり、いつか呼べたらいいなど、常日頃から思っていた名前だ。

いやいや、同姓同名なんていくらでもいるじゃないか。何を焦っているんだ私は。

激しくなった鼓動を抑えようと、深呼吸を何度か繰り返してなんとか落ち着きを取り戻す。

不安そうな顔で私を見つめている桃に、私は無理やり笑顔を作って向けた。

「ごめんなさい、ちよつと身近な人と同じ名前だったから、動揺しただけだから、心配しないで」

「そ、そうですか……」

大丈夫。鈴木も林檎も、よく聞く名前じゃないか。この程度の偶然なら起こってもおかしくはないだろう。

そう、自分に言い聞かせる。

不安そうな目でこちらを見ていた桃が、ふと思いついたように箸を止めて言った。

「その子の学生時代の写真もあるんですよ。見ますか？」

その提案に、私はしばし迷う。名前だけならば同姓同名の可能性もある。しかし、ここで写真を見て、それが本当に鈴木さんだったら――

しかしあろうことか、私が悩んでいる間に桃は、

「ほら、この子ですー」

と、そのスマホ画面に表示された写真を、私の目の前に差し出してきたのである。

視界に飛び込んできた、女子高生二人が肩を寄せ合っている自撮り。左側で屈託のない笑顔を浮かべているのは、どう見ても桃だった。今よりもだいぶ幼く見えるが、それでも一目で分かる。

そしてその隣――桃の右側に居る少女も、やはり一目で分かった。分かってしまった。

今よりも髪が少し長く、柔らかな笑みでこちらにピースサインをしている女の子。それは、どう見ても鈴木さんだった。

「……母さん？ どうしたんですか？」

その写真を見て思わず黙り込む私に、桃がまた不安そうな表情を浮かべる。

思考がぐちゃぐちゃに混ざり、私は混乱した頭を何とか整理しようと頭を抱えて俯いた。

私は一年以上鈴木さんに想いを寄せてきた。

しかし、桃と出会って、一緒に暮らし始めて……桃が恩人に会うと聞いて、不安になった。

桃が私の元を離れて、恩人―長年の想い人へと移ってしまうのが怖かった。

そして、その相手は鈴木さんだった。

整理はついたものの、心の乱れは収まらない。どう転んでも、今の関係が崩れてしまいう気がした。

鈴木さんを選んだら、桃との関係は当然終わる。

桃を選んだら、鈴木さんへの想いを閉じ込めなければいけない。

桃が鈴木さんへと移ったら、私はどうすることも出来ない。

白を切つて、誤魔化して、「何でもない」と笑えば、この現状は続くかもしれない。だ

けれど、

「……その鈴木林檎さんは、私の、会社の部下なの」

あんなことがあった直後に、桃に隠し事なんて出来るほど私は強くなかった。あの悲しそうな目を、もう見たくないのだ。

私の言葉に顔全体に驚きを浮かべて、私とは裏腹に、目を輝かせて、

「えー、すごい、そんな偶然ってあるんですね！」

とはしゃぐように、明るい笑顔を浮かべた。

私はそんな桃に、なんとか笑顔を返して、「そうね」と短く相槌を打つ。

どうすればいいか、分からない。私はどうしたいのか、何を選びたいのか。

桃に気づかれないように、そつと、溜息を吐いた。



鈴木さんに想いを寄せていたはずの私はいつの間にか、鈴木さんと桃のどちらかを選ぶことが出来なくなっていた。

君の知らない私の決意

「じゃ、行つてきまーすー」

「ああ、気を付けてな」

今日は林檎が学生時代の親友―春野桃と会う日だ。

笑顔で家を出る林檎を見送り、私はソファに腰を下ろして溜息を吐いた。窓から差し込む日差しが暖かさに、心を落ち着かされる。

正直、春野桃と会えることに不安がないと言えば嘘になる。

だって私は、人間ではないから。人間にはなれないから。

科学的な説明ができない現象で、私は狼女になった。そのおかげで林檎を支え、寄り添い、愛することができるようになった。

とはいえ私の耳は人間とは違って狼のそれだし、尻尾だって生えている。人間には、どうしたつてなれない。

その点において、私は春野桃に―あまつさえ、新田莓にも劣っている。

人間である林檎は、やはり人間と居るべきじゃないのだろうか―
なんて考えるのは、もう辞めにした。

種族がなんだ。

常識がなんだ。

林檎が小学生の頃から今に至るまで常に寄り添い、林檎の心も身体も隅々まで把握し、林檎をこの世で一番想っているのは、この私だ。

不安は消えない。だけど、その不安に負けない。

林檎は何度も言ってくれた。一番愛しているのは私だと。その言葉を、信じるのだ。

親友がなんだ。

上司がなんだ。

私は林檎に一番愛され、林檎を一番愛している。それは揺るがない。

不安がるのももうお終いだ。

林檎の想いを信用して、私が林檎に注いだ愛は報われると信じる。林檎は、私の家族で、友達で、同居人で、ペットで、恋人だ。

私は胸を張って一生林檎の傍に居続ける。

それが、私の決意だ。



いつものリビングが、ひどく静かに感じられた。

私はコーヒーを淹れると椅子に座り、壁にかかった時計を眺めた。時刻はもう午後六

時を過ぎている。

（確か桃が、帰りは遅くなると言っていたわね……）

そう、今我が家には桃が居ない。それがこの静寂の原因だった。

今日は桃が兼ねてから会いたいと思っていた、恩人であり初恋の人——鈴木林檎さんと会う日だ。

先日、私が同性愛者なのがバレ、桃が女性も恋愛対象に入ることを知り、桃の想いが鈴木さんであることが発覚した。

その時に鈴木さんが私の部下であることも話したがために、今日一緒に行かないかと誘われた。

勿論行くわけがなく、断ったのだが……。

私はマグカップを置き、自分を問い正した。

私はどうしたいのだ。桃を手放したくない。鈴木さんも諦めたくない。

二兎追うものは一兎も得ず……一兎なら確実に手に入るといふ訳ではないけれど。

鈴木さんへの想いは変わらない。けれど、桃への想いは自分が気づかないうちに、とても大きくなってしまった。

私の心を満たしてくれるもう一人の笑顔が、脳裏から離れない。

（私はいつから、こんなに桃のことを——）

いや、きつと放っておけないだけだ。ひよんなことから知り合って、なんだか気になつて構つてしまつて、そして傍に置いておきたくて——。

そこまで考えて、私はふふつと笑つてしまった。

なんだ、私はずつと前からとつくに、桃を手放したくないと思つていたんじゃないか。不意に、スマホの画面が点く。そしてメッセージが表示された。

『すみません突然の雨で帰りが遅くなりそうです』

『林檎の家が近いので、もしかしたら泊めてもらうことになるかもしれません』

そのメッセージを見て、返信を打ち、席を立つ。

上着を羽織り、傘を二本持つて靴を履く。

桃からのメッセージを見て、私はやつと分かった。

鈴木さんの家に泊まるのを、引き留めたい。

桃を、鈴木さんに取られたくない。

もう恐れない。私は覚悟を決め、玄関扉を開けて飛び出した。

私は、桃のことが——

◆

『林檎の家が近いので、もしかしたら泊めてもらうことになるかもしれません』

『メッセージ』

『え？』

『場所送って。迎えに行くから、待ってなさい』

君の知らない私の今

突然の豪雨で困っていたら、苺さんがわざわざ傘を持って迎えに来てくれるらしい。

レストランに避難していて、最悪林檎の家に泊めてもらおうと思っていたが、まさか迎えに来てくれるとは思わなかった。

その旨を伝えると、向かいの席に座っている林檎は目を丸くして驚いた。

「桃の同居人さん優しいんだね〜！ 私も迎えに来てもらおうかなあ」

「うん。林檎の家にも泊まってみたけど……、迎えが来るまでもうちよつと付き合ってもらってもいい？」

「全然いいよ〜」

そう言った林檎の笑顔は、学生時代からなんら変わりなかった。

林檎にはまだ、迎えに来てくれる同居人が苺さんであることは話していない。

苺さん曰く、林檎は苺さんの部下らしい。が、そのことを教えてくれた時、心なしか苺さんの顔が暗そうに見えたのだ。

二人の事をよく知っているから、仲が悪かったりするわけではないのだろうと想像できが、私の方から勝手に言うのもどうかと思い、林檎には黙っている。

どっちにしろこの後母さんが来るから、二人は会うことになるのだけれど。

「それにしても、今日はほんとにありがとうね」

「こちらこそだよ！ 久しぶりに桃に会えて私も嬉しかったし」

微笑みながらそう言う林檎に心が温かくなる。と、林檎がにやりと不敵な笑みに表情を変えた。

「それに、泣いてる桃も久しぶりに見れたしね」

咄嗟に反論できず、何度か言葉が詰まってから、私は林檎に抗議した。

「なんでそこ掘り下げるのさ！ 忘れてって言ったじゃん！」

「いやー桃が泣いてるの見るの、卒業式以来かなー」

「林檎!!」

ごめんごめん、と笑いながら謝る林檎を、私は睨みつける。

そう、林檎の言う通り、私は今日泣いてしまった。

それも、会って数分で。



待ち合わせ場所で林檎と合流した途端、林檎は私に抱き着いてきた。突然の出来事に私が困惑していると、林檎は満面の笑みで、小説家デビューの賛辞の言葉を送ってくれた。

「桃、本当におめでとう。夢、叶ったね」

その言葉に、思わず私は号泣してしまったのだ。

デビューできたのは林檎のおかげだと、きちんとお礼を言いたかったのに。

誰からも肯定されなかった夢を、唯一肯定してくれたのは林檎だった。

その林檎に漸く恩返しが出来た気がして、夢が叶ったという実感がより強くなって、零れる涙を止めることが出来なかった。

林檎は周りの目も気にせず、泣きじやくっている私を抱きしめたまま、背中をさすって落ち着かせてくれた。

変わらないその優しさに、胸が温かくなった。



「上京した時大変じゃなかった？ 私慣れるのにめっちゃ時間かかったよ」

「ああ、私も道に何回も迷っちゃって……その時に助けてくれた人と、今住んでるんだけど」

脳裏に母さんの顔を浮かべながら、そう答える。

「優しい人に会えて良かったね、桃」

「……うん」

母さんに出会えて、本当に良かった。同居に誘ってもらえて、本当に嬉しかった。

”同居 という単語で私はふと思ひ出し、林檎に訊ねる。

「林檎も今同居してるんだよね？」

「え、うん」

「ミカンちゃんは何？ 実家？」

「えつと、一緒に暮らしてるよ」

何故だか妙に林檎の歯切れが悪い。どうしたのだろう。

「ミカンちゃん元気？」

その間には林檎は打って変わって、満面の笑みで答えてくれた。

「うん。元気だよー！ この前も仕事から帰ったらすぐに出迎えてくれたし、平静を装ってるけどめっちゃ尻尾振ってて可愛くてさー！ それから——」

しまった、と後悔しても遅かった。

忘れたわけではないのに、油断していた。

林檎にミカンちゃんの話題を安易に振ると、延々とミカンちゃんについて語るのだ。

しかも観念して聞いていると、なんだかミカンちゃんがまるで恋人にでもなったかのような内容で、私は困惑してしまう。

ペットの犬相手にこれほど愛情を注ぐ人も珍しいなど、改めて思った。

それでも、ミカンちゃんの話をしている時が一番良い笑顔を浮かべるところは相変わ

らずで、私はその笑顔が大好きだった。

それから延々と林檎のミカンちゃん自慢を聞いていたら、不意にメッセージの通知が来た。

『もうすぐ着くわ』

スマホに視線を送った私に、林檎が訊ねる。

「あ、同居人さん迎えに来た？」

「うん、もうすぐ着くつて」

そっかーと微笑む林檎とは反対に、私は得も言われぬ緊張感の中に居た。

苺さんと林檎がどういう関係性なのか詳しく分からないが、不穏じゃないことを祈りたい。苺さんのあの暗い表情を思い出し、胸が痛くなる。

林檎がそんな私を見て、大丈夫？ と心配そうに顔を覗き込んで――

そして、店の扉が開く音がした。

店員さんに一言断って、こちらへ向かってくる女性が、一人。

林檎はその女性を見て、呆けたように口を開いたまま固まった。

私たちの席までやって来た女性――苺さんが、どこか余所余所しい笑顔を、林檎に向けた。

「こんばんは、鈴木さん」

「……新田、先輩？」

君の知らない私の同居人

「こんばんは、鈴木さん」

「……新田、先輩？」

状況が飲み込めない。

桃の同居人さんが来るのを待ってて……、同居人さんがもうすぐ着くと言って、新田先輩が――

新田先輩が、私と桃のところへやって来た。

私は戸惑いながら、桃へと視線を向ける。桃はなんだか気まずそうに肩をすくめて、私と新田先輩を交互に見つめていた。

「混乱させてごめんなさいね」

突然新田先輩に謝られ、「えっ、あつ」と間抜けな声を上げてしまう。プライベートで新田先輩に会うことさえ初めてなのに、今の状況が不思議すぎてまともな対応ができない。

私は一旦手元の飲み物をぐいと飲んで、ふうと一息ついた。

「えっと、桃の同居人さんが新田先輩……？ あつ、えっと桃、新田先輩は私の上司で――

「うん、知ってる」

慌てて説明しようとした私を、桃は静かな声で制した。知ってる？ 桃が、私の新田先輩の間柄を？

私が一層混乱していると、新田先輩が穏やかな口調で教えてくれた。

「えっとね、鈴木さん。まず、私と桃は同居しているわ。それで、つい先日、桃の恩人が鈴木さんだつてことを知ったのよ。その時に、鈴木さんは私の部下だと、桃に教えたの」その説明を聞いて、私は思わず桃に文句を言った。

「桃、酷いよ。それなら教えてくれればいいのに」

「だって、私が勝手に言うのも何か違う気がして……」

と、ぼつが悪そうに俯いた桃を、新田先輩は静かに見つめていた。

それにしても、まさか桃の同居人さんが新田先輩だとは……。世の中は思ったよりも狭いかもしれない。

新田先輩から傘を受け取った桃は、忘れ物がないかを確認してから席を立ちあがった。

「林檎はどうするの？」

「私も同居人に傘持ってきてもらおうよ」

「そっか。今日は本当にありがとうね」

そう言って嬉しそうに笑う桃。その隣に立つ母さんが、お財布からお札を取り出してテーブルに置いた。

「これ、お代ね」

あまりにも当たり前のように置くので、反応が少し遅れてしまった。私は慌てて断る。

「いえいえ、新田先輩に払っていただくなんて……」

そんな私を、新田先輩はいつも会社で見せてくれる、あの優しい笑みを浮かべて制した。

「いいのよ。桃がお世話になったんだし。私からの気持ちよ」

「……はい、分かりました。ありがとうございます」

そう言われては無下にできない。私は有り難くそのお札を財布に仕舞った。

桃とまた何度か言葉を交わし、二人は店を後にした。

去り際、新田先輩は私を少しだけ見詰め、静かに

「ごめんなさい、鈴木さん。ありがとう」

と囁いて、桃のあとを追っていった。

なんの謝罪とお礼だったのか、私には分からない。

分からないけど、新田先輩の表情は何かを決意したような、穏やかな顔だった。

『ごめんミカン、傘持って迎えに来てくれない？』

『分かった。場所送れ』

『うん、ありがとう』

スマホを仕舞い、ふうと一息つく。

桃が上京してきて、もう誰かと同居していると聞いた時は少し驚いたけど――

「そっか、新田先輩とだったんだ」

それなら、安心できる。私もあの人にどれほど支えられたことか。

今度三人でお出かけとかしてみたい……いや、ミカンが嫉妬するか。

二人も大事な人だけど、私が一番大切なのはミカンだ。

ああ、早くミカンの顔が見たいな。

窓から雨が降り注ぐ店の外を眺める。

傘を並べて仲良さそうに歩く、二人の姿が見えた。

君しか知らない私の愛情（前編）

雨粒が傘を叩く。

母さんと肩を並べて駅へ向かっていると、帽子を深くを被った女性が前から歩いてきた。

すれ違いざまに視界に映った、揺れるグレーアツシユの雑なポニーテール。

その瞬間、私の中で妙な既視感が湧き出し、思わずその人を振り返ってしまった。学生の頃に、あの人をどこかで見たことがある。そんな、気がした。

揺れる、灰色の毛の、尻尾――

「？ 桃、どうしたの」

「……いえ、なんでもないです」

まさか、ね。



耳に届いた入店音に、私は視線を上げる。

「お待たせ、林檎」

そう言いながら、私の最愛の同居人が頭を撫でてくる。

「ううん、お迎えありがとう」

「春野桃はもう帰ったのか？」

「うん、新田先輩と一緒に帰ったよ」

「……なんでそこで新田苺が出てくるんだ？」

新田先輩の登場に困惑してるミカン。まあ、そうなるよね……。

これ以上居座るのも気が引けるので、私たちは一先ず店を出た。

「はい、林檎の傘」

手渡された傘を受け取り、少し悩んだ末、私はそれを広げないままミカンの腕に抱き着いた。

そんな私を戸惑ったように見つめるミカンの顔を見上げながら、私は微笑んだ。

「ミカンの傘に入れてよ。相合傘しよっ」

「……まったく、仕方ないな」

そミカンは呆れたような笑顔を浮かべて、傘をさした。

事のあらましを説明すると、ミカンは微妙な表情をして溜息を吐いた。

「なんか……世間で狭いんだな」

「ほんとだよ……」

身近な人物の意外な繋がりによって驚きを感じながら、私はちらとミカンの顔色を

窺った。

いつもは新田先輩の名前が出ると顔をしかめるのに、今日はなんだか、平気そうだな。私の視線に気が付いたのか、ミカンと目が合う。

「なんだ、じつと見つめて」

少し頬を赤くしながら訊ねてくるミカンに、私は素直に答えた。

「んーん、いつもは新田先輩の名前聞くと嫌そうにするのに、今日はしないからどうしたんだらうって」

その言葉に、ミカンは真剣な顔で私を見つめてきた。

不意にミカンが歩みを止める。腕に抱き着いていた私は、間抜けな声を出して体勢を崩してしまふ。

体勢を直した私を、ミカンはなおもじつと見つめてくる。

ミカンの言葉を待つて黙っていると、少ししてから、ミカンが空いている方の手で私の頬に触れてきた。

「私はな、もう決めたんだ」

ミカンと視線を絡めあい、私はミカンの腕に抱き着く力を強める。

「……なあ、林檎が一番好きなのは、誰だ？」

不意に問われ、戸惑いながらも私は即答する。

「そんなのミカンに決まってるじゃん」

「ああ、知ってる」

そう言つて、微笑むミカン。

その微笑みは、新田先輩と私のことを心配していた時のような弱い笑みではなく、自信に満ちた力強い笑みだった。

「上司だろうが、親友だろうが知ったこつちやない。林檎が私から離れたらどうしよう、なんて、もう不安がるのは辞めたんだ」

「ミカン……」

「林檎が一番好きなのは私で、私が一番大好きなのは、林檎だ」

身体を折つたミカンに、優しく口付けをされる。

ミカンの言葉と唇の余韻に暫く惚^{ほう}けるも、ここが道端であることを思い出して、私は慌てて辺りを見渡した。

幸い、周りに人はいないようだった。いたとしても、雨音でこちらの声は聞こえないだろうが。

「だからもう、いちいち新田母に張り合つたりしないよ。林檎が私を一番だと言つてくれる間は、な」

イタズラっぽく微笑むミカン。私は堪らず、最愛の同居人^{ベツト}に抱きついた。胸元に顔を

埋める。大好きな匂いが胸いっぱい広がる。

「何があっても、ずっとずっと、ミカンが私の一番好きな人だよ」

私は顔を上げ、こちらに向けられた優しい瞳を見つめ返し、

「ありがとう。私を心から信じてくれて」

背伸びをし、ミカンと唇を重ねた。

「これからもずっと一緒にいようね、ミカン」

「ああ、勿論だ。愛してるよ、林檎」

君しか知らない私の愛情（後編）

苺さんは優しい。

こうしてわざわざお迎えに来てくれたし、薄着で震えていた私に上着も貸してくれた。た。

出会った頃から助けて貰ってばかりだ……私はこの先、苺さんにきちんと恩を返せるのだろうか。

そんな事を思いながら信号待ちをしていると、雨音交じりに苺さんの声が聴こえた。

「……桃に、謝りたいことがあるの」

それは雨音にかき消されてしまいそうなくらい、か細い声だった。

初めて聞くそんな声と、こちらを見つめる思いつめたような視線に、私は思わず唾を飲み込む。

苺さんに謝られるようなことなんて、まるで思い当たらなかつた。以前感じた不安が、また頭をよぎる。

「えつと……前みたいに、追い出される心配はしなくても、大丈夫ですか……？」

恐る恐る訊ねると、苺さんは苦笑混じりに、大丈夫よ。とだけ言った。

◆ 「いらっしやいませ」

近場にあつたバーに入り、店の奥の方のカウンター席に並んで座る。私たち以外に客は居なかった。

カウンターの中央のバーテンダーさんは派手なピンク髪で、こちらを見て少し驚いたような表情をしたけれど、すぐに柔らかな笑みに戻った。

「取りあえず、何か頼みましょうか」

そう言つて、苺さんはバーテンダーさんのおすすめのカクテルを、私は死ぬほどお酒が弱いので、ノンアルのカクテルを頼んだ。もう、お酒で失敗はしたくない。

頼んだカクテルが渡されると、私と苺さんは小さく乾杯をして、一口だけカクテルを飲んだ。

店内のおしゃれなBGMだけが聴こえる。

私は苺さんが話し出すのを、カクテルを少しずつ飲みながら待った。

数分は経つただろうか。不意に苺さんが口を開いた。

「私は、最低だわ……」

その言葉の意味が、意図が分からなかった。

苺さんが最低？

何を言っているのだろうこの人は。予想外の言葉に、私は間拔けな声を上げ、狼狽えてしまう。

「ちよつと待つてください。私、苺さんのことまったくそんな風に思つた事ありませんけど」

「いいえ、私は最低なことをしたの」

そう言つて、頑なに自分の言葉を貫こうとする苺さんに、私は首を傾げる。

苺さんはゆっくり深呼吸をすると、思い切つたように言葉を発した。

その言葉に、私は絶句してしまう。

「私はね、鈴木さんが入社した時から、彼女の事が好きだったの」

苺さんが、林檎の事を……？

突然の告白に混乱するが、話を遮るまいと、私は口をぎゅつと紡いだ。

苺さんはカクテルを見つめたまま、淡々と語つた。

「仕事はだめだめだけど真面目で、一所懸命で、可愛くて。そんな鈴木さんに好意を持つたの。彼女と仲良くなるために、色々根回ししたりもしたわ」

「……」

「でもね、貴女と出会つてから分からなくなつたのよ」

「何が、ですか？」

私のその間に、母さんはこちらを向いて、困ったような笑みを浮かべた。

「私が本当に好きな人が、誰なのかよ」

その言葉に、胸の中が熱くなるのが分かった。

私は落ち着きを求めるように、カクテルを口に含んだ。緊張で、味がよく分からなくなつた。

「貴女が私の所によく来るようになって、私もそれが心地よくて、貴女を手離したくないって、自分勝手に思ってた」

「母さん……」

「桃の好きな人が鈴木さんだって知った時、どうしてもこの関係が壊れる気がして、怖かったの……」

……あれ？ 母さん、なにか誤解していない？

「私は、貴女が居なくなるのが嫌で……鈴木さんの家に行かせたくなくて、迎えに来てしまったの……桃の好きな人を知ってた上で……本当に、ごめんなさい」

「ちよ、ちよつと待ってください。どうしてそうなるんですか？」

思わず母さんの話を止め、私はそう訊ねる。それに対し母さんは、少し困惑したように、こう言った。

「だって、桃は鈴木さんの事が好きなんじゃ」

……そういう事か。私はどうしようかと頭をかき、覚悟を決めた。

「母さん。私はあくまで林檎のことを『恩人』か『初恋の人』としか言つてませんよね？ 今好きな人は、別に居ます」

「え……？」

戸惑いの表情を見せる母さん。私はそんな母さんの手を握り、真っ直ぐに見つめた。

「母さん、貴女が私に手を差し伸べてくれたあの時から、貴女の事が好きでした。こんな私ですが、恋人になつて頂けませんか」

私の告白に、母さんは驚いたまま固まっている。

それでも私の口は止まらない。ずっと、ずっと伝えたかったのだ。

「母さんに出会えて、私は本当に救われました。困つてる私を助けてくれて、貴女の傍に居たくて何度も押しかける私を受け入れてくれて、同棲に誘つてくれて」

「……」

母さんはもう、「同棲」ではなく「同居」だ、と訂正しなかった。

「……なによ、それ」

母さんが小さく呟く。

「一人で悩んでた私が馬鹿みたいじゃない」

「母さんが勝手に誤解してたんですよ」

私がそう言うと、苺さんはその通りね。と笑った。

「苺さんは、私の事、好きですか？」

私は苺さんの手を握ったまま訊ねる。苺さんは一呼吸置いてから、私の目を真っ直ぐ見つめてきた。

そして、

「ええ、大好きよ」

目に涙を浮かべながら微笑んで、そう言ってくれた。



バーの扉が開くと、チリンと鈴の音が店内に響いた。

「いらっしやいませ——って、なんだ」

カウンターの中央のバーテンダーは来店した人物を確認すると、口調を崩して微笑んだ。

来店した女性は店内に人がいないことを確認すると、適当な席に腰を下ろして、バーテンダーに話しかける。

「なあ、さっきこの店から出てきたのって、苺だよな？」

「そうね。高校のときの面影もあつたし、連れの女の子も、苺さん”て呼んでたから」

ピンク色に染まったの髪先を弄りながら、バーテンダーは少し不貞腐れたように眩

く。

「それにしても、私にまったく気が付かないなんて……元カノとしてどうなのよ」

その愚痴に、女性―三枝柚子は苦笑を浮かべた。

「そりゃ、高校の時と比べてお前はだいぶ変わったんだから、仕方ねえだろ」

「ま、それもそうね」

そしてバーテンダーは、ああ。と思い出したように呟くと、カウンターから身を乗り出して柚子の額に口付けをした。

「おかえり、柚子」

「おう。ただいま、花梨^{かりん}」

君は誰にも渡さない

割引券を貰った。最近この辺りでできたスイーツビュッフェの、10%OFFクーポン。

先日、同期の男性社員が、「なあ鈴木。これ、もし良かったら……」と、私に差し出してきたのだ。私はそれを確認すると、大喜びで受け取った。

最近話題のスイーツビュッフェに私も行きたいとは思っていたが、中々機会がなかった。だから、この割引券を貰えたことでようやく行くきっかけができた、私は胸を躍らせながら同期にきちんとお礼を言った。

その直後、同期が肩を落としながら去っていったのだが、あれはなんだったのだろうか。

◆ 私には会社の近くの公園にある噴水の前で、ふうと溜息を吐いた。

今日は件のスイーツビュッフェに行く日だ。休日よりも平日の方が安いので、会社帰りにここでミカンと待ち合わせしてから店に行く予定だったのだが――

「ねえお姉さん、オトモダチ来るまでまだ時間あるんでしょ？」と、男A。

「俺たちとちよつとでいいからお茶しようぜ？」と男B。

最悪なことに、私はチャライ男二人組に絡まれていた。

前にもこんなことあつたあ……といつかの事を思い出しながら、私は何度目か分からない溜息を吐き、しつこく絡んでくる男二人組に、そっぽを向いて答える。

「ですから、もうすぐ友達も来ますし、お引き取りください」

そうはつきりと断るも、この二人が引く様子はない。どうしてこの手の輩はこうもしつこいのか。そもそも私よりも美人な人はそこら中にいるだろうに。

辺りはもうすっかり暗くなっていた。公園の前の大通りは通行人で賑わっているが、私を助けてくれそうな人はいない。そ知らぬふりをして通り過ぎていくだけだ。

私は男たちにうんざりしながら、ミカンにメッセージを送る。

『男の人にナンパされてる。助けて』

すぐに既読が付くが、返信はこない。そろそろ着く頃だと思っただけれど……。

私がスマホに視線を注いでいることに不満を抱いたのか、男Aの口調が少し強くなる。

「いいじゃねえかよ、行こうぜ。どうせならそのオトモダチも一緒にさあ」

そう言って、痺れを切らした男Aが私の腕を掴もうとした時だった。

「ぐえっ」

男Aがカエルを潰したような声を上げて、私から引きはがされた。私は男Aの後ろに目をやり、思わず頬を緩めた。

「大丈夫か、林檎」

「うん。ありがとミカン」

ミカンが男Aの襟首を引っ張って、私から離してくれたようだ。男Bは咳込んでいる。男Aに「大丈夫か」と声をかけている。

どうやら急いで駆けつけてくれたらしいミカンは、少し上がった息を整えながら私に寄ってくる。

そして後頭部に手を回され、額にキスをされた。突然の事に私は戸惑ってしまう。男たちも、驚いたようにこちらを見ている。

「怖い思いさせてごめん。もつと早く家を出ればよかった」

そう言って、私の頭を優しく撫でてくれた。

私が「大丈夫だよ」と微笑みを返すと、ミカンはくるりと男たちの方を振り返った。

男たちはミカンに邪魔をされて腹を立てているのか、こちらを睨んでいる。私は思わずミカンの背中に隠れようとするが、ミカンが私の腰に手を回して、ぎゅつと抱き寄せてきた。

「林檎は私のだよ。分かったらとつとと失せろ」

そして私を片手で抱いたまま、男たちを鋭く睨み付け、一蹴する。男たちは悔しそうに舌打ちをしてから、踵を返して帰っていった。

私がミカンに強く抱き着くと、ミカンも抱きしめ返してくれる。ひとしきりミカンの胸元に顔を埋めたあと、私は顔を上げて大好きな同居人ベツトに短く口付けをした。

ミカンは少し顔を赤らめるが、嬉しそうに微笑んだ。

「助けてくれてありがとうね」

「気にするな。林檎の可愛さを見くびってた私が悪い」

その謎の反省に首をかしげると、ミカンは悪戯っぽく笑って、私の鼻を指でつつく。

「林檎はこんなに可愛いんだから、一人にしたら男どもに声かけられるに決まってるもんな」

「もう、ミカンは私を過大評価し過ぎだよ」

「そんなことない。林檎は可愛いよ」

そんな風に私をべた褒めしながら、ミカンは柔らかな微笑みを浮かべる。

私達は手を繋ぎ、件のスイーツビュッフェの店へと歩き始めた。通行人で賑わう大通りを、仲良く肩を並べて進んでいく。

「厄介事もあつたけど、スイーツビュッフェ楽しみだね！」

「ああ、そうだな」

きらびやかな夜の街を、大好きなミカンと歩いていく。

◆ フルーツタルトを口に頬張ったその時、私はふと思い出した。

「そういえば、割引券くれた同期がその後なんか落ち込んでたんだけど、なんだったんだろ」

「林檎、そいつになんか言ったのか？」

「いやー何も。」ありがと、友達と行くね。」って、ちゃんとお礼も言ったしなあ」

「……ああ」

「？」

ミカンは何故か憐れむような目をしていたけれど、結局私は分からずじまいだった。

君の髪の毛に魅せられて

「林檎、風呂場に落ちた髪の毛ちゃんと取っとけよ」

ソファに座っていた私はテレビから視線を外し、声のした方へと向ける。そこには、首から下げたタオルで髪の毛を拭いているミカンが居た。

「ああ、ごめん気を付けるね。おかえり」

「ん。ただいま」

風呂から上がったばかりのミカンは、まだ髪の毛が乾いていないために結ばずに下ろしている。日中と違うその髪型は、毎日のように私の視線を奪った。

水気を含んで艶やかなグレーアッシュの髪の毛はそれだけで美しく、平凡な黒髪の私は時折、ミカンの髪の毛が無性に羨ましくなるのだ。

ミカンは私の横に腰を下ろすと、不思議そうな顔をして私に目を向ける。

「なんだ、人のことをそんな眺めて」

そう言いながら、私の頬を突いてくる。

私はミカンにされるがまま、素直に自分の想いを打ち明けた。

「んー、ミカンの髪の毛が羨ましいなーって思ってたの」

「……………髪の毛?」

ミカンは乾かし途中の自分の髪の毛をつまんで少し眺め、不可解そうな表情を浮かべた。

「……………分からん。別にただの髪の毛だろ」

「自分の髪だからだよー。グレーアツシユで格好良いし、程よい感じのくせつ毛で本当に羨ましい……………」

「そうか? 林檎の黒髪だって、充分すぎるくらい綺麗だよ」

そう言っつて私の頭を撫でたかと思えば、手で救った私の髪の毛に口付けをして微笑んだミカン。

思わず顔が熱くなり、咄嗟にそっぽを向いてしまう。そんな私を見て、ミカンは浮かべたような口調で私の髪を撫で始めた。

「照れた林檎は可愛いなあ」

最近どうも、ミカンのイケメン具合に磨きがかかっている気がする……………。この前ナンパから助けてくれた時も、優しくおでこにキスしてくれたし……………。

どうしよう……………ますます好きになりそう……………。

私がミカんに顔を向けられずにいると、突然ソファに押し倒されてしまう。戸惑う私をよそに、ミカンが私に四つん這いで覆いかぶさってくる。

まだ少ししつとりとしているミカンの髪の毛が重力に従って垂れ下がり、カーテンのように私の視界を隔てた。ミカンの顔と髪の毛以外、私の視界には何も無い。自分と同じシャンプーとは思えないくらいの良い香りが、鼻孔をくすぐった。鼓動がうるさい、ミカンにまで伝わってしまいそうだ。

別世界かのような不思議な感覚に惚けていると、ミカンの目尻が下がり、期待を帯びたような声を唇から私に注ぐ。

「私は林檎のモノだから、私の髪の毛も何もかも、林檎の好きにしていいたいんだよ」

まるで誘うようないや、確実に誘っている口調に、私はまんまと色欲を駆り立てられてしまった。

身体の奥底から溢れだす感情に身を委ね、愛しい髪の毛にそつと手を触れる。

「……このまま」

「うん？」

すべてを許してくれそうな微笑みで、ミカンが私を促した。もう、我慢なんてできるはずもなかった。

「このまま、シて。私の目に、ミカンだけを映したまま——」

「ああ。主人様の仰せのままに」

恭しくそう呟いたミカンの顔が、さらに近づく。

ミカンが隔てた私達だけの空間で、二人の夜が静かに幕を開けた。

君の知られざる特技

仕事から帰ると、桃が居るはずのリビングからは明かりが零れておらず、私は不思議に思いながら、靴を脱ぎつつ声をかける。

「桃〜？ ただいま〜」

しかしその声掛けに反応は無く、私はますます頭に疑問符を浮かべた。

普段だったら私が帰ってくる頃には小説の執筆を終え、リビングで夕飯当番の役割を果たしているか、ソファで寛いでいるはずだ。

それなのに電気も点いていないし、反応もない。もしかして、疲れて寝ているのだろうか。

そう思い、リビングの反対側の寝室を覗き込む。

(……寝てるわけでも、ないのね)

いつも使っているベッドに膨らみは見れないし、桃の作業机にも人影はない。

じゃあ、リビングで寝ているのだろうか。でも、わざわざ電気を消して……？

疑問は尽きないが、取りあえず上着をクローゼットに仕舞い、手洗い場でうがいと手洗いを済ませ、私は漸くリビングに足を踏み入れた。

その瞬間――

「莓さん、誕生日おめでとうございまーす!!」

電気が付くと同時に、クラツカーの破裂音と桃の浮かれた声が私へと降りかかった。

パーティー帽子を頭に乗せて満面の笑みを浮かべる桃と、足元に散らばったクラツカーの中身を交互に見比べ、私は暫くしてから、短い言葉を桃へ返した。

「私の誕生日、来月なのよね……」



テーブルに突っ伏していつまでも落ち込んでいる桃の頭を小突き、桃が作ってくれていた料理を皿に盛り付けて並べる。

「ほら、桃も手伝って。お祝いしてくれるんでしょ?」

「うう……だって誕生日来月なんですよね?　じゃあ何のお祝いか分からないじゃないですか……」

「それはほら……勤労感謝とか」

「私も一応稼いでるんですけど……まあそういう事にします。ケーキも買っちゃったし」

「あら、ケーキもあるのね」

さつき冷蔵庫の中にあつた白い箱はケーキだったのか。

料理を盛り付け終わり、向かい合って食卓に座り手を合わせる。

「はあ、頂きます」

「バースデーソングは歌ってくれないの？」

「もー！ 良いから食べますよ！」

少しからかい過ぎただろうか。拗ねたように頬を膨らませる桃を見て、自然と顔が緩んでしまう。

桃が腕によりをかけて作ってくれた料理はどれも美味しく、私たちはわいわいと談笑しながら、いつもより品数の多い夕食を楽しんだ。

……しまった。つついっい食べ過ぎたかもしれない。少し苦しくなったお腹を摩りながら、ふと思いつく。

「ケーキがあるの忘れてたわ……」

「お腹いっぱいですか？ 明日に回します？」

私の声音から察したのか、桃が気遣いでそう言ってくれた。私はしばし悩んだのち、首を横に振った。

「折角だから頂くわ。私のバースデーケーキだし」

「それはもう良いですから！」

声を大にして文句を言う桃の頭を撫で、冷蔵庫からケーキの入った箱を取り出す。

ケーキは二種類あった。

フルーツが盛りだくさんで上にサクランボが乗ったタルトと、シンプルなショートケーキだ。

私が二つを交互に見ていると、桃が向いから声をかけてくる。

「苺さんの好みが変わらなかつたので、取りあえずこの二つを買ってみました」

「それは分かるんだけど、なんでタルト？　こういう時つて大体チョコケーキとかじゃない？」

いや、タルトも好きだから全く問題はないんだけどね。と付け加えると、桃は少し照れたようにモジモジしながら、

「その……フルーツタルトに、”桃”が入ってたので」

「……ああ」

その言葉を聞いて、私は一拍置いて理解した。なるほど、”苺”のショートケーキと”桃”が入ったタルトを選んだわけか。

頬を赤らめている桃をしばし見つめ、私は迷うことなくフルーツタルトに手を伸ばした。

「じゃ、私は”桃”を頂くわね」

「……っ！　じゃあ、”苺”食べます」

二人分の紅茶を淹れてから再び向かい合って座り、各々ケーキにフォークを入れる。桃は何故か興奮したような目で私を見ながら、「苺」を真つ先に頬張った。元から先に食べる派なのか、私に見せつけているのか……それを判断することは出来ない。取りあえず私も最初に「桃」の部分を食べたら、桃は満足そうな顔を浮かべた。私のがのんびりとフルーツタルトを食べていると、ふと桃が手を止めてこちらを眺めているのに気が付いた。

どうしたのかと声をかけようとするも、桃の手元を見てすぐに察した。

「桃、食べるの早いわね」

「苺さんがゆっくりなんですよ〜」

そんな事言われても……。私は紅茶のお代わりを淹れようと席を立ち、ついでに――

「はいこれ、あげる」

タルトの上に乗っていたサクラランボを、桃の皿に置いてやる。

「えっ、いいんですか?」

「小さいけど、今日のお返しってことで」

キッチンへ行き、ティーポットにお湯を注いでいると、桃がリビングから話しかけてくる。

「そういえば、”舌でサクラランボのヘタを結べる人はキスが上手い”って本当なんです

かね」

「唐突ね……。まあ、舌先が器用なら上手いんじゃないかしら」

「適当に返事をしながら紅茶を持っていくと、桃にちよいちよいと手招きされた。

「んー!」

手に持っているスマホをこちらに見せてくるので、桃の隣へと寄って差し出されたスマホの画面を覗き込んだ。

と、次の瞬間、肩をぐいと引つ張られる。咄嗟の事で反応できずに私は前かがみになり、

「んんんっ!」

桃に唇を奪われた。私は驚きのあまり、抵抗さえしなかった。出来なかった。

いや、桃とはそういう関係になったわけだし、キスくらいそのうちするとは思っていた。が、なんとなく、それは私からだと言われたい。勝手に思い込んでいた。

そんな無抵抗な私に対し、桃は遠慮なく舌を入れてきた。私も漸く我に返って、そのキスにこちらからも応じる。

しかし、何だ。私もデープキスの経験くらいあるが、桃とのキスは、今までのキスの比じゃないくらい――

「……………んっ?」

ふと、絡められた桃の舌から何かが私の口内へと移される。

それと同時に、桃は私の唇から離れ、満足そうな、それでいて艶やかな笑顔で、私に問いかけた。

「……キス、上手かったですか？」

その言葉に私が何も返せないでいると、我に返ったのか、一気に顔を赤に染めて桃は立ち上がり、

「おおおおお風呂！ 貰いますね！」

と、慌ただしくリビングを出て行ってしまった。

一人取り残された私は暫くその場で突っ立っていたが、不意に力が抜けて、椅子にすくとんと腰を下ろした。

絡められた舌の感触を思い出して、私は深く溜息を吐き、熱くなってしまう顔を両手で覆った。

(もしかしたら、私が下になるかもしれない……)

そんな事を考えながら、桃から口移しされたものを指で摘み出す。それを見て、私は思わず苦笑しながら、小さく声を零すのだった。

「……上手かったわよ」

桃に口移しされたのは、器用に結ばれたサクラランボのヘタだった。

君の手のひらの温もり

ミカンの白い肌は、まだ少し熱を帯びていた。

「ん、林檎の手冷たいな。寒いかな？」

「ううん。大丈夫だよ」

私の手を包むように握り、ミカンが心配してくれる。手の甲に伝わるその微熱が心地よかった。

身をよじって、私の隣に寝転んでいるミカンの身体に密着する。

「んふふ。ミカンの身体あったかいね」

柔らかなその裸体にぎゅつと抱き着くと、ミカンは優しく両腕で抱きしめてくれた。そして少し恥ずかしそうに

「し、仕方ないだろう。今日も、その、激しかったし……」

顔を赤らめてそう言った。

そう、ミカンの言う通り、つい先ほどまで私たちはベッドの上で愛を育んでいた。

基本的にミカンが下で私が上。普段見せない顔で快感に悶えるミカンを見ていると、つついっ激しくしてしまう。結果的に、事後は私に比べてミカンの体温が高くなるの

だ。

しかし、あんな可愛い顔をされて、激しくするなという方が土台無理な話だ。そう言うとき、ミカンは更に顔を赤くして、それを見られまいと、私の顔を自身の胸元にぎゅつと押し当てた。

すぐに照れるミカンは、本当にかからかい甲斐があつて困る。

暫くされるがままになつていたが、流星に息苦しくなつてきて、私はミカンから無理やり身体を離れた。一瞬浮かべたその寂しそうな表情が、愛らしくて堪らない。

「もー、ミカンはなんでこんなに可愛いんだろ」

「うるさいな……林檎の方が可愛いだろう」

むすつと朱色の頬を膨らませ、私の顔に両手を伸ばしてくる。そして、その手のひらで私の頬を包み、こねくり回すように揉んできた。

「んむう〜」

「ふふつ、何だか林檎が小さい頃の事を思い出すな」
「え？」

懐かしそうに目を細めて微笑んだミカンだが、すぐにはピンと来なかつた。暫く頬をこねられながら思い出そうと唸っていると、はつと懐かしい光景が脳裏に浮かんだ。



あれは中学生の頃だった。

リビングで仰向けに寝転んで本を読んでいると、不意に私の身体に何かが乗つて来た。

本から視線を上げると、いつの間にかミカンが私の上に馬乗りになっていた。上機嫌に尻尾を左右に揺らしている。

「なあに〜ミカン」

葉を挟んでから本を脇に置いて、ミカンに両腕を伸ばして抱きしめようとする。が――

「ぶえ」

あろうことか、ミカンはその可愛らしい両前足で私の頬を踏みつけてきたのだ。私は予想外の出来事に、戸惑い硬直してしまった。そんな私の頬を、ミカンは夢中でこねるように踏み続けている。

暫くして漸く我に返り、ミカンの奇行を止めようとミカンの両前足を掴もうとしたが、思わずその手を止めた。何故かと問われれば、ミカンの瞳を見てしまったからだ。

その瞳は、ここ最近で一番の輝きを見せていた。あまりにも嬉しそうにしているものだから、とても止め辛くなってしまったのだ。

しばし頬をこねられながら悩んだ末、私は諦めることにした。今ミカンを止めたら、

確実に不貞腐れるだろうなど、これまでの経験からなんとなく分かったからだ。

結局、ミカンが満足するまでの数分間、私は無抵抗で頬をこねられ続けた。

それ以来ミカンはたまに、寝転がっている私の頬をこねるようになったのだ。



「そんなこともあつたねえ……」

私が一連の出来事を思い出して懐かしさに浸っていると、ミカンが幸せそうな笑顔を浮かべて私の頬をそつと撫でた。

「あの頃の林檎のほっぺたはすごくモチモチで柔らかくてなあ。好奇心でやってみたんだが、林檎の反応が可愛くて楽しくなってしまったんだよ」

そう話すミカンの目は、あの頃のように爛々と輝いていた。

昔から変わらないその嬉しそうな表情に、私は思わず笑ってしまった。「どうした？」と、きよとんとしているミカンに「なんでもないよ」と答え、ミカンの目を真つすぐ見つめる。

「ミカンは昔から変わらないね」

「？ 林檎も変わらないぞ。ほっぺたも変わらず柔らかいしな」

「もー、いつまで続けるのさあ」

ミカンが満足するまでは私の頬は解放されないだろう。だけれど、好きな人の手に包

まれているととても心が落ち着いて、幸せで満ち溢れる。
だから今日も、私は無抵抗でミカンに頬を委ねるのだった。

君と育みたい緑色

ミカンは意外と、突拍子もないことを言ったりすることが多い。

「林檎って私を育ててるとき、楽しかったか？」

ほら、こんな風に。

リビングで仕事の勉強をしていた私はその問いに一瞬手を止め、ミカンの顔をちらと見やっつてからまた参考書に目を落とした。無視されたと思ったのか、ミカンの口から可愛い「えっ」という小さい声が漏れる。無論無視しようだとかいう意図はなく、ただ勉強しながら会話しようとしただけだ。

「んー、楽しかったよ。育てるのが楽しいっていうか、ミカンと暮らして居ることが楽しかったよ。勿論今もね」

私が思ったままにそう答えると、ミカンは「そうか……」とだけ言って、窓の外に目をやっつて黙ってしまった。

一体どうしたのだろうか。また小説やニュースにでも影響されたのかもしれない。それでも、どうしてそんな質問をしたのだろうか……。

参考書の内容を目で追うが、もう頭には入ってこなかった。

そしてふと、ある仮説が思い浮かぶ。

まさかこれは、小学生頃によく見受けられる「お母さん、動物飼いたい！」現象なのでは？ ミカンは元は狼だが、人間の姿になってもう長い時間が経っている。生活も勿論人間に沿った様式になっているので、感性が人間に近づいたとしても何らおかしくはない。

が、しかし。ペットを飼うという行為を求められたら、私は苦しみながらもNOと言わざるを得ない。何故なら、このアパートはペット禁止だからだ。ミカンと引越してきた当初は一時期だけ飼うことを認められ、実家の家族に引き渡さなければならぬ日の直前に、ミカンが人型となり、今がある。

当時の一連の流れと事情をミカンが完璧に把握しているかどうかは分からないが、どのみちこのアパートでは飼えないのだ。

ならばペット可のところへ引越せばいいと言われるかもしれないが、引越すには身分証明書が必要なわけで……。当たり前だが、狼女のミカンには勿論身分証明書などない。

それ故、引越すなどをするのは最終手段にしたいのだ。

私が勝手にそう一人で考え込んでいると、不意にミカンが声をかけてきた。

「林檎」

「な、なに？」

「家庭菜園したい」

「……え？」

やっぱり、突拍子もないことを言うことが多い。

さて、うちのアパートにはベランダがある。今までは洗濯物を干したり、たまにミカンが煙草を吸いに出たりしてはいたが、用途はその程度だった。確かに家庭菜園をするスペースはあるし、ベランダの有効活用にもなる。

スマホの画面に映された家庭菜園の記事を私に見せて、爛々と目を輝かせるミカン。「プランターとか土とか買ってき、何かベランダで育てよう」

珍しくテンションの上がっているミカンは大層可愛かったが、私はぐつと堪えてミカンの顔の前に手をかざし、制止させる。

「取りあえず、私はお仕事の勉強をするので、また後で」

先程やや集中力が乱れたが、今私は勉強の真つ最中なのだ。今後の生活を安定させるためにも、仕事でのミスを減らしたい。

だから、この勉強が終わってから家庭菜園について話し合おうと思っていたのだが――

「……分かった」

潤んだ瞳を伏せ、尻尾と耳をへなへなと垂らして私に背を向けるミカン。その哀愁漂う背中に、私の心はバキリと勢いよく折れてしまった。

リビングから去ろうとするミカンの腕をつかみ、引き留める。

悲しげな眼でこちらを振り返ったミカンに、私は溜息交じりに言った。

「家庭菜園の計画、立てよっか」

その時のミカンの嬉しそうな顔と来たら。その愛くるしい顔が見れただけで、今日はもう良しとしよう。そう自分に言い聞かせ、私は参考書をそつと閉じた。

君と育んでく緑色

ホームセンターを訪れるのなんて、いつぶりだろうか。上京したての頃に何度かお世話になったくらいで、最近はめっきり利用しなくなつた。

「えっと、プランターと、鉢底石と……」

ミカンはメモを片手に意気揚々とホームセンターを突き進んでいく。こんなに楽しそうなミカンを見るのは本当に久しぶりだ。普段が楽しそうじゃないわけではないが、日頃クールな分、こうして楽しさを全面に出しているミカンは珍しい。そしてそんな珍しいミカンを見られることが、とても嬉しかったりする。

「重いのは後回しにして、先に種とか見に行くか」

「うん、そうしよっか」

ミカンの持っているメモには、先日ネットで調べた家庭菜園に必要な物の一覧が書かれている。ミカンが家庭菜園がしたいと言い出したのが昨日の土曜日、そして善は急げということ、今日早速買い物に来たという訳だ。

昨日話し合った結果、育てるのはプチトマトに決まつた。初心者でも育てやすいらしい、何より私もミカンもトマトが好きだからだ。という訳で、今日の買い物リストに

はトマトの種も含まれている。

「林檎、あつちだ」

「はいはい。あんまり急ぐと転ぶよ〜」

「おい、子供扱いするな!」

そんなやり取りをしながら、天井から吊るされた案内板を頼りに進んでいく。

その時ふと、私はあるものに気が付いてしまった。

私の前を歩くミカンは珍しくロングスカートを履いているのだが、異様にその中がもごもごと蠢いているのだ。その正体は勿論尻尾だろうが、これは非常にまずい。恐らく嬉しさのあまり、無意識のうちに尻尾が大きく揺れ動いてしまっているのだろう。このままでは周囲の人に不審に思われてしまう。

私は少し足を速めてミカンの背後に近づくと、そつと尻尾の付け根を押さえつける。

「ひゃうつ!?!」

突然尻尾を触られて余程驚いたのか、ミカンが外で出してはいけないような声出してしまった。

顔を真っ赤にして睨み付けられ、私は肩をすくめて反省の意を見せつつ、そつと耳打ちをする。

「尻尾揺れ過ぎて周りにバレそう」

その言葉に、ミカンは頬を染めたまま頷く。それと同時に、私の抑えている尻尾を意図的にきゅつと抑えたのが分かった。

無理に抑えているからなのか、恥ずかしさからなのかは分からないが、微かに尻尾が震えているのが、とても愛しく思えた。そんな尻尾の挙動を楽しんでいると、ミカンに「おい」と怒られてしまった。

「いつまで尻尾触ってるんだ」

「ごめんごめん、ミカンの尻尾が可愛くてさ」

「まったたく……」

漸くミカンの尻尾から手を離れた私は、客観的に今の行動を振り返って少し反省した。

（もしかしたら周りからは私がミカンのお尻触ってるように見えてたかも……気を付けてよ……）

一人で反省をしつつ、その後もミカンのあとをついてホームセンターを歩き回り続けた。



私は家に帰ってくるなりベッドにダイブして、大きく息を吐いた。買い物だけですっかり疲れてしまい、私はもうへろへろだった。

しかしミカンはそうではないようで、変わらずあのテンションのまま、

「ほら林檎、早くプランター作りしよう」

と、帰ってきて早々にもう作業をしようとしている。いや、本当にこんなに活き活きとしているミカンは珍しくて可愛いんだけど、流石に休ませてほしい。

その旨を正直に伝えると、耳を垂れさせながらも

「分かった……」

と了承してくれ、私の隣にごろんと寝転んでくる。大好きなミカンの香りと体温が私に安らぎをくれた。

二人でゴロゴロとベッドで寛いでいると、私はふとミカンに聞きたかったことを思い出した。

「ねえ、ミカン?」

「んー、なんだ?」

くるりと体勢を変えて、私に顔を向けたミカン。

「なんでミカンさ、急に家庭菜園したいだなんて言い出したの?」

そうだ、その理由をずっと聞いていなかったのだ。私の間に、ミカンは少し「うーん」と唸つてから、物憂げな瞳でぽつりと呟いた。

「林檎と、対等になりたかったから、かな」

その予想外の答えに、私はすぐに言葉が出てこなかった。ミカンは私に柔らかく微笑みかけながら、続けた。

「私は林檎に育てられて、林檎のおかげでこうして生きている。今私たちは家族で、同居人で、親友で恋人だけど、本来なら私と林檎は飼い主とペットだ」

「うん」

「でも、おこがましいかな。その点においても、林檎と対等になりたいと思ってしまったんだ。だから、二人で何かを育てることが出来たら、対等になれるかも、って思ったんだ」

まさかそんな事を考えているとはつゆも思わなかった。私はミカンの言葉に相槌を打ち続ける。

「このアパートはペット禁止だろう？ 覚えているよ。だからペットは飼えない」

「うん」

「子を成そうにも、私と林檎では無理だ。性別が同じだし、種族が違う」

真剣な顔でそんな事を言うミカんに驚きながらも、「うん」と続きを促した。

「だから、植物なら育てられるだろうと考えたんだ。折角なら一から育てたかった」

「それで、家庭菜園？」

私の言葉に、ミカンは深く頷いた。

「緑があると生活が豊かになると言うしな。綺麗な花でもいいと思ったが、折角育てるんだ。食べられるものの方が、林檎は嬉しいだろう?」

ミカンが揶揄うようにそう言ったので、私は顔をむくれさせた。

「もう、そんなに私食い意地張ってないよっ!」

「ははっ、悪い悪い」

私の髪を撫でながらミカンが笑う。そしてまた私をじっと見つめると、

「なあ、林檎」

と静かに私の名を呼んだ。

「なあに?」

「私を育ててくれて、本当にありがとう。今度は私と一緒に、この家で緑を育ててくれるか?」

その問いかけに、私は躊躇いなく頷いて見せた。

「勿論。二人で立派に育てようね」

「ああ。ありがとう、林檎」

そして、実ったプチトマトは美味しく頂こう。そう言うと、ミカンはふわっと笑みを浮かべた。



ひと段落つき、私とミカンはふーと息を吐いた。ベランダには気持ちの良い日光が注いでいる。

「取りあえず、これで作業は終わりかな」

「ああ。あとは種を植えるだけだ」

私は傍に置いてあつた種が入つた袋を取ると、ミカンに手渡した。ミカンはきよとんとした顔で、それを受け取つた。

「ミカンが植えて。そしたらミカンがプチトマトの親になるから」

「ふふ、なんだそれ」

私の言葉に笑いながらも、ミカンは「分かつた」と、調べたやり方通りに種を土の中に埋めた。

まだ発芽には長い時間がかかるだろう。それでも、私たちはじつとそのプランターを眺め続けた。

いつか芽生える緑が待ち遠しい。

「ミカン」

「ん？」

「二人で立派に育てようね」

「勿論だ」

顔を見合わせて笑い合い、私たちは手を繋いで室内へと戻った。
願わくば、二人で育んでく緑色が、立派に成長しますように。

君で満たされた人生

日差しのある暖かな昼下がり。私の膝に頭を乗せてうとうととしているミカンの顔を眺めていて、ふと、私の学生時代はミカン一色だったなあ。と昔の記憶が掘り起こされた。

小学生の頃は、

『林檎ちゃん、皆で放課後公園で遊ぶんだけど、くる?』

『うん。ミカンと遊ぶ』

『ミカンって誰?』

『ペットのワンちゃん』

『ふーん』

中学生の頃は、

『林檎、明日お出かけしない?』

『んー、いいかな』

『そっか……やっぱりミカンちゃんと遊ぶの?』

『うん! 桃も来る? ミカン可愛いよ!!』

『う、うーん。遠慮しておくよ』

高校時代……、

『鈴木さんってさ、その、好きな人とか……』

『いるよ?』

『っ! だ、誰……?』

『これ! ペットのミカン! 可愛いでしょ!!』

『ええ……』

大学時代でさえも……

『鈴木さくん、今日合コンあるんだけど——』

『ちよつと、鈴木さんそういうの来ない人だから』

『あ、そうなの? ごめんね』

『ううん、大丈夫』

いやあ、我ながら人付き合いを蔑ろにしすぎた学生時代だった……。

ミカンの癖のついた前髪を優しく撫でながら、私は過去の行いを大いに反省する。が、仕方がないことだったとすぐに割り切った。

だって、ミカンが可愛すぎるから!

私に尻尾をブンブン振って甘えてくるミカンが可愛かったから!!

あんなに可愛くて天使なペットがいるのに、遊びになんて行ってらんないもん!!

まあミカン曰く、私が放課後に友達と一切遊んでなかったせいで、お母さんには心配をかけてたみたいだけど……。

「んん、林檎、そんな変な顔してどうした……」

眠そうな半開きの目を私に向け、緩んだ口調でそう訊ねてくるミカン。その可愛さに胸を撃たれつつも、私はミカンの髪の毛をわしやわしやと撫で回しながら答える。

「んーん、今日もミカンが可愛いなあと思って」

「ふふ、そうか」

と、嬉しそうに頬を緩ませてるミカン。なんだこの可愛い生き物は。

お昼寝モードのミカンはふにやふにやしてて、普段と違う表情が見れる。これはまだミカンが狼だった頃から変わらない。

休みの日とか、ミカンがお昼寝するかもしれないから、ずっとミカンの傍にいたかったんだよなあ。可能な限りミカンの傍にいて、眺めて、可愛がっていたかった。

「ねえミカン」

「んん……？　なんだ？」

私は言葉の代わりにミカンに微笑みかける。すると、ミカンもふにやりと笑顔を私に向けてくれる。

この稀にしか見れない笑顔が、私は大好きだ。

「今ね、私の人生、ずっとミカンだらけだなあ。って思ってたの」

唐突にそう打ち明けると、ミカンは少し驚いたように目を見開いたが、すぐにまた閉じて私のお腹に額をぐりぐりと押し付けてくる。そして、

「悪いが、林檎はまだまだだな」

と勝ち誇ったように鼻を鳴らして見せた。私とその謎な態度に首をかしげると、ミカンは得意げに言ってみせた。

「林檎は学校やら会社やらがあるが、私には林檎しかない」

少し前まで寂しそうに言っていたその台詞は、今となっては寂しさをかけらも感じさせなかった。

「だから、私の人生は林檎100%なんだよ」

私を見つめながらそう言い切るミカンだが、私は思わず笑ってしまった。

私が笑い出したのが不服だったのか、ミカンが頭を強く膝に押し付けてくる。なんて笑うんだ、と訊いてくるミカンに、私は素直に説明した。

「だって……りんご100%って、すごいジュースみたいじゃない」

一拍静寂が広がり、顔を見合わせていた私達は、こらえきれずに同時に嘔き出した。

「あつはははは！ 確かに、ジュース、だな！」

「でしょ！ あははは、はあ、あはははは！」

くだらないことだけれど、こうしてミカンと笑って過ごしているだけで、私の人生は大いに幸せだ。

私には会社もあるし人付き合いもしなければいけないけど、それでも、私の心の中はいつでもミカン100%だ。

「あー、面白い。眠気もすっかり飛んでったよ」

「あはは、じゃあお出かけでもする？」

「お、いいな」

「よし、じゃあ支度しよっか！」

これからも絶え間なく、私の人生をミカンで満たしていこう。

君の歌声に聴き惚れる

一つのデンモクを二人で覗き込む。肩と肩がピッタリくつついた。

「ミカン、次これ歌お！」

「ん、いいぞ」

二人で身を寄せ合いながら、マイクを握りしめる。

微笑みあいながら歌声を重ねる楽しさに、私たちは夢中になっていた。



休日の昼過ぎ。私とミカンは、並んで目の前の建物を見上げていた。

「ここがカラオケか……」

「うん……私も初めて来た」

存在はもちろん知っていたが、実際に訪れるのは初めてだ。

ミカンは初めてでもなんらおかしくはないが、私に関しては、学生時代に放課後や休日に友達から遊びに誘われても断っていたため、カラオケと縁がなかった。

しかし、先日ミカンと一緒に動画サイトで音楽を聴いていて、カラオケ行ってみようという話になり、二人で初カラオケへと赴いたので。

ちなみに、ボーリングとかも行ったことがない。いつかミカンと行ってみたいなあ。そんなことを考えるとミカンが肘で突いてきた。

「こんなところで突っ立っててもあれだから、早く入ろう」

「あ、そうだね」

ミカンに促され、私たちは自動扉をくぐって受付へと近寄った。

ドリンクを片手に指定された番号の部屋に入ると、私たちはキョロキョロと室内を見渡しながら腰を下ろした。

大きなモニター、薄暗い照明、革張りのソファに、メニューが置かれたテーブル。初めての空間に、ほうと息が漏れる。意外と落ち着く。個室だからだろうか。

「これがデンモクってやつだね」

棚に置かれていたデンモクとマイクを手元に持つてくると、二人でデンモクを覗き込む。

「……ミカン、どうすればいいか分かる？」

「……分かん」

初めて触る機械に四苦八苦していると、受付で頼んだフライドポテトが届いた。ついでに店員さんに最低限の操作を教えて貰った。ひとまず届いたポテトをつまむ。

うまつ!! ちょっとつまんだら歌おうと思つてたのに、手が止まらない。

「たまにはこういうのもいいな」

ミカンもポテトを食べながら、感心したように頷いている。

「ね、美味しい! ミカン、今度家で作つてよ」

私がそうねだると、ミカンは少し考える素振りを見せた後、分かった。と微笑んでくれた。

「油分も塩分もすごいから、たまーになら作つてやるよ」

「やった!」

ミカンのお手製フライドポテトを食べながら、キンキンに冷えたビール……考えただけでよだが。

おつといけない。本来の目的を見失ってしまった。

私たちは手を拭いて、改めてデンモクに向き直った。

じゃんけんで決めた結果、私が先に歌うことになった。

「うわー、緊張するなあ」

マイクを握つてモニターの方を向く。

流れ出した前奏に、自然と体が揺れる。普段も家で音楽を聴いていると、無意識のうち体を揺らしたり、手足でリズムを取っていると、ミカンに指摘されたことがある。

「ん、この曲聴いたことあるな」

「ああ、よく私が聴いてるからね」

前奏が終わり、表示された音程バーと歌詞に合わせて歌っていく。

初めは中々難しかったが、サビに入る頃には既に私はノリノリになっていた。

あつという間に歌い終わってしまい、私は大きく息を吐きながら、ぼすんとソファに腰を下ろした。

「はー！ 楽しい!!」

ジュースを一口飲んでから私がそう言うと、ミカンは柔らかく微笑んで

「林檎、歌上手いな。歌ってる林檎可愛かったぞ」

と、べた褒めしてきた。私は恥ずかしくなって、ぐいぐいとデンモクとマイクをミカ
ンに押し付ける。急にストレートに褒めてこないで欲しい。心臓に悪いことこの上な
い……。

心臓に手を当てる深呼吸を繰り返していると、聞き覚えのある曲が流れて、顔を上げ
る。

ミカンが入れたのは、私が以前おすすめしたガールズバンドの曲だった。

「ミカン、そんなにこの曲好きだったっけ」

前奏中に私がそう尋ねると、

「この曲ってどうか……」

ミカンはモニターに視線を向けたまま、少し照れたように答えた。

「林檎がおすすめしてくれたから……」

横顔からでも分かるくらい赤くなったその頬に、静まりかけてた私の鼓動が再び早くなってしまう。

今日はなんだか、いつもよりもミカンが素直というか、可愛いというか……。これも、カラオケという初めての空間のせいなのだろうか。

ミカンの歌声に耳を澄ませながら、ぼうっとその横顔を眺めた。

「ふう……」

歌い終えたミカンがマイクをそっとテーブルに置く。そして、私の隣に腰を下ろした。

私はそんな彼女を見つめながら、ありのままの感想を伝える。

「ミカン……歌へたつぴだねえ」

「ううううるさい!!」

歌唱中も音程バーがあつちこつち行っていたし、それに焦ってさらに音程を外していた。

私の指摘にむすつと顔をしかめて、スマホで音程の合わせ方やらを検索しだすミカ

ン。なんだかその様子がとてつもなく可愛らしく思えて、私は思わずミカンに抱き着いた。

「ぐつ、なんだ林檎。今私は真面目なんだ！」

「気にしすぎ、楽しめればいいよ！ ほら、一緒にこれ歌お！」

「下手くそだと言ったのは林檎だろ！」

「下手だけど、ミカンは超可愛いし声が死ぬほど格好いいからいいの！」

「んなっ……！」

茹でダコみたいに顔を赤くするミカンにマイクを押し付けて、デンモクでデュエット曲をリクエストする。

嫌々歌っていたミカンも歌っていくうちに段々と表情が和らいで、二人して顔を見合わせたりなんかして、ノリノリになっていった。想像以上の楽しさに、私たちは夢中で歌い続けた。

また来ようね、なんてカップルみたいな会話をしながら、手を繋いで夕暮れの道を帰路に就く。

◆ カラオケ、最高に楽しかった！

「おはようっりんん……！」

「うっわ声やば」

君から滴る雫

むせかえるような熱気。肌を伝う大粒の雫。私に押し倒されて、顔を真っ赤にしているミカン。

「り、林檎……っ！」

抵抗するミカンを抑え込み、私はその胸元に顔を近づける。

芳醇ほうじゆんな香りが、私の鼻の奥を突いた。



宅配業者から荷物を受け取ってリビングに戻ると、ミカンが本から顔を上げて訊いてきた。

「お、何買ったんだ？」

「ふふん。これはね〜」

荷物の封を開ける私と、その手元を覗いてくるミカン。ガサガサと音を立てて取り出したのは、ゲーム機とゲームソフトだ。

ゲームの内容は、一時間いっときまえ前に流行った、屋内で運動ができるトレーニングゲーム。最近運動不足のせいか体力が落ちている気がするので、これで運動不足を解消しようという

魂胆だ。

隣から「林檎のことだから三日坊主になりそうだな」と余計なことを言ってくるミカンをスルーして、私はいそいそとゲームを始めるための準備を始めた。セッティングやらは説明書通りに進めると、案外早く終わった。

「よっしやー！」

私は意気込み、さっそくゲームを起動して、テレビの前に立った。ミカンは私の後ろで、ソファに座りながら眺めている。

ゲームの説明が始まり、動きやすい服装に着替えろと指示されたが、面倒くさいので無視した。ミカンに「おい」と突っ込まれるが、それも無視した。取り合えず今はお試しということで、なんとなくで出来ればそれでいい。

「お、始まるっぽいな」

画面が切り替わり、トレーニングの指示が表示される。画面上のインストラクターと同じように体を動かせばいいようだ。私はコントローラーを握りしめ、意気揚々とトレーニングを始めた。

数分後には、私は屍と化していた。

ソファにぐったりと横たわり、口からは魂が出そうになっている。自覚していた以上に運動不足だったらしく、このゲームは私にとっては過酷すぎた。

早くも音を上げた私に代わり、今はミカンがプレイしている。「お手本を見せてやる」とかどや顔で言っていたが、あれはただ私がやっているのを見て自分もやりたくなつただけだろう。相変わらずミカンは分かりやすいのだ。

ソファに横たわりながら、ミカンのトレーニング風景を眺める。私とは違って早々にへばつたりせず、汗を流しながら体を動かしている。

汗を、流しながら――。

私の眼は、気が付くとミカンの汗に釘付けになつていた。首筋を伝つて落ちる大粒の汗。うなじには髪の毛が張り付き、Ｔシャツが肌に密着しているのが見て取れる。

流石のミカンもだんだんと息が上がリ、次第に汗の量も増えていく。零れ落ちる汗を見てみると、私の理性も同時に流れ落ちていく気がした。

「ふーっ、結構疲れるなこれ」

いつの間にかミカンはゲームを終え、ソファへと寄つてきていた。ジェスチャーで端を空けると言われ、私は体を起こしてソファを半分空ける。そこへ腰を下ろしたミカンを、まじまじと見つめた。

息を切らし、顔を火照らせているミカン。汗はまだ引いていない。ミカンが動く、髪の毛の先から雫がぼたりとソファに落ちる。

そして、我慢の限界が来た。

「林檎もこんくらい——」

ミカンがこちらを向いて何か言おうとしたのを遮って、私はミカンの肩を掴んで押し倒す。覆いかぶさって距離が縮まると、ミカンの肌から立ち込める熱気が近くに感じられた。掴んでいる肩からも、じつとりとした感触が手に伝わってくる。

「ちよつ、林檎!?!」

困惑しているミカンのTシャツの下から、お腹に手を這わせた。汗ばんだ皮膚を撫でると、ミカンが「ひうつ」と可愛らしい声を上げる。

そのまま手を胸元へと上げていくと、ミカンに腕を掴んで止められた。

「急になんだ、せめてシャワー浴びてから——」

「ごめん我慢できない」

しかし、もう私は自分でこの欲望に打ち勝つことはできなかった。理性はとつくにどこかへ消えてしまっていた。

ミカンの制止を振り切って、手を無理やり胸元へ押し込む。口づけをしようとミカンに顔をぐつと近づけるが、今度はミカンが顔を覆い隠してしまった。顔を隠しているも、耳がまるで高熱を出したかのような赤さだったので、ミカンの顔色は容易に想像できた。

「林檎、頼むから……今汗臭いからあ……」

か細い声で懇願してくるミカンに、私はますます衝動を駆り立てられる。

「ミカンは臭くなんかいいよ。ほら」

そう言いながら、ミカンの胸元に顔を埋めた。顔を両手で覆っていたミカンは、そんな私を止めることができなかった。

ミカンの体温はまだ高く——もしかしたら私のせいで上がったのかもしれないが——埋めた顔にはむわつとした熱気が直に伝わってくる。鼻から息を吸い込むと、汗のしみ込んだTシャツの芳醇な匂いが私の鼻を突いた。

決して嫌な臭いではない。普段のミカンの匂いが濃くなったような、そんな匂い。

「ほら、臭くない」

私は自分の笑顔をミカンに見せつける。ますます、ミカンの顔が赤くなってしまった。

今度は、Tシャツを捲り上げてミカンのお腹を露にする。最早、ミカンは止めてこなかった。というより、止められる程の正気を保てていなさそうだった。これほどまでに恥ずかしさに顔を赤く染め上げているミカンは、そうそう見れない。だからこそ、それが私を興奮させた。

「り、林檎お……」

「大丈夫、すぐ終わるから。ね」

そう宥めると、私は再びミカンの体に手を這わせた――。

◆
むすつと顔をしかめてそっぽを向いているミカンに、私は流石に罪悪感を感じていた。

「まあその、ほら。どうせ、シたら汗かくじゃん」

「信じられん！ 嫌がつてるのに無理やり襲いやがつて」

理性のとんだ私はミカンを欲望の赴くままに襲った後、半ば放心状態のミカンを連れてシャワーを浴び、着替えさせて髪を乾かしてやっていた。ベッドの上でドライヤーで髪を乾かしている最中にミカンが我に返り、そして今、こうしてご立腹なのだ。

まあ十割私が悪いから仕方がない。

「いやだつてさあ、ミカンの色気が凄すぎたんだもん」

「言い訳になつてない！ まったく……」

かなり機嫌を損ねてしまったようだ。どうしたものかと悩んでいると、ミカンにキスを要求される。

素直に口づけしてやると、ミカンは私に抱き着いてきた。

そのままミカンを抱きかかえて、ベッドに横になる。力強く私に抱き着いてくるミカンの背中をほんぽんと優しく叩いていると、ミカンが顔を上げて私をにらみつけた。

「そのうち仕返ししてやるから、覚えておけよ」

愛しいふくれっ面に胸を昂らせながら、私はミカンの髪を撫でつけた。

「うん、楽しみにしてるね」

ミカンはその返答に、また不機嫌そうに顔をむくれさせる。ミカンのこんな顔を見れるのも、この世で私だけの特権だ。なんて最高に幸せなんだろう。愛しい同居人を抱きしめて、私は目を瞑る。

微かに鼻の奥に、あの芳醇な匂いが残っている気がした。

君の言いなりになるから

ガシャン、とキツチンに音が響いた。とつさに目を瞑り、恐る恐る目を開けると、そこには最悪の光景が広がっていた。

——やっってしまった。

一瞬にして、自分の顔が青ざめるのが分かった。

目の前に散らばっている破片は、かつてミカンのお気に入りのお茶のマグカップだったものだ。



『ほら見ろ林檎。昔の私みたいじゃないか?』

その日買い物から帰ってきたミカンは、珍しくテンションが高かった。なんでも、可愛いマグカップを見つけたらしい。

やたら楽しそうな顔でエコバッグの中をぐそぐそと探る様子を、なんだか昔のミカンがおもちや見せに来るみたいだな……と、勝手に懐かしんで眺めていたのを覚えている。

これだ！ とミカンが取り出したのは、淡いグレーのマグカップ。至ってシンプルな

デザインに見えるが、一体なぜこれをそんなに気に入ったのだろうか。

私がそう思った時、ミカンはそのコップで、中身を飲む仕草をして見せた。
すると――

「あつははははははー！」

目の前のその光景に、私は思わず吹き出してしまった。

マグカップの底には犬の鼻と口が描かれており、飲む仕草をするとまるで口元が犬になつたように見えるのだ。

得意げな顔でその状態をキープしているミカんに、私は数分間お腹を抱えて笑つていた。

やっと収まってきた頃、ミカンが懐かしそうに目を細めて

「これ、昔の私みたいじゃないか？」

と呟いたので、また脳裏に狼だった頃のミカンの姿が浮かんだ。

「ふふ、ほんとだね」

「昔の私も私だから、これ使う度に林檎が思い出しにくれたらなあ、つて」

◆
そう微笑むミカんに、胸の奥が温かくなった。

はつと我に返る。まるで走馬灯かのように、マグカップを買った日の情景がフラッ

シユバックしていた。

しかし現実逃避しても起こってしまった出来事は覆らない。

どうしよう……と一人立ち尽くしていると、物音を聞きつけて寝室からミカンが駆けつけてきた。

「林檎、なんか割れた落としたけど大丈夫か!？」

週末の昼前ということもあり、ミカンの髪には寝癖がしつかりとついていていた。恐らく、快眠していたところを物音で起こしてしまったのだろう。二重に申し訳なくなる。

ミカンは私の傍によると、怪我をしていないかを確認してきた。

「だ、大丈夫……。どこも切つてないよ」

「そうか、良かったよ。ん？ このマグカップ……」

ミカンは床に散らばった破片見ると、早くも割れたものが何かを察したようだ。

私は咄嗟に頭を勢いよく下げた。恐らく腰は90度に曲がっている。

「ごめん！ ミカンのお気に入り入りのマグカップ割っちゃった!」

頭を下げて数秒待つも、ミカンからの返答はない。そのまま恐る恐る目を開けると、私の視界に映るミカンの脚は微動だにしていなかった。

何もレスポンスがないことに、私は激しく怯えていた。まさか大激怒させてしまったのだろうか。

「ほんとにごめん、うっかり手を滑らせちゃって……」

「……」

「お、同じやつ買いなおしてくるから！」

「……」

何を言っても無言のミカンに、私の焦りは加速していく。そして、

「な、何でも言うこと聞くから!!」

そう叫び気味に言葉を放つと、漸くミカンが反応を示した。

「何でも……?」

私が頭を上げると、そこには不敵な笑みを浮かべたミカンが、目を細めて私を見つめていた。

「今、何でも言うこと聞くって言ったな……?」

「は、はい……」

焦りのあまり余計なことを口走ったかもしれない。

私は蛇に睨まれた蛙のように固まりながら、頭の中で「グッバイマイライフ」と人生を終了を覚悟した。



「ね、ねえ。本当にこんなんでいいの……?」

「いいの。お前が何でも言うこと聞くって言ったんだろ」

そうだけど……と、私は膝に乗せたミカンの頭をそつと撫でる。

命を覚悟した私の予想とは反して、ミカンが要求してきたのはただの膝枕だった。

ミカンに「ソファで膝枕してくれ」と言われたときは拍子抜けだったが、これで許してもらえるのなら安いものだ。

「なんか、もつときついこと言われるかと思った」

私がそう言うと、ミカンは可笑しそうに笑う。

「そんなことするわけないだろ。そもそも、別に怒ってないしな」

怒ってない？ ならばあの沈黙は何だったのだ。

「勝手に思い詰めて謝り倒してる林檎が可愛くてつい、な」

意地悪な笑顔でミカンはそう言った。私はなんだか恥ずかしくなって、ミカンの癖っ

毛をわしゃわしゃと撫でまわした。

「……折角だったらもつとえっちなこと強要してくれればいいのに」

「それただの林檎の欲求じゃないか」

私たちは顔を見合わせて笑った。

まだ寝たりなかったらしいミカンは、やがてうとうとし始めた。私のせいで起こしてしまつたから、私は膝の上のミカンを起こさないように、優しく髪を撫でる。

あとでミカンが起きてご飯を食べたら、二人でマグカップを買いに行こう。

「スウ、スウ、スウ……」

「ありがと、ミカン。大好きだよ」

寝息を立てるミカンの髪に触れながら、私もソファに身を委ねて目を閉じた。

君と私の母親

私はの名前はミカン。飼い主である林檎に付けられた。

大好きな林檎に付けられた名前を私は大好きだし、林檎に「ミカン」と呼ばれるのも大好きだ。この名前に誇りを持って生きている。

しかし、今ばかりは。

「貴女お名前は？」

「あ、えっと、ミカンです」

正直に名乗ってしまった事を深く後悔している。

その女性は私の名前を聞いて、懐かしい笑顔を浮かべた。



春野桃に会いに行く。

そんな不愉快な理由で昼前に家を出た林檎を見送つてから、私は一人寂しくベッドで不貞寝していた。

ソファのが日当たりも良く心地いいが、ベッドの方が林檎の匂いが強く残っている。それを嗅ぎながらゴロゴロして、寂しさの穴を懸命に埋めていた。

しかしそれでも収まらず、洗濯カゴから林檎の寝巻きを取り出してベッドへ持ち帰る。

林檎がない時に限って、林檎への想いがひどく扇情的になってしまふのは悪い癖だ。

愛おしい匂いの染み付いたそれに顔を埋めながら、イマジネーション林檎を堪能していたその時。

キンコーンと、チャイムがなった。

なんてタイミングの悪い。私の林檎タイムを邪魔するとはなんて不埒者なんだ。自分の眉間にシワが寄るのがよく分かる。

私は小さく舌打ちをすると、パーカーを羽織ってフードを深めに被る。人前に出るにはこの頭に生えた耳を隠さねばならない。

耳をなるべく平にしてフードの盛り上がりを抑えつつ、「はい」と声をかけながら玄関扉をガチャリと押し開けた。

大方、宅配か勧誘だろう。宅配ならさっさと受け取って、勧誘なら追い返そう。そして早く寝室に戻って私はイマジネーション林檎とゴロゴロするのだ。

そんな欲求に駆り立てながら対面した来訪者に、私は呆然としてしまった。

「あら？　　、鈴木林檎の家で合ってますよね？」

そこに立っていたのは、久しく見ていなかった顔。懐かしい人物。

林檎の母親、鈴木檸檬れもんだった。

檸檬は驚いた様子で、私のことを頭から足先までじつと観察してから、

「えっと、林檎はいる?」

私は動揺で震えそうになる声をなんとか押し留め、林檎は外出中である旨を伝える。すると檸檬は、

「あらそうなの。じゃあ待たせてもらおうかしら」

と言い、そして、

「貴女お名前は?」

そう、問いかけてきた。残念ながら私は、長い年月を共にしたこの名前を、咄嗟に誤魔化すようなことができなかった。

「あ、えっと、ミカンです」



リビングでお茶を飲んで一息ついてる檸檬を前に、私は内心激しく動揺していた。

檸檬が来るなんて聞いてない。いや、檸檬が来ると連絡を受けているのであれば、林檎が家を空けるわけがない。

ということとは、この人はアポ無しで来たのか!?

心臓に汗をかきまくっている私に対して、檸檬は相変わらずのんびりとした口調で訊ねきた。

「ミカンちゃん、林檎は普段どうかしら。あの子ちゃんとやってる?」

「えっと、いつも仕事帰りはぐったりしてます」

「あらあ。仕事上手くいってるって言ったのは嘘だったのかしら」

すまない林檎。お前の見栄を崩してしまった。

動揺に加え、林檎への罪悪感がのしかかり、私はもうパニックだ。

それが故に、さらに口を滑らしてしまった。

「あの子どうせ家事も出来ないでしょう。不器用なもの、普段何食べてるのかしら」

「あ、食事は私が作ってるので——」

見開かれた檸檬の目に、全身から冷や汗が吹き出した。

やってしまった。林檎は檸檬に誰かと同居してるとか話してないはずだ。どうしよ

う。どう誤魔化そう。

しかし予想に反して、檸檬は嬉しそうな声を上げて笑顔を浮かべた。

「あらあら、ミカンちゃんが作ってくれてるの? ありがとうね」

てつきり同居しているのかとか、そういう事を聞かれると思っていた私は、「あ、は、

はい」と間抜けな返事しか出来なかった。

まあ深堀されないのならば、それに越したことはない。私はそうポジティブに捉えることにした。

それにしても、流石は林檎の母親というべきか。順応が早すぎやしないか。

娘の家を訪ねたら、娘のペットと同じ名前の知らない女が出て、更に同居しているような発言まで飛び出してしまった。それなのにそれを受け入れてニコニコ笑っていられるなど、正気の沙汰ではない。いや、言い過ぎか。

とはいえ流石に、私がかつて狼だったあのミカンだと言っても理解できやしないだろうが。ひとまず、この状況をしのげればそれで良い。

檸檬はその後も、林檎に関してあれこれ訊ねてきた。

「林檎、好き嫌いしてない？」

「基本何でも食べてくれますよ。ビールを飲みすぎるので、金曜だけに規制してますけど……」

「ミカンちゃんに迷惑かけてない？」

「迷惑なんてそんな……私が林檎のことが、その、好きなので……」

「あらあら、それは良かったわ。林檎、ほとんど友達いないから。これからもずっと一緒にいてあげてね」

「はい、勿論」

なんだか段々恋人の親に挨拶している気分になってきた。あながち間違つてはないが、私も林檎と同様、檸檬のことは母親のように思っているのだ。心境が複雑すぎて笑えて来る。



かれこれ檸檬がやってきて三十分は経つただろうか。漸く檸檬の質問攻めも途絶え、私はほっと一息吐いた。

「それにしても、林檎遅いわね。どこに行つてるか知つてる？」

時計を見ながらそう言う檸檬に、私は「あつ」と声を漏らす。

「あの、ごめんなさい。林檎は今日、えーっと、友人に会いに行くと言つていたので、多分暫く帰つてこないかと……」

もっと早く言うべきだったと、檸檬に頭を下げる。しかし気にした様子もなく、檸檬は相変わらずニコニコとしている。

「あら本当。あの子が友達に会いに行くなんて……昔からミカンちゃんにべつたりだったでしょう」

「あはは、そうですね」

「母親としても心配だったから、良かったわ」

私としては良くないが。とはいえ林檎の交友関係を束縛する気はないし、林檎は私を

世界一愛してくれるという自負があるから、文句など口にしない。不機嫌になるのは許してほしい。

「そうそう私も用事があつて、ついでに寄つたのよ。ミカンちゃんと話せるのが嬉しくて、つい長居しちやつた」

檸檬はそう言うのと、慌てて手荷物をまとめ始めた。

「実はね、最近デビューした作家さんのサイン会がこの辺であつて、それに行く予定だったのよ。時間はたつぷりあるから、まだやつてるはずだけど」

なるほど、そういうことだったのか。用事ついでに林檎の顔を見ようとしたのか。母親らしいが、タイミングが悪かつたな。

私は玄関先まで檸檬を見送る。靴を履いた檸檬は、少し立ち止まって、私を振り返つて微笑んだ。

「林檎、一人で暮らしていけるか心配だったけど、ミカンちゃんが支えてくれてるなら安心ね」

「はい、ずっと林檎を支えます」

断言すると、檸檬は嬉しそうに

「そうね。昔から貴女達はずっと一緒だったものね」

と、笑つた。

——”昔から?”

そういうえば、会話の中でも何かずれていたような……。

まるで、”ペットのミカン”と”対面しているミカン”を混同させていたような……。

戸惑う私に、檸檬は悪戯っぽく囁いた。

「フードは多分何か隠したくて被ってたんでしょうけど、もう片方、隠し忘れてるわよ」
その言葉に、私は自分の背後を振り返った。

そこには、?き出しの尻尾が、垂れ下がっていた。

——尻尾をズボンの中に仕舞うの、忘れてた!!

檸檬は慌てる私を面白そうに眺めていた。不意にその手が伸びて、私の頭にポンと置かれる。

「ミカンを引き取る話が無くなったのは、こういう事だったのね」

「……」

「これからもあの子をよろしくね」

「……信じれるん、ですか? こんな事」

声が震える。しかし檸檬はあつけらかんとした様子で

「あら、だって貴女、ミカンちゃんなんですよ?」

と、昔のように撫でながら笑ってくれた。

信じてくれるなんて、受け入れてくれるなんて、思っていなかった。だって、こんな事有り得ないじゃないか。

「ミカンちゃんと話せるなんて夢みたい。嬉しいわ」

ああ、でもそうだ。この人は、私を受け入れてくれた林檎の母親なのだ。

「……うん。私も、話せて嬉しい」

”林檎の友人”のフリを辞めたら、敬語も取れてしまった。でも、いいのだ。だって檸檬は、私達の母親なのだから。

「今度はちゃんと連絡してから来るから。そしたら、三人でご飯食べましょ。ミカンちゃん、作ってくれる？」

気が付いたら、涙が零れていた。それを指で拭い、私は檸檬にまっすぐ向き合った。

「勿論。檸檬の料理を見て学んだんだ。味は違うと思うけど」

「うふふ、ミカンちゃん私のこと呼び捨てにしたのね」

怒った様子もなく、愉快そうに笑う檸檬。そういえば檸檬のことはずっと檸檬としか呼んでなかった。なにせ、檸檬と話す機会などなかったのだから、呼び方など気にしたことがなかった。

でも……うん。檸檬は私達の母親なのだから、こう呼ぶのが正しいのだろう。

「また来てくれ——お母さん」

「ええ。またね、ミカンちゃん」



檸檬が去つてから暫くして、林檎は帰つてきた。

上機嫌そうに文庫本を見せてきたから何かと問えば、なんでも春野桃は小説家で、そのサイン会に行つていたらしい。サインしている間しか話せなかつたが、春野桃も喜んでくれたらしく、林檎は嬉しそつた。

ひとしきり話し終えた林檎は不思議そうな顔をして、二つ、私に問いかけた。

「そう言えば誰か来てたの？　というか、家にしたの？」

客人用のスリッパを仕舞い忘れていて、それに気が付いたらしい。

「うん。ちよつと話せば長くなる」

「そつか。じゃあお茶しながら聞こうかな！」

「ああ」

私も早く林檎に話したい。

そして、紅茶を用意する私に、もう一つの質問が投げかけられた。

「なんで私のパジャマ、ベッドに散らかつてるの？」

……今日はなんだか、よく仕舞い忘れる日だ。

君から零れる甘え声

「ミカン、起きて」

朝日の差し込む寝室——ではなく、もう間もなく正午を迎えようとしている寝室で、私は未だ目を覚まさないミカンの身体を揺すっていた。

「んうう」

「もー、今日出かけようって昨日話したじゃーん」

「んー」

ダメだ。朝から何回かに分けて根気よく起こそうと試みているが、ミカンが目を覚ます気配は一向にない。

私は「もー！」と一人でぶうたれて、ミカンの隣にぼふんと身を放り出した。ベッドに背を預け、ぼおつと天井を眺める。窓から差し込む日差しも、寝室の照明もこんなに明るいのに、それでも起きないとは。

私はすぐ隣から聞こえる寝息に、深くため息を吐いた。

それにしても、ミカンがこんなに起きないなんて珍しい。普段は休日であっても私も早く起きるし、寝足りない時は朝食後に二度寝することが多かった。

はてさて、昨日なにか疲れるようなことがあっただろうか、昨日土曜の一日を振り返る。

……特にない。いつもと変わらないのんびりとした休日だったはずだ。

もしかして、体調が悪いのだろうか。そんな不安が通り、首を横に向けてミカンの寝顔を覗き込んだ。

……うん、実に安らかな寝顔だ。私に身体を揺すられた時に限っては、眉間にシワが寄っていたが。

なんだろう、珍しいこともあるものだ、と片付けるしかないのだろうか。うーんと唸る私を他所に、ミカンはもぞもぞと身体を動かしていた。何か夢でも見ているのだろうか。

私は寝坊の原因を探ることをやめ、身体をミカンの方にぐるりと向けた。

いやに忙しく動くミカンを眺めていると、何故か懐かしいという感情が込み上げてきた。

何故だろう、ミカンのこの現状に懐かしさは無いはずなのだが……狼女になってからは私より早起きが多かったし——ということとは。

そこで私はピンと来た。そしてその瞬間、さらに猛烈な懐かしさが込み上げてきた。思い出した！ この動きは、まだミカンが狼だった頃、よく昼寝してる時にしていた

動きだ!

そう理解するや否や、「んんん」とミカンが喉を鳴らした。ピタリと動きが止まる。起きたのかと思つたが、どうやらそうではないようだ。

私はじつと、ミカンの様子を見守る。

すると、

「……クウン」

それは、狼のミカンがよく甘える時に出す声だった。

「か、可愛い!!」

と叫びそうになるのをぐつと堪える。偉いぞ私。こんな状態のミカンを起こす訳にはいかないのだ。だって、勿体なさすぎる!!

当初の目的など放棄して、私はあまりの可愛さに悶えながらも、ミカンの動向を見守り続けた。

おそらく、狼時代の夢を見ているのだろう。人の姿から零れる狼の甘え声は、形容しがたい尊さで溢れていた。

私は幸せそうな寝顔をこちらへ向けているミカンの首元へ手を伸ばし、首の下や横あたりをワシヤワシヤと撫で回す。ここはミカンが昔甘えてきた時に良く撫でてやっていたところで、ここを撫でてやるとミカンはえらく気持ちよさそうにしていたのを覚え

ている。

案の定、ミカンの表情はますます幸溢れるものになり、あまりの愛くるしさに、私はスマホを取り出した。

ミカンの顎の下に手を添え、ミカンの緩みきった寝顔をフレームに収める。

パシヤリと音が鳴るが、あれだけ起こしても起きなかったミカンだ。勿論その程度の音では反応すらしなかった。

一日の予定をミカンの寝坊によつてずらされてしまったのだ。このくらいしてもバチは当たらないだろう。そう自分を正当化して、私は愛しい愛しい同居人の寝顔の写真を眺めた。



「おい林檎！ 待ち受け画面！ なんだこれ！」

「人のスマホ勝手に見ないでよ〜」

「うるさい！ 寝顔隠し撮りするなんて悪趣味だ！ 変態！」

非難轟々をすまし顔で聞き流す。あの時寝坊したミカンが悪いのだ。

またミカンが寝坊したら、待ち受け更新してあげるからね。

君の元カノ、私の彼女

「あ？ ”桃ちゃん”じゃん」

突如名前を呼ばれ、私はびくりと肩を震わせる。

駅前の喫煙所前は煙たくて、それが苦手で、私はいつものようにそこを足早に通り過ぎようとしていた。そんな時に、喫煙所から私を呼ぶ声が……。

私が恐る恐る振り返ると、女性が一人、タバコを灰皿に押し付けてからこちらへ向かってくる。すらつと背が高く、派手な金髪をひとつに結んでいるその人には、見覚えがあつた。

「……あれ、あつてるよな？」

不安そうに再度訊ねてきたその女性は、苺さんの元カノ——三枝柚子さんだ。

苺さんに帰りが遅くなる旨の連絡を入れ、スマホを仕舞う。

「連絡できました」

「お、んじや行くか」

そう言う壁から背を離し、私の半歩前を歩き出す三枝さん。なんでも、私とゆつくり話がしたいらしい。良い人だというのはなんとなく分かっているが、やはり見た目と

言葉遣いに、やや萎縮してしまう。

「や、この前は悪かったな。急に押しかけたりして」

肩越しにこちらをちらと見て、申し訳なさそうにする彼女に、私は慌てて否定をした。

「いえとんでもないです。その、三枝さんのおかげで、良いこともありましたから」

三枝さんの来訪をきっかけに、私達はお互いの秘密を打ち明け合い、更に親密になれたのだ。それに、こんな言い方は失礼かもしれないが、苺さんの態度を見るに、三枝さんとヨリを戻したりすることは無いだろうなど、勝手に安心していた。

「柚子でいいよ。アタシも桃ちゃんって呼んでるしな」

「分かりました……柚子さん」

そう呼ぶと、柚子さんは満足そうに頷いた。



柚子さんに連れられてやってきた場所には見覚えがあった。

「あれ、ここって……」

確か、苺さんと以前来たバーのはずだ。ここで互いの思いを伝え、晴れて私達は恋人となれた。そんな、思い出の場所だ。

でもなんで、柚子さんが私をここに……？

私が戸惑っていると、柚子さんは慣れた様子で扉を押し開ける。チリンチリンとドア

ベルが軽やかな音を奏で、それに気がついたバーテンダーさんがこちらを振り向いた。シヨツキングピンクの派手な髪の毛には、やはり見覚えがあった。

そんなこと思っていたら――

ダアン!!!

私はその場で飛び上がった。しまう。

突如として鳴り響いたその爆音は、バーテンダーさんが磨いていたグラスをカウンターに叩きつけるように置いたことによるものだった。

般若の面のような形相で睨みつけられ、私は咄嗟に柚子さんの背中に隠れてしまう。おかしい、前来た時と様子が違う!

怯える私を庇いながら、柚子さんは諭すようにバーテンダーさんに話しかける。

「バカ、勘違いすんなって。この子をよく見ろ」

そう言いながら、私を前に突き出した。眉間に皺を寄せたバーテンダーさんに再度睨めつけられる。うう……怖い……。

と、不意にバーテンダーさんの表情が憤怒から驚愕へと移り変わった。

「貴女……前来てたお客さん?」

「えっと、はい。私の事覚えてるんですか?」

特に目立つようなことはしていないと思うけれど……いや、店内で告白してたな

……。

しかしまた別の理由があるので、バーテンダーさんと柚子さんは苦笑を浮かべる。

「そりや、まあ」

「一緒に来てた相手が、な」

その言葉に、私の脳裏に苺さんの笑顔が過ぎる。「桃ちゃん」と柚子さんに呼ばれ、顔を上げた。

柚子さんは私とバーテンダーさんの間に入るように立つと、こちらを向いて改まったように口を開いた。

「アタシは三枝柚子。大学生の時の苺の元カノだ」

そして、バーテンダーさんをちらりと横目で見ると、バーテンダーは頷いて私に微笑みを向けた。

「私は宮澤花梨^{かりん}。高校生の時の苺の元カノです」

「……ええ!？」

私が困惑を隠せずにいると、柚子さんは悪戯っぽく、にやりと笑った。

「つまりここは、新田苺の毒牙にかかった同盟ってことだ」